三重県斎宮跡調査事務所年報1988

史跡　斎宮跡

発掘調査概報

平成元年３月

三重県教育委員会
三重県斎宮跡調査事務所

斎宮歴史博物館（南から）

昭和63年度発掘調査地区

はじめに

斎宮跡調査事務所としては、これが最後の年報です。

古里地区に発掘調査の最初の鍬を入れてから既に18年、国史跡に指定され、現在の場所に調査事務所・展示室を開設してから10年の歳月が過ぎようとしています。この間の発掘調査面積の総計は約 137,000㎡に達し、出土した貴重な遺物は整理箱で 8,000箱を数えます。展示室への入館者数も10月には10万人を突破しました。

今年度は、斎宮跡の保護・保存の大きな柱である保存管理計画の第2種保存地区見直しの最終年でした。昨年の夏、それまで重点的に調査してきたこの地区の調査結果をまとめるとともに、文化庁の指導を得ながら多くの協議を重ねてきました。地権者の方々との最終的な合意を目指して、地元のご理解と納得を得るべく努力を重ねています。

平成元年秋のオープンを目指して、史跡西部の古里地区に進められてきた斎宮歴史博物館(仮称)の建設工事も本年度1月をもって終了し、いよいよ来年度からは展示内装工事に入ります。同時に、博物館周辺の史跡公園整備や進入道路、アプローチ道路（古道復元）の完成も間近です。

平成元年4月1日からは、われわれの斎宮跡の調査研究も新しい建物での新体制のなかで、18年間の歴史とその成果の上に立って、新たなスタートを切ることになるでしょう。

史跡斎宮跡の恒久的保存とその現代的活用をはかり、より広範な人々から愛される斎宮跡を創造してゆくには、今後は単に考古学的な面からだけではなく、より学際的な調査研究と普及活動を充実、発展させてゆく必要があります。ひいてはそれが地域の活性化にもつながるものであるならば、われわれの使命は重大であろうと思います。

「国の光を観る」というのが観光の本義であると言います。斎宮跡が今まで以上に輝きを増すように、関係諸機関との協力の上に立って更に努力をしてゆかねばならないと思います。

この報告書を刊行するにあたり、ご指導いただいた斎宮跡調査指導委員会の先生方をはじめ文化庁、明和町等関係機関、ならびに保存・調査にご協力いただいている地元の皆様方に対し厚く御礼申し上げます。

なお、最後になりましたが、長年にわたり斎宮跡調査指導委員会の中心となってご尽力を賜りました服部貞蔵先生が昨11月19日永眠されました。所員一同心から哀悼の意を表します。

平成元年3月

三重県斎宮跡調査事務所

所長　中林昭一

目　　次

I　調査の経過……1
II　第77次調査……4
III　第78次調査……14
IV　第79次調査……25
V　第80次調査……35
VI　第76次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）……45
VII　史跡環境整備事業……58
VIII　調査事務所要覧……60

例　　言

1．本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和63年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。

2．第VI章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は、斎宮跡調査事務所が担当した。報告書については、別に明和町が発行している。

3．遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は座標北を用いた。

4．遺構の時期区分については、「斎宮跡の土師器（年報1984）」による。

5．遺構標示記号は次の通りである。

ＳＢ；建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；塀　ＳＦ；道路　ＳＸ；その他

6．斎宮跡の調査全般については、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、椙山女学園大学名誉教授久徳高文氏、国文化財保護審議会専門委員坪井清足氏、京都府立大学学長門脇禎二氏、名古屋大学教授楢崎彰一氏、名古屋大学教授早川庄八氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏、三重大学助教授北原理雄氏の指導を得た。

7．本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、中林昭一、山沢義貴、田阪仁、泉雄二、上村安生があたり、奥野実、坂真弓美、上田真登、松田早苗、中桐真紀がこれに協力した。

I 調査の経過

今年度は、第2種保存地区（通称中町裏・面積11.7ha）の見直し作業の該当年度に当たっている関係もあり、また斎宮歴史博物館（仮称）建設に伴う古里地区の調査が昨年度で一応完了したこともあって、4次にわたる計画調査のうち3次までを中町裏に集中させた。

第77次調査は、中町裏東加座地区で5月6日から7月13日まで実施した。昭和60年度の第60次調査区に北接する畑地で、1,300㎡を対象とした。奈良時代後期から平安時代後期までの掘立柱建物が18棟検出された。特に平安時代初期の5間×2間の東西棟が4棟、区画溝の方位にのる形で、等間隔に整然と建ち並ぶことが確認された。平安時代前期の廂を付けた5間×2間の東西棟と径5mを測る井戸も検出された。緑釉陶器28点の他、平安時代前期の土坑から円面硯1点が出土した。

第78次調査を7月5日から10月20日まで実施した。場所は史跡中央部近鉄斎宮駅と斎王の森の中間の水田地帯にあたる字宮ノ前地区である。調査面積は、昭和57年度の第47次調査のJ・Mトレンチを含む1,000㎡である。古里地区から古道沿いに東へ延びる奈良時代の溝SD170をはじめ11条の溝が発掘区北側に集中して検出され、その南側に平安時代前期の掘立柱建物が12棟検出された。

史跡東部の同時期の建物は、北に対して西へ偏ることが判っているが、今次検出の建物は大半が東に偏っている。これはSD170の方向と大旨一致し、史跡西部の建物の傾向と同じであることが判明した。緑釉陶器108点の他、墨書土器も8点出土している。

第79次調査は再び中町裏東加座地区にもどり、9月16日から12月5日まで実施した。昭和61年度の第66次調査区にほぼ西接し、面積にして1,500㎡である。調査区北端に予想通り東西の区画溝SD4355が検出され、約7mの空閑地をおいて南側に33棟の掘立柱建物が検出された。建物が全て3間×2間であったということ、中でも平安時代初期から前期の建物は第66次調査区では見られなかった規格性のある配置になっている点が特徴であった。出土遺物に鉄製馬具の他、ミニチュアの円面硯があり注目された。

第80次調査は第79次調査区の西方160mの所で、12月5日から3月8日まで実施した。面積1,100㎡。ここは東西の区画溝と南北の区画溝が交差する地点でもあり注目されたが、ちょうどその部分は平安時代後期から鎌倉時代前半の土坑群により大きく削平を受け、東西の区画溝も排水路工事によって削平されわずかに底0.1mを残すに過ぎない状況であった。調査区西側で奈良時代後期の南北溝を検出し、約10mの間隔をおいて平安時代後期から鎌倉時代前半の南北溝が検出された。奈良時代後期の溝が平安時代後期以降の溝に削平されたと考えると、本来そこに

約10mの南北道路があったと想定される。東西区画溝及び鎌倉時代前半の井戸から計3点の土馬が出土した。土馬はこれで25点になった。掘立柱建物は平安時代前期から後期にわたり、何度も建て替えられているが、一部第79次調査で判明した規格性のある配置に類似するものがある。

現状変更に伴う緊急調査は、近鉄保全柵、斎宮小学校給食室移転、県道拡幅等の計8件、他の9件は個人住宅の新築、増改築等に伴うもので、調査面積は総計8,820㎡である。ただし、第76－1次調査、第76－15次調査は現在も調査中であるため別途報告する。特に注目されるのは、鈴池地区の第76－17次調査で平安時代前期の大型建物が検出されたことである。一昨年度の第70－3次調査につづいて、史跡南端部で平安時代の大型建物が検出されたことは、牛葉・木葉山・鈴池地区が極めて重要な地域であることを示している。

史跡環境整備事業は、昨年度の事業地から東へ140mの上園地区で実施した。昭和58年度の第49次調査区を一部含む4,231㎡を対象とした。全面芝生広場として博物館へのアプローチ道路に沿う憩の場とした。

保存啓発事業の一環として毎年夏休みに実施している体験発掘を7月28日、29日の両日にわたり第78次調査の現場で行った。今年は上御糸小学校6年生を対象とした。

秋の斎宮跡講演会には、関西大学教授清水好子氏を招いて、「徽子女王―歌と生涯―」と題してご講演をいただいた。

一方、今年度は斎宮跡の保護・保存の大きな柱である保存管理計画の第2種保存地区見直しの最終年度であった。昨夏には、重点的に調査してきたこの地区の調査結果をまとめるとともに、文化庁の指導を得ながら多くの協議を重ねてきた。地権者の方々との最終的な合意を目指して、地元のご理解と納得を得るべく更に努力を重ねているところである。

なお、昭和54年に開設し年中無休で公開し続けてきた展示室の入館者は、10月7日ついに10万人を突破した。10万人目の幸運にあたった人に記念品を贈呈した。

最後に、昨年度1月から建設工事が開始された斎宮歴史博物館（仮称）も、その本体工事は本年1月に終わり、来年度はいよいよ開館に向けて展示内装工事に入る。平成元年秋10月オープンを目指して着々と準備が進められているところである。

昭和63年度発掘調査地区一覧

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
76－1	6ADB－A～D	4,543	63.4.1～調査中	明和町斎宮字塚山 他	明和町	町道塚山線拡幅 第3種保存地区
76－2	6ADE－F・G	300	63.4.11～63.5.9	明和町斎宮字篠林3158	長谷川清彦	個人住宅新築 第3種保存地区
76－3	6ABE	434	63.4.19～63.5.28	明和町竹川字古里554 他	明和町	古里地区整備事業 排水路新設 第3種保存地区
76－4	6ACK	18	63.7.4～63.7.6	明和町竹川字東裏354-13 他	山際敏成	個人住宅新築 第3種保存地区
76－5	6AEE－W	20	63.7.4～63.7.6	明和町斎宮字楽殿2891－2	岡田　進	個人住宅新築 第3種保存地区
76－6	6ACB－A	300	63.7.25～63.8.29	明和町斎宮字塚山3276-1 他	今西正晴	個人住宅新築 第3種保存地区
76－7	6ACM－M	185	63.8.22～63.9.9	明和町斎宮字広頭3385-2 他	明和町	斎宮小学校給食室 移転改築 第4種保存地区
76－8	6AFM－G	12	63.8.25～63.8.26	明和町斎宮字鍛冶山2736-3 他	近鉄	保全柵新設 第3種保存地区
76－9	6ACQ	175	63.9.26～63.9.30	明和町竹川字南裏144-1 他	田所　潔	住宅新築
76－10	6ABD－U	448	63.11.16～63.12.2	明和町竹川字古里579 他	池田建設	盛土 第3種保存地区
76－11	6ABE	925	63.11.15～63.12.19	明和町竹川字古里554 他	明和町	古里地区整備事業 ふれあい広場 第3種保存地区
76－12	6AEE	24	1.2.22～1.2.27	明和町斎宮字楽殿地内	明和町	町道下水管新設 第3種保存地区
76－13	6ADD－K	246	63.11.28～63.12.23	明和町斎宮字篠林3143	中西博文	プレハブ新設 第3種保存地区
76－14	6AEE－S	72	1.1.18～1.2.1	明和町斎宮字楽殿2878-3	山路松太郎	個人住宅新築 第3種保存地区
76－15	6ABF～6ABH	1,043	1.1.26～調査中	明和町竹川字中垣内369-1他	三重県	県道南藤原竹川線 拡幅 第3種保存地区
76－16	6AEK－B	37	1.2.22～1.2.23	明和町斎宮字下園2936-2	明和町	史跡公園内の便益 施設の設置 第1種保存地区
76－17	6AEV－A	38	1.3.14～1.3.20	明和町斎宮字鈴池339-5 他	永島　眷	個人住宅増築 第3種保存地区
77	6AGJ－D	1,300	63.5.6～63.7.13	明和町斎宮字東加座2451 他	山崎敬三	計画的面調査 第2種保存地区
78	6ADL－C·D·J·M	1,000	63.7.5～63.10.20	明和町斎宮字宮ノ前3054 他	明和町	計画的面調査 第1種保存地区
79	6AGG－A・B	1,500	63.9.16～63.12.5	明和町斎宮字東加座2440 他	佐々木茂他	計画的面調査 第2種保存地区
80	6AFG－F～I	1,100	63.12.5～1.3.8	明和町斎宮字西加座2696 他	山路勝司他	計画的面調査 第2種保存地区

II　第77次調査

6AGJ－D（東加座地区）

本年度第1回目の計画調査を多気郡明和町斎宮2451－1番地で実施した。当調査区は通称中町裏の中央部内に位置している。今回は、昭和60年度に実施した第60次調査区に北接する畑地を対象とした。面積にして約1,300㎡である。

第60次調査区では、平安時代初期から平安時代末期～鎌倉時代前半までにわたる掘立柱建物、塀、土坑、溝などが検出された。とりわけ、柱間が5間×2間の掘立柱建物が7棟検出されており、当該地域が斎宮寮の官衙地帯に含まれていることは間違いない。そこで第77次調査では、第60次調査区の北側で建物配置がどのような状況になっているかを把握することに主眼をおいて作業を進めた。

当調査区の地形は中央部から南へ向かってわずかに傾斜している。全体としては現地表から遺構検出面（地山）までの深度は極めて浅く、ほぼ0.2m内外におさまっているものの、南に行く程に深く、南接する第60次調査区では更に深くなるという地勢を示している。

今次の調査で検出された主な遺構は、奈良時代後期の掘立柱建物1、平安時代初期の掘立柱建物6・土坑5、平安時代前Ⅰ期の掘立柱建物3・土坑3・井戸1、平安時代前Ⅱ期の掘立柱建物3・土坑5・溝1、平安時代中期の掘立柱建物2・溝4、平安時代後期の掘立柱建物3・溝1などである。

（Ⅰ）奈良時代後期の遺構

掘立柱建物ＳＢ5209がある。発掘区の制約があって柱穴を全て検出したわけではない。南側桁行は4穴、3間分しかないため、3間×2間の東西棟である。北東隅の柱穴は現在そこにある井戸によって削平を受けているかもしれない。位置関係からいって、東の妻柱掘形がＳＥ5210の土層断面で確認されると思ったが、確認されなかった。この建物はＳＥ5210より古いのである。

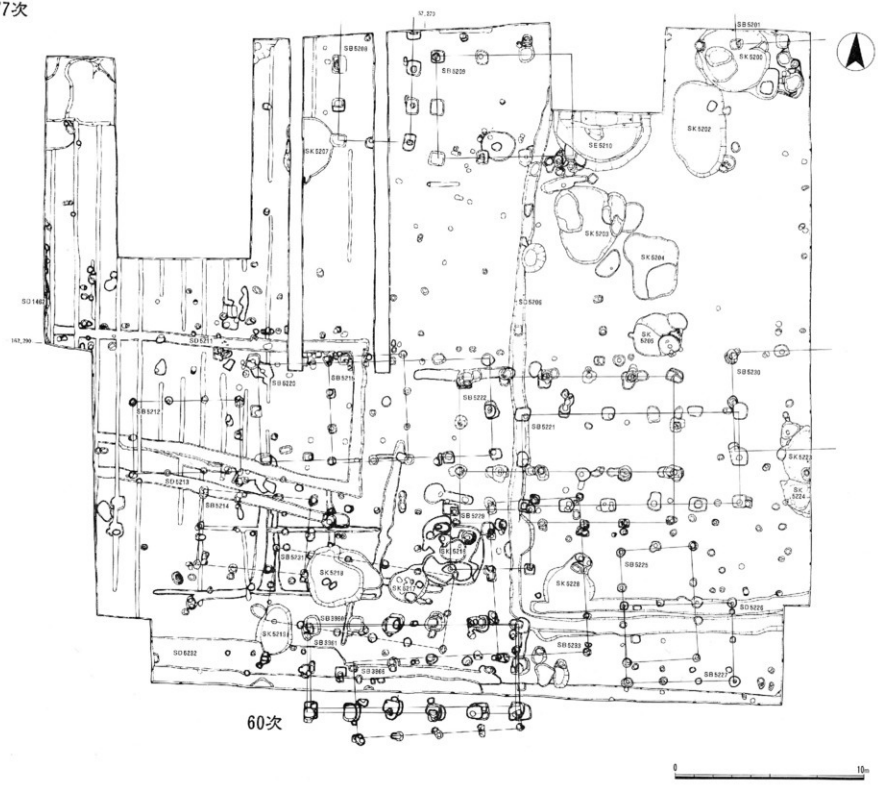
柱掘形は一辺約 0.8m、深さ 0.4mで、斎宮跡の建物掘形としては中型といえる。

（Ⅱ）平安時代初期の遺構

掘立柱建物ＳＢ5201・5208・5220・5221・5229・5230、土坑ＳＫ5202・5204・5205・5223・5224がある。

5間×2間の東西棟ＳＢ5220とＳＢ5230は、第60次調査のＳＢ1468・3984にそれぞれ対応する形で建つ同時期の建物である。これら4棟は第4図に示すように、それぞれの柱通りをそろえて等間隔に整然と建ち並ぶ。この時期の斎宮寮における官衙建物配置の一つの形態を示し

77次



第1図　第77次遺構実測図（1：200）

ている。なお、ＳＢ5221はＳＢ5230より新しい。

発掘区北側のＳＢ5208は南北棟で、桁行は３間もしくはそれ以上ある。柱掘形はＳＢ5209・5221同様に大きくてしっかりしている。一辺 0.8ｍ、深さ 0.5ｍである。ＳＢ5201は２柱穴分の検出でしかないが、このＳＢ5208と柱通りの方向が揃う可能性もあろう。

ＳＢ5221は東西棟で５間×２間、柱掘形もＳＢ5208と似る。柱通りの方向はＥ３°Ｎで、両者の棟方向がほぼ90度になるように建てられている。ＳＢ5221はＳＢ5208と同時存在した可能性は極めて高い。しかもそれは、切り合い関係などからＳＢ5220・5230よりも後の建物である。なおＳＢ5221の柱穴から須恵器杯蓋(1)が出土している。

ＳＢ5229は、現場で何度も検証を試みたが、結論として２間×１間としておきたい。SB5222の身舎南側桁行の柱掘形により切られた柱穴が３ヶ所あり、これをこのＳＢ5229の一部と考えると、規模として２間×２間にはなるが、柱間が大きく相違し、かつ後述するように、ＳＢ5222は建て替えられていると思われるため、今回は採らなかった。建物の性格も含めて今後の再検討課題としておく。

土坑ＳＫ5202は長径 5.0ｍ×短径 2.9ｍ、深さ0.45ｍで、土師器杯・皿・甕・甑・鍋、須恵器杯蓋・甕・細頸壺などの他、製塩土器も若干出土した。ＳＫ5204・5205は各々長径 3.2ｍ、2.4ｍ、短径 2.2ｍ、2.2ｍ、深さ0.15ｍ、0.2ｍで、出土遺物には土師器杯・皿・甕・台付杯、須恵器杯蓋・甕などの他、ＳＫ5205からは土錘の出土もある。ＳＫ5223とＳＫ5224は前者の方が新しい。ＳＫ5223から墨書土器、ＳＫ5224からは長胴甕・甑なども出土している。

（Ⅲ）平安時代前Ｉ期の遺構

掘立柱建物ＳＢ3961・5222・5233、土坑ＳＫ5200・5203・5218、井戸ＳＥ5210がある。

ＳＢ3961は５間×２間の東西棟で、建て替えられてＳＢ3960になる。すぐ北側のＳＢ5222も５間×２間の東西棟で建て替えられた可能性がある。ただしそのとき、南側に１間分の廂が取り付けられたと推定する。ＳＢ5222の特徴としては、柱掘形内の埋土上層に10～20㎝大の川原石が数個ずつ埋まっていたことで、これは埋め戻しの際の裏込め石ではないかと考えられる。ＳＢ5233は４間×２間の南北棟で、ＳＢ5222より新しい。

土坑ＳＫ5200は長径 3.2ｍ×短径 3.0ｍ、深さ 0.5ｍで、今次調査例中最も出土遺物が多かった。整理箱20箱分の中には土師器杯・皿・甕類の他、緑釉陶器片、円面硯脚部などが含まれている。ＳＫ5203は最低２回は掘り広げられて、結果として不整形を呈している。出土遺物には土師器杯・皿、須恵器杯・杯蓋などがある。ＳＫ5218は径 4.0ｍ×3.0ｍの不整円形である。深さは 0.5ｍ。土師器杯・高杯・皿・甕、須恵器杯蓋や灰釉陶器椀の他、黒色土器椀(20)などが出土した。

ＳＥ5210は発掘区の関係で全貌を明らかには出来なかった井戸である。現状では最大径 5.0

m、深さ 4.5mで、第31－4次調査（年報1980）で検出されたＳＥ2000を凌いでいる。時期差を無視すると、径5ｍ以上の井戸はＳＥ1405（第29次調査、年報1979）、ＳＥ1880（第35次調査、年報1980）についで3例目である。完掘できなかったことや、遺物の出土状況から、時期の判定は難しいが、ＳＥ5210は平安時代前Ⅱ期から中期の頃にはほぼ埋没していたと考えられ、機能していた時期としては平安時代前Ⅰ期の可能性がある。

（Ⅳ）平安時代前Ⅱ期の遺構

掘立柱建物ＳＢ3960・3966・5227、土坑ＳＫ5207・5216・5217・5219・5228、溝ＳＤ1462がある。

ＳＢ3960は前述ＳＢ3961の建て替えで、5間×2間の東西棟である。これに重複するSB3966は、昭和60年度の第60次調査では塀ＳＡ3966として報告（年報1985）したものだが、今次調査で4間×2間の東西棟であることを確認した。ＳＢ3960とＳＢ3966の新旧関係については決め手を欠くが、後者を新と考えたい。ＳＢ5227は3間×2間の東西棟で、柱掘形は平安時代中期の溝に削平を受けている。この建物自体、前Ⅱ期でもやや新しい時期に属する。

土坑ＳＫ5207は長径 3.0m×短径 2.5m、深さ 0.2m、ビニールハウスがあったために完掘していない。出土遺物には土師器杯・皿・甕の他、炭化物などがある。ＳＫ5216・5217・5219・5228はいずれも、ＳＢ3966の北側周辺で検出された。最大のＳＫ5216は長径 3.7m×短径 3.0m、深さ 0.3m、最小のＳＫ5217は長径 2.2m×短径 1.6m、深さ 0.2mである。これらの土坑からは土師器杯・皿・甕・甑、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・皿などが出土したほか、SK5216からは炭化物も出土した。

溝ＳＤ1462は調査区北西壁際でわずかに検出したものだが、位置関係からみて第60次調査で検出された溝の続きと考えられる。第60次調査ではこれを鎌倉時代前半の溝としており、その下層に平安時代前Ⅱ期の溝の痕跡をとどめるものであった。

（Ⅴ）平安時代中期の遺構

掘立柱建物ＳＢ5212・5225、溝ＳＤ5211・5213・5206・5226がある。

ＳＢ5212は3間×2間の東西棟、ＳＢ5225は同じく3間×2間の南北棟である。両棟は約26mの距離を以て東西に離れているが、柱通りの方向は大旨一致している。前者はＳＤ5212・5213と重複している。溝の方が新しい。また後者ＳＢ5225もＳＤ5206・5226と重複し、これも溝の方が新しく、ＳＢ5225の柱掘形を削平している。

溝ＳＤ5211は幅0.7m、深さ0.2mで、大きくコの字形に曲がる。その南側に並行するＳＤ5213は幅 0.7m、深さ0.15mである。調査区東側を大きくＬ字形に走るＳＤ5206は一部並走するＳＤ5226より新しく、幅 0.6～0.9m、深さ 0.1mである。ＳＤ5226は幅 0.8m、深さ 0.2mである。中期になって溝が4条現われるのは、このエリアの土地利用に1つの変化があったと考

えてよい。

（Ⅵ）平安時代後期の遺構

掘立柱建物ＳＢ5215・5214・5231、溝ＳＤ5232がある。

ＳＢ5215は３間×２間の南北棟で、後Ⅰ期としておく。

ＳＢ5231は５間×２間の東西棟で、この柱通りの方向は、第60次調査で検出された同時期のＳＢ3970と同じである。２棟間の距離は約16ｍ。ＳＢ5231・3970は共に後Ⅱ期の建物である。

ＳＢ5214は３間×２間の東西棟だが、明確な判定材料を欠く。

ＳＤ5232は幅 0.6～1.7ｍ、深さ 0.1～0.05ｍで、東へ行く程狭くなる。出土遺物は多くないが、後Ⅰ期としておく。

（Ⅶ）遺　物

出土遺物は整理箱に約80箱ある。うち４分の１がＳＫ5200出土である。ＳＫ5200の遺物の大半は土師器の杯・皿・甕類である。

この時期の土師器杯・皿は従来から報告（年報1984）しているように、奈良時代的な要素を持つＣタイプは姿を消し、ＡタイプとＢタイプに分類される。器面の調整はｅ手法である。（21～23）はＡタイプの杯、（24～27）はＢタイプの杯である。

杯は口径の大きさでそれぞれ更に４分類できようが、最小径のものは省いた。（21・24）は口径12.6㎝、（22・25）は13.6～14.0㎝、（23・26）は16.6～17.6㎝である。(27)は大型品で21.4㎝ある。

皿についても、（28・29）はＡタイプ、（30・31）はＢタイプである。（28・29）は口径16.4㎝で、前代に引き続き16～17㎝のものが主流を占める。(30)は口径13.4㎝、(31)は18.4㎝である。

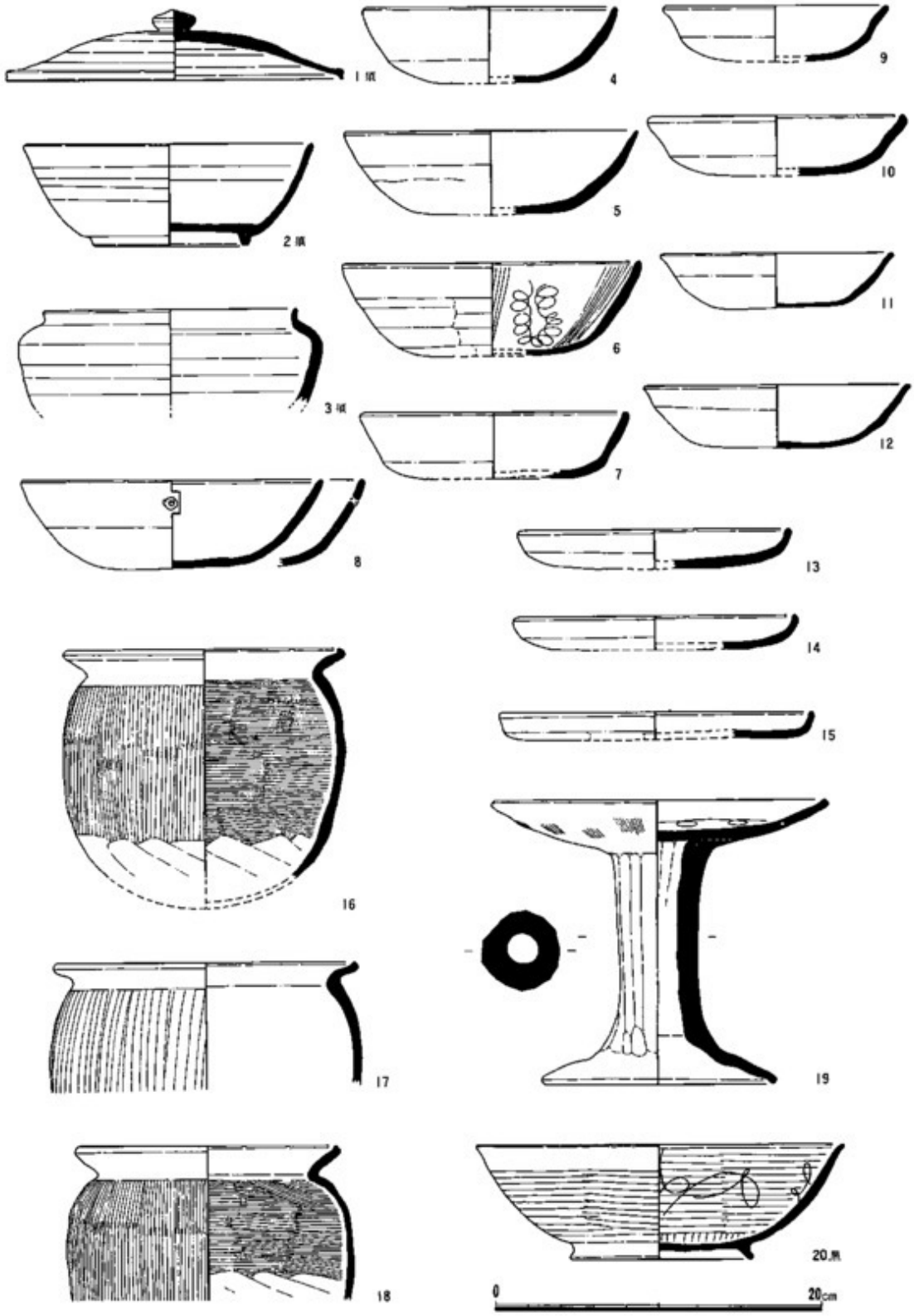
台付杯（32）は外部底面へラケズリのあと粗いミガキを施し、体部にもミガキを施している。口縁部内面には放射状の暗文が巡り、そこから底部にかけて大小の螺旋状暗文を交互に、かつシンメトリカルに配置している。口径は21.0㎝、高さ 6.4㎝、高台径13.0㎝である。

土師器甕の中で特に小型のものを図示した。（35）は口径10.2㎝、器高 7.1㎝で、器壁は相当に火を受けて毀損著しい。

特殊遺物として（34）がある。かつて第39次調査（年報1981）のＳＫ2250で出土したものと類似している。いわゆる底のない、鍔付き円筒状の土器である。上部をジョイント部と想定すると、給排水用の土管が頭に浮かぶ。

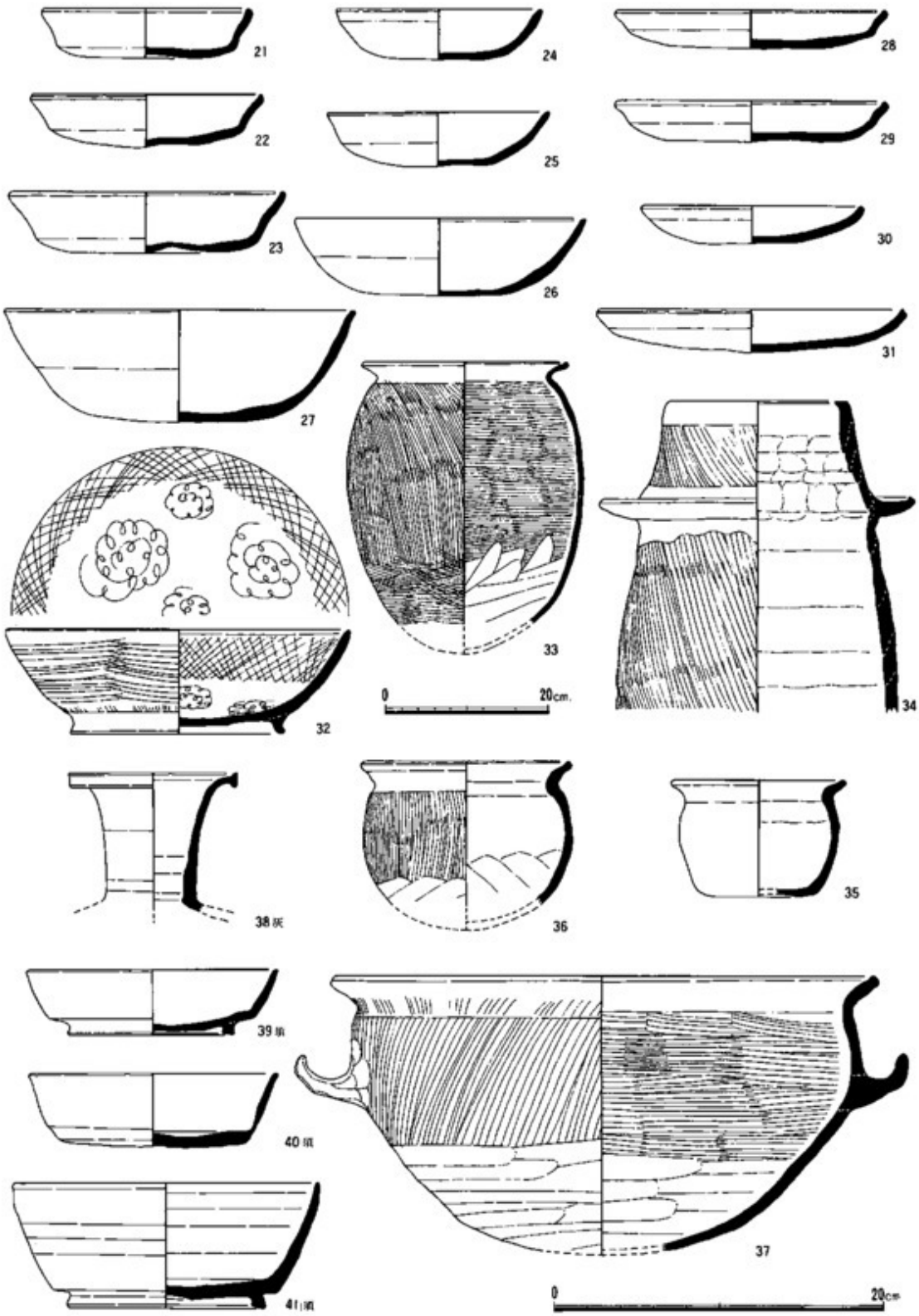
ほかに円面硯の脚部破片も出土している。口径等は復元しがたい。

ＳＫ5218出土の黒色土器椀(20)は口径22.4㎝、器高 7.1㎝である。黒色土器はＳＫ5228からも出土している。



第２図　第77次出土遺物

ＳＢ5221；１、ＳＫ5202；3・4・7・8・10・13・18、ＳＫ5203；19、ＳＫ5204；2・5・6、
ＳＥ5210；9・11・12・17、ＳＫ5205；15・16、ＳＫ5223；14、ＳＫ5218；20



第３図　第77次出土遺物　ＳＫ5200:21～41（33は１：８）

ＳＫ5202出土の土師器杯（８）はいわゆるＢタイプで、口径18.4㎝、器高 5.4㎝、焼成後に口縁部の内側から径 3.5㎜の穴を穿っている。反対側にもう１穴あったか否かは欠失していて不明である。

このほか緑釉陶器の破片28点、ミニチュアの灰釉陶器瓶、判読できない墨書土器などがある。

（Ⅷ）まとめ

第62次調査（年報1985）で奈良時代後期の掘立柱建物が６棟検出されている。その西方 150ｍに位置する今次調査でも同時期のＳＢ5209が１棟ではあるが確認されたことは１つの収穫であった。

今次調査のもう１つの成果は、第４図に示したように、平安時代初期に属する５間×２間の東西棟の規格性のある配置が確認されたことである。４棟の東西間は約12ｍ、南北間は約20ｍで、桁行柱通りの方向はＥ5°Ｎである。これは中町裏における区画溝の方位に沿うものである。この傾向は、昨年度総括的に報告した（年報1987）第51次・61次・73次調査における奈良時代末期から平安時代初期の５間×２間の東西棟（６棟）でも、建物相互の間隔は相違するものの、既に確認されている。

５間×２間の建物に限らず、中町裏の区画溝内部に検出される規格性をもつ建物配置については、建物の性格をも含めて、総合的かつ重点的に調査研究すべき時期にきていると思う。

諸説ある「斎宮寮成立」の時期に関しては、発掘調査の成果からは今はまだ何も言える段階にはないが、少なくとも、聖武朝の井上内親王（721年ト定、727年群行）の時には成立していたことは、文献上明らかである。ただ、規格性のある遺構の存在が顕著な中町裏の調査について言えば、奈良時代後期から平安時代初期における斎宮寮設置時期の実年代策定が当面の課題としてあろう。

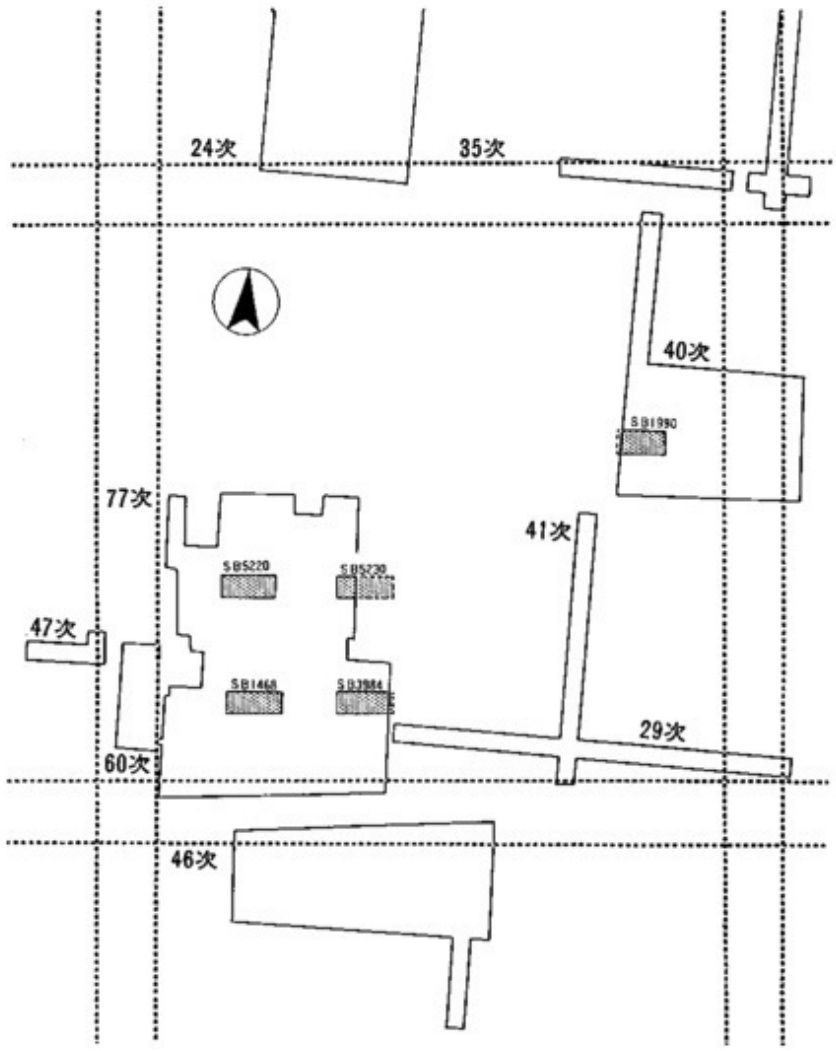
中町裏における区画溝の初現を奈良時代後期の何時の頃に比定するかが大きな課題のひとつであるが、それを今仮に『続日本紀』における遣斎宮使の初見、すなわち 771年（光仁朝）にスライドさせて考えるとすると、例えば今次調査で奈良時代後期としたＳＢ5209やそこから東150ｍで実施した第62次調査のＳＢ4120・4121などは、光仁朝の斎王酒人内親王(772年ト定、774年群行）の時の建物であるという可能性が考えられる。

光仁朝は、称徳・道鏡による仏教政治を排除しつつ、いわば神祇祭祀の立て直しを推進した時代であってみれば、いわゆる神道の自覚（高取正男『神道の成立』平凡社、1983年）のもとに、それまでしばらく閉鎖状態のままであった斎宮寮を心機一転、過去にもまして整然と造営し直したということは、想像するに難くないのであり、むしろ当然のなりゆきであった。

しかし酒人内親王の在勢期間は短く、井上廃后、他戸廃太子の死（775年）、酒人内親王宮への牙水角一口奉入（778年）、娘の朝原内親王誕生(779年）など、諸般の事情を考慮すると、

775年から777年までのいずれかの年に任を解かれて帰京したと考えられる。ところが、785年に次の斎王朝原内親王が群行するまでの間に、775年、777年にはなお斎宮寮頭（長官）任命があり、781年にも斎宮寮実在の記事が『続紀』に見え、斎王の名はない。やむをえず『一代要記』が記す浄庭女王をもってその空白を埋めるとしても、件の記事は「宝亀3（772）年4月29日これを祭る」としている点で、浄庭を酒人につづく奈良時代最後の斎王として確定するにはなお問題はのこる。

従来、奈良時代末期から平安時代初期に位置付けてきた上記中町裏の掘立柱建物については桓武朝の朝原内親王（785年群行、796年退下）、布勢内親王（797年卜定、799年群行、806年退下）あたりの時代を一応想定しながらも、今後更に再検討しなければならない。



第4図　規格性をもつ建物配置（模式図）

III　第78次調査

6ADL－C・D・J・M（宮ノ前地区）

本年度第2回目の調査として実施した第78次調査は、宮域のほぼ中央の字宮ノ前地区で実施したもので、調査面積は約 1,000㎡、現況は水田である。

今回の調査は、昭和57年度に実施した第47次調査のJ・Mトレンチを含む範囲で実施した。J・Mトレンチは幅4ｍ・長さ37ｍの東西方向のトレンチであるが、この調査はこれまで地元では『斎王の森の南の水田部分は土取りでほとんど消滅している』との話もあり、遺構の保存状況を確認することが目標であった。その結果、掘立柱建物8棟、溝3条、井戸1基が見つかっている。今回はこの水田部分を面的に調査して第47次調査で確認された遺構がどのように拡がっているか、また、古里地区から塚山地区の古道沿いに延びる奈良時代の溝SD170の延長部の有無についてその状況を把握するために実施した。

今回の調査区は付近の水田地帯の中でも一番低いところにあたる。土取りの撹乱をなるべくさけるために、事前に小さな試掘坑を周辺に19ヶ所設定して発掘する場所を決定した。その結果一部で深い土取り痕があるものの、遺構の保存状況は大旨良好であった。

当該調査区の基本的層序は第1層;暗灰褐色土(耕作土)、第2層;褐色土であり、地山面までの深さは 0.2～0.25ｍである。検出した主な遺構には、奈良時代前期から中期の溝1、奈良時代後期の土坑2、平安時代初期の土坑1、平安時代前期の掘立柱建物10・土坑6・溝2・塀1、平安時代中期の掘立柱建物2・溝1、平安時代後期の土坑2・溝4、時期不明の溝2がある。

（I）奈良時代中期から後期の遺構

この時期の遺構には溝SD5266がある。

発掘区の北半の遺構はほとんどが溝であり、その一番南に位置する東西溝がSD5266である。SD5266は、幅 0.9ｍ、深さは西で 0.2ｍ・東で 0.5ｍあり、東の方が溝底レベルは低くなっている。溝の向きは東で南へ16°振れている。溝の埋土は下層より黒褐色粘質土・黒褐色土・黒灰色土・黒灰褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・灰褐色土である。上層の暗褐色土中より、土師器甕・竈が出土しており、この溝は奈良時代中期には相当量埋没しており、後期に完全に埋没したと考えられる。他に出土遺物は、土師器杯・皿・高杯、須恵器甕・長頸壺・壺・蓋などがある。

（II）奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には土坑SK5250・5253がある。

SK5250は、発掘北端で検出された土坑で南をSK5251に切られる。南北3ｍ、東西 2.8ｍ

第5図　第78次遺構実測図 (1：200)

の楕円形の土坑で深さは 0.1m前後と浅い。埋土からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕・杯蓋が出土している。SK5253は南北 0.4m、東西 0.8m、深さ 0.1mの土坑であるが、土師器甕が横たわっていた。

（Ⅲ）平安時代初期の遺構

この時期の遺構には土坑SK5269がある。

SK5269は、発掘区のほぼ中央に位置し、その埋土の一部はSB5271に切られる。東西 2.5m、南北 2.4m、深さ 0.1mのほぼ方形の土坑である。埋土からは、土師器杯・皿・甕、製塩土器が出土している。

（Ⅳ）平安時代前期の遺構

この時期の遺構は大きく3期に分かれる。斎宮跡土師器編年の標識遺構（年報1984）であるSK1424→SK3127→SK2650に相当する時期である。SK1424に相当する時期を前Ⅰ期、他を前Ⅱ期としてまとめる。

前Ⅰ期SK1424に相当する時期の遺構は、掘立柱建物SB5271がある。

SB5271は発掘区中央西寄りに位置している。3間×2間の東西棟の建物である。柱掘形は0.6m前後で方形である。西側からの柱抜き取りが認められる。

前Ⅱ期のうちSK3127に相当する時期の遺構は、掘立柱建物SB2873がある。

SB2873は発掘区南東隅で確認されたものである。土取りによる撹乱のため、建物の全容は明らかでないが桁行3間以上×2間の東西棟の建物が考えられる。第47次調査の際には、検出された柱穴を西側柱列とみなし、東側柱列は土取りにより消滅していると考え南北棟の建物を想定しているが、今回の調査により東西棟の建物に変更する。

前Ⅱ期のうちSK2650に相当する時期の遺構は、掘立柱建物8・土坑5・溝2・塀1がある。

掘立柱建物は北から、SB5270・5272・5273・5274・2869・5275・2866・2867がある。このうち、SB2866・2867・2869は第47次調査の際に確認されていたもので、今回の調査で建物の規模が明らかとなった。

SB5270は発掘区中央西寄りに位置する5間×2間の東西棟の建物である。北側は土取りの撹乱をうけており、一部柱穴が確認できなかった。前代の建物同様に柱掘形は 0.6m前後の方形のものである。確認された柱痕跡は径 0.2m前後である。

SB5272・5273・5274は建て替えと考えられ、SB5273→SB5274→SB5272の順を確認している。桁行は、SB5272・5273が5間、SB5274が4間を確認している。土取りの撹乱のため全容は明らかでないが、いずれも5間×2間の東西棟の建物が考えられる。SB5272は、南面と西面に廂がある。柱掘形は 0.8mの方形を示し、廂の柱掘形はひとまわり小さく 0.6mである。柱痕跡は 0.3mである。北面と東面にも廂がつくか否かは、土取りの撹乱と発掘区外のた

め不明である。

ＳＢ2869は、第47次調査では、ＳＢ2870の建て替えとして考えられていた建物である。しかし、今回の調査ではＳＢ2870は建物としてまとまらないことが確認された。また、建物の規模も桁行5.4ｍ、梁行3.6ｍの3間×2間であることが確認された。今回の調査で一番小規模の建物である。なお、柱掘形の切り合い関係より、ＳＢ5274より新しくＳＢ5272より古いことが確認されている。

ＳＢ5275は発掘区南西隅で確認された建物で東側柱列のみが確認されている。柱間は 2.0ｍである。南北棟の建物が考えられる。

ＳＢ2866・2867は、第47次調査で確認されていた建物である。ＳＢ2866は３間×２間の東西棟の建物である。南側柱列は土取りの撹乱のために消滅している。ＳＢ2867は５間×２間の東西棟の建物の東面に廂がつくものである。柱掘形は方形で0.9ｍ、柱間は桁行2.4ｍ、梁行 2.2ｍで廂の柱間も同様である。今回の調査で一番大型の建物である。

土坑には北からＳＫ5251・5259・5263・5265・5267がある。

ＳＫ5251は東西3.4ｍ、南北2.6ｍの不整楕円形で、深さは0.1～0.2ｍと浅い。土師器杯・皿・甕、須恵器甕・杯蓋、灰釉陶器椀、製塩土器が出土している。

ＳＫ5259・5263は、東西1.0ｍ前後、南北0.5ｍ前後の土坑で、土師器杯・皿、須恵器甕、灰釉陶器椀・段皿が出土している。

ＳＫ5265は北側をＳＤ5264に切られているが、2.0～2.5ｍ前後の不整楕円形の土坑で、深さは0.2ｍである。土師器杯・皿・甕、須恵器甕・壺、黒色土器椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀・皿、製塩土器が出土している。特に緑釉陶器は破片で16片も出土している。また、口縁部のみの破片であるが、土師器のミニチュアの甕が出土している。

ＳＫ5267は土取りのために撹乱をうけていたが、一辺 2.0ｍ前後の方形の土坑である。深さは0.2ｍと浅い。土師器杯が出土している。

溝にはＳＤ5260・5264がある。

ＳＤ5260は幅0.6ｍ、溝底レベルは西の方が0.1ｍ程低い。東で南へ14°振る東西溝である。土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀・壺が出土している。

ＳＤ5264は幅0.7ｍ、溝底レベルは東の方が0.1ｍ程低い。西ではＳＤ5266を切っており、東ではＳＤ5262に切られている東西溝である。溝の向きは東で南へ8°振っている。土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・段皿、緑釉陶器、製塩土器が出土している。

塀ＳＡ2871は、第47次調査でＳＢ2871と考えられていたものであるが、建物としてまとまらないので塀と考えた。

また、前期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断し難いものにＳＫ5258、ＳＤ5254があ

る。ＳＤ5254は、幅0.5ｍ、溝底レベルは東の方が0.1ｍ程低い。東で南へ16°振る東西溝である。

（Ⅴ）平安時代中期の遺構

斎宮跡土師器編年の標式遺構であるＳＥ3134の時期に相当するもので、掘立柱建物ＳＢ2872・5276がある。

掘立柱建物は発掘区南東隅で確認されているものである。ＳＢ2872は第47次調査で確認されていたものであるが、今回の調査で建物の規模が明らかとなった。桁行9.5ｍ・梁行4.2ｍ、5間×2間の東西棟の建物となり、第47次調査より規模が大きくなった。

ＳＢ5276は北側柱列のみが確認され、発掘区南へ延びる建物である。ＳＢ2872の南側柱列の一部と重複するが、前後関係はＳＢ2872→ＳＢ5276である。

（Ⅵ）平安時代後期の遺構

斎宮跡土師器編年のＳＥ2000からＳＫ1730・1074に相当する時期の遺構をこの時期のものとしている。前者を後Ⅰ期、後者を後Ⅱ期としてまとめる。

後Ⅰ期、ＳＥ2000の時期に相当する遺構には、土坑1と溝2がある。

ＳＫ5261は東西1.6ｍ、南北0.8ｍの楕円形の土坑である。深さは 0.3ｍである。土師器杯・甕が出土している。

ＳＤ2865は第47次調査で確認されている溝で、幅0.5ｍ、深さは0.05ｍ程と非常に浅い。ほぼ南北に延びる溝で、土師器杯、須恵器甕、製塩土器が出土している。

ＳＤ5262は幅0.7ｍ、溝底レベルは東の方が0.3ｍ程低い。東で南へ13°振る東西溝である。土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀が出土している。

後Ⅱ期、ＳＫ1730・1074に相当する時期の遺構には、土坑1、溝2がある。

ＳＫ5252は発掘区北東で確認された溝状の土坑で、土師器杯、須恵器甕、製塩土器が出土している。

溝には、ＳＤ5256・2864がある。

ＳＤ5256は東で幅1.0ｍ、西で何条にも重なって幅2.0ｍとなる。溝底レベルは、東の方が0.2ｍ程低い。東で南へ16°振る東西溝である。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・壺が出土している。

ＳＤ2864は発掘区南西隅で南北に延びる溝で、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍと浅い溝である。土師器杯・甕、灰釉陶器椀が出土している。

（Ⅶ）その他の遺構

鎌倉時代以降の溝としてＳＤ5255・5268がある。いずれも発掘区北半にある浅い溝である。

（Ⅷ）遺　物

調査面積の割には遺物の出土量は多くなく、すべてを合わせても整理箱で60箱しかない。遺

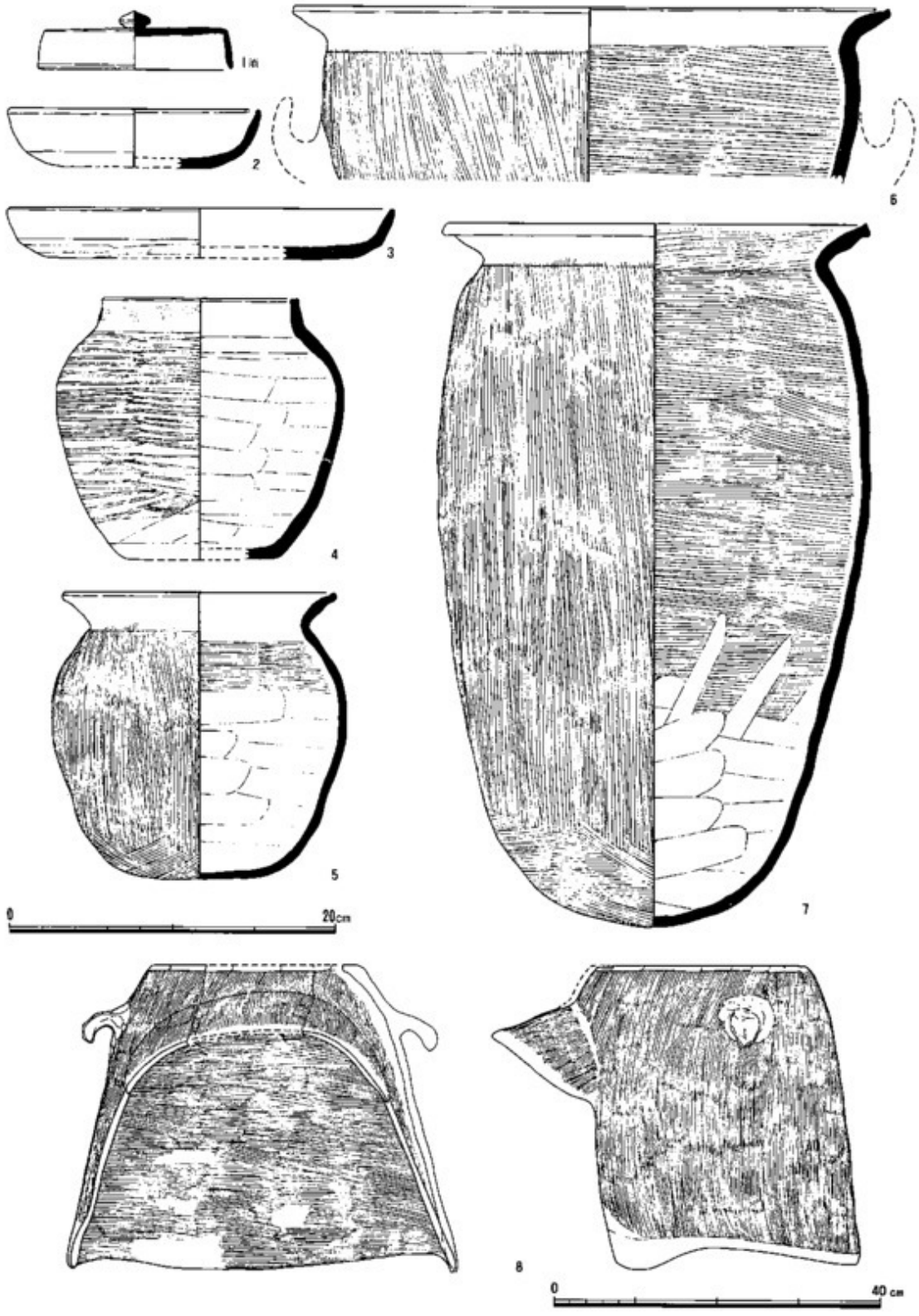
物の時期は、奈良時代中期から平安時代後期のもので、溝からの出土遺物が大半である。鎌倉時代以降の出土遺物はほとんど見られない。特殊な遺物としては、緑釉陶器が 130点、墨書土器８点、朱の付着した土器１点、砥石１点、奈良時代後期と思われる丸瓦・平瓦の破片６点がある。特に調査面積の割に緑釉陶器の出土が多く、陰刻花文を施したものが２点見つかっている。いずれも、陰刻花文の特徴から黒笹90号窯の時期に相当するものである。以下、比較的まとまった資料の得られた遺構の出土遺物について概述する。

溝ＳＤ5266より出土した遺物は、土師器杯・皿・高杯・甕・把手付鍋・薬壺・竈、須恵器甕・長頸壺・壺蓋等がある。

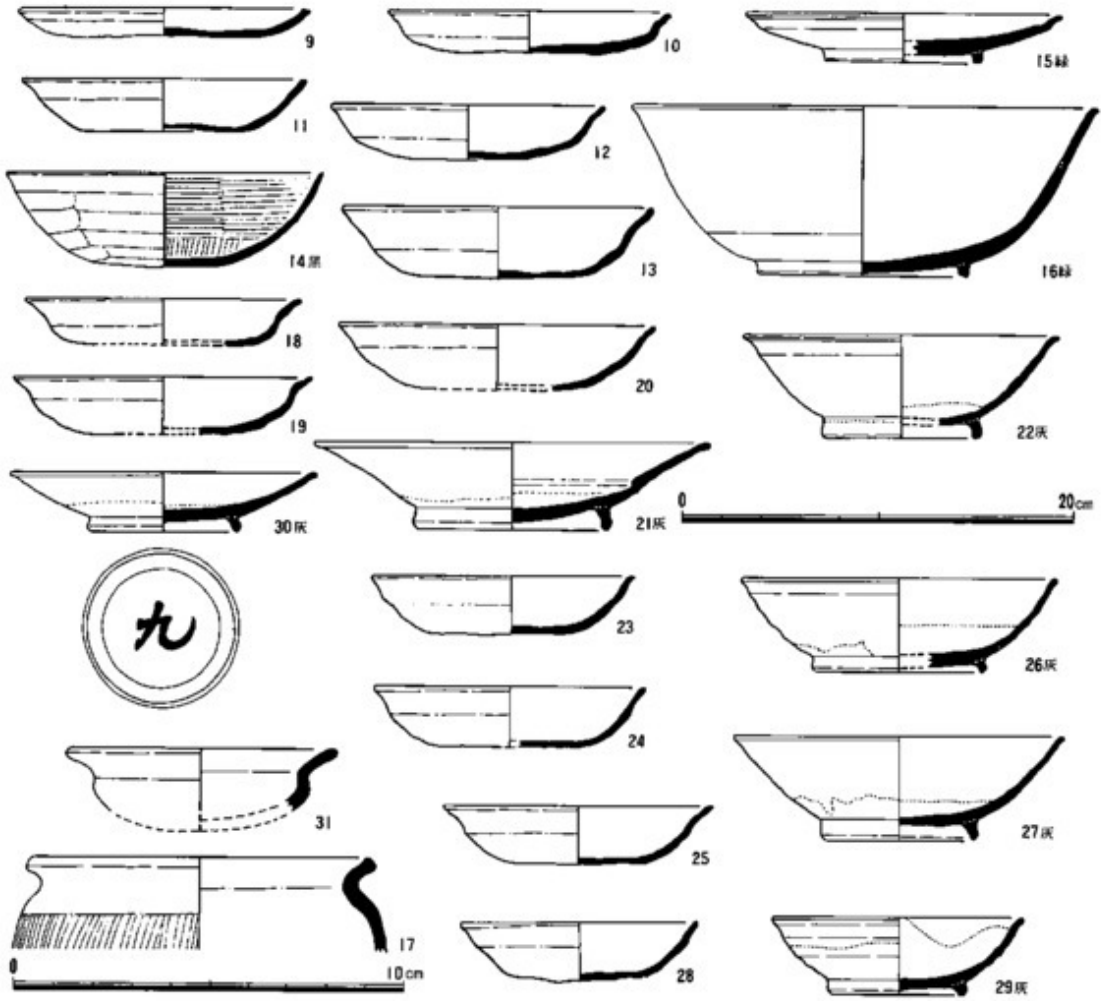
杯(２)は口縁部をヨコナデし、底部をナデで調整するｅ手法のものである。口径15.4㎝、器高 3.6㎝である。杯には、口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするｂ手法のものも見られ、奈良時代後期でも新しい要素のｅ手法のものと奈良時代的なｂ手法のものが混在している。

皿（３）は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリで調整するｂ手法のものである。口径23.6㎝、器高 3.1㎝で法量としては大型のものである。甕は口径と器高がほぼ同じ甕（５）と口径に対し器高の高い長胴甕（７）がある。（５）は口径16.6㎝、器高17.5㎝、乳褐色で体部がずんぐりとした球形のものである。器面の調整は、外面を細かいハケメ調整し、底部もハケメ調整する。内面は体部の上方を横方向のハケメ調整し、底にかけては横方向のヘラケズリを施している。（７）は、口径25.4㎝、器高43.4㎝、乳褐色で外面にはススの付着が見られる。ほぼ完存で、竈（８）と同時に出土している。器面の調整は、外面を細かい縦方向のハケメ調整し、底部もハケメ調整する。口縁部内面にはヨコハケメの調整がわずかに残っており、胴部は上半をヨコハケメ、下半をヘラケズリで調整する。鍋（６）は口径36.6㎝と大型のもので把手の付くものである。外面は縦方向に、内面は横方向に粗いハケメ調整を施している。薬壺(４)は口径12.2㎝、器高16.0㎝、赤褐色で焼成も良好のものである。器面の調整は、外面を細かい縦方向のハケメ調整したのち、下半部にヘラケズリを施し、最後に粗いヘラミガキを施している。内面は横方向のハケメで調整している。薬壺には、口径12㎝前後で球形の体部に把手の付くものがもう１点出土している。竈（８）は、器高が38㎝前後でほぼ完形のものである。外面は縦方向、内面は横方向の粗いハケメで調整している。一部にススの付着が残っている。須恵器壺蓋（１）は、径11.8㎝、器高は 3.6㎝、ロクロ回転は上から見て逆時計まわりである。外面上部は端までロクロケズリされている。ＳＤ5266出土の遺物は、杯に奈良時代後期でも新しい様相が見られるが大半は中期、あるいは中期から後期にかけてのものである。また、特殊なものとして、ミニチュアの土師器鉢（31）が出土している。口径は推定で 6.8㎝である。

土坑ＳＫ5265出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、須恵器甕・壺、黒色土器椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀・皿、製塩土器がある。



第６図　第78次出土遺物　ＳＤ5266；１～８（８は１：８）



第７図　第78次出土遺物　ＳＫ5265；９～16、ＳＤ5264；18～22、ＳＤ5260；23～27、ＳＤ5262；28・29、包含層；30、ミニチュア土器（ＳＫ5265；17、ＳＤ5266；31）（１：２）

土師器杯（11～13）は、いずれも口縁部をヨコナデし、底部を指押さえのあとナデるｅ手法で調整される。口径によって、口径14cm前後、器高３cm前後の小型のもの（11・12）と口径16cm前後、器高 3.5cm前後の大型のもの（13）に分れる。皿（９・10）も杯と同じくｅ手法で調整される。甕（17）は口径 8.6cmのミニチュアの甕である。黒色土器椀（14）は、口径16.2cm、器高 4.5cmで外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされ一部暗文が残っているようであるが、はっきりしない。内面のみ黒色の黒色土器Ａ類である。緑釉陶器椀（16）は、全面に明薄緑色に発色する釉が掛けられている。硬質のもので素地は淡灰色である。同じく皿（15）も全面に明薄緑色に発色する釉が掛けられ、硬質のもので素地は淡灰色である。いずれも猿投窯産のものと考えられ、黒笹90号窯期のものである。

溝ＳＤ5264出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・段皿、緑釉陶器、製塩土器がある。杯（18～20）は、いずれもｅ手法で調整されている。口縁部が外反する（18・19）とま

っすぐにのびる（20）がある。灰釉陶器段皿（21）は、口径20.4cm、器高 4.4cmで、淡灰色の胎土に淡灰緑色に発色する釉がハケ塗りされる。底部はヘラケズリの後ナデられており、回転糸切痕は消えている。灰釉陶器椀（22）は白灰色の胎土に淡白緑色に発色する釉がハケ塗りされている。いずれも黒笹90号窯期のものである。

溝ＳＤ5260出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀がある。

杯（23～25）は、器高は３cm前後であるが口径は14cm前後のもの（24・25）と13cm前後のもの（23）に分れる。これらは、斎宮跡土師器編年の標式遺構のＳＫ2650の時期に相当するもので、いずれもｅ手法で調整されるが、（23）はヨコナデの範囲が口縁の$\frac{1}{4}$程と狭く、（24）は口縁端部が面をなすやや異った様相を示す。灰釉陶器椀（26・27）は、口縁端部の外反も弱くなり、高台の外面の稜もややはっきりとしなくなってきているが、ハケ塗りで施釉されており黒笹90号窯期でも新しい時期に相当する。

溝ＳＤ5262出土の遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀が出土している。

杯（28）は、ｅ手法で調整されるもので、灰釉陶器椀（29）と重なって出土している。（29）は、回転糸切痕は消しているが、ツケガケにより施釉されている。東山72号窯の時期に相当するものである。

その他の遺物として８点出土している墨書土器のうち判読できるものとしては、灰釉陶器皿（30）の底部外面に「九」と墨書されているものがある。

（Ⅸ）まとめ

今回の調査では、現状が水田である低地にもかかわらず、多くの遺構が確認された。

ＳＤ5266は、奈良時代の溝ＳＤ170の延長にあたるものである。この溝は、古里地区から塚山地区の古道沿いに延びるもので、これまで９ヶ所の調査で確認されているものである。総延長は 730m以上におよぶ。今回の調査では、溝底レベルは東の方がわずかに0.1m程度低かったが、いずれの方向に水が流れるかは明らかにはできなかった。しかしながら、他の調査個所の溝底レベルをみると相対的に東の方が低くなっている。上層からは、奈良時代後半の遺物が出土しており、この頃にはかなり埋没しているようである。この溝はさらに東へ延長されると、宮域東部における方形区画とどのようにかかわるのかという問題が考えられるが、今後の課題である。

ところで、塚山・東裏・広頭地区といった古道沿いに面する地区の掘立柱建物の方向は大部分が北で東に偏る建物であり、今回の調査でもほとんどの建物が北で東へ５～７°偏る建物である。また、今回の調査で確認された平安時代前期から後期の時期の各溝も溝の方向が、ＳＤ170の溝方向に近いものであり、奈良時代の溝ＳＤ170は後世の宮域中・西部における地割りにかなりの影響を与えているようである。

掘立柱建物は、平安時代中期のものが2棟確認されたが、他の10棟は全て前期のものである。規模の大きい建物が多く、官衙の中心的建物であったことが考えられる。溝との関係は方向性以外には明確な関係を把握できなかった。

遺物については、130点もの緑釉陶器があり、調査面積の割には数多く出土している。しかしながら、全体的に遺物の量は多くなく、溝から出土したものなどは、器壁の残りのよくないものが多かった。

Ⅳ　第79次調査

6AGG－A・B（東加座地区）

本年度第3回目の計画調査は、史跡東端部の東加座地区で、約1,500㎡の面積を9月16日より12月5日まで実施した。当調査地内の西端には昭和55年度に第35次のトレンチ調査が行われており、また昭和61年度第66次調査区の西側に位置する。通称中町裏では、これまでの調査で碁盤目状に走る区画溝によって囲まれた一辺 120m前後の方形区画が確認されており、今回の調査地はその方形区画の東北端の区画の西北部に位置する。

東側の第66次調査で、次のような他区画との四つの相違点が認められている。1）区画溝から4m前後の空閑地をおいて建物が検出されており、他区画の10m前後とは異なる。2）奈良時代後期の竪穴住居6棟がまとまって検出されている。3）掘立柱建物はほとんど3間×2間の規模であり、その配置に整然とした規則性が認められない。4）このようなことから当区画は整然とした官衙地帯とは言い難く、むしろその周辺にあった官人の居住地の一郭であった可能性が強いと思われる。

このような第66次調査結果から今回の調査は、この方形区画の西端を明らかにするとともに第66次調査地の状況がさらに西に続くものかを確認するために実施した。

調査の結果、遺構面までの深さは約 0.4mであり、検出した遺構は奈良時代後期から平安時代前期にかけてのものが中心である。掘立柱建物は、奈良時代後期4棟、平安時代初期5棟、前期17棟、中期4棟、後期3棟の計33棟検出されている。土坑は、奈良時代後期から平安時代前期にかけてのものである。その他、奈良時代後期に掘削され平安時代初期に埋没した井戸1基、平安時代後期に埋没した井戸1基がある。また、奈良時代から鎌倉時代までの遺物を出土する区画溝が調査区北端で検出されている。

（Ⅰ）奈良時代後期の遺構

掘立柱建物4、土坑4、井戸1、東西溝1がある。

掘立柱建物は区画溝から約7m離れた位置で東西棟ＳＢ1918・5322があり、他にＳＢ5321と調査区東南端でＳＢ5348がある。これらのうちＳＢ5348は規模は不明であるが、他は3間×2間の規模であるためＳＢ5348も同規模と思われる。また、調査で検出された掘立柱建物33棟は、当期のＳＢ5322だけが南北棟であるのに対し、他はすべて東西棟と考えられる。建物の柱掘形は一辺 0.5～0.8mの隅丸方形で、柱間は 1.8～2.0mである。柱方向はＳＢ1918・5321が東で北に3°前後振れるのに対しＳＢ5322はほぼ真北であり、ばらつきが見られる。これはあるいは時期的な差を表わしているかもしれない。

土坑にはＳＫ5304・5331・5343・5347がある。ＳＫ5304は調査区西北部のＳＢ5322の西北部に位置し、南北 2.4ｍ、東西 1.8ｍ、深さ 0.6ｍの楕円形を呈する。出土した遺物は少ない。

ＳＫ5331は調査区北東部にあり、南北 3.1ｍ、東西 3.1ｍ、深さ 0.3ｍの方形を呈する。土師器を少量出土した。ＳＫ5343・5347は調査区東南部のＳＢ5348の北にあり、ＳＫ5343は南北 2.8ｍ、東西 3.5ｍ、深さ 0.5ｍ、ＳＫ5347は南北 2.6ｍ、東西は調査区外に延び 2.1ｍ以上、深さ 0.3ｍの不整円形を呈する。遺物はＳＫ5343から土師器を中心に整理箱で９箱、ＳＫ5347からは土師器を中心に整理箱で１箱出土した。

井戸ＳＥ5300は調査区西北部のＳＢ1918とＳＢ5322の間に位置する。遺構検出面では南北2.9ｍ、東西 2.2ｍの不整円形を呈するが、深さ 0.3ｍからは径 1.1ｍのほぼ円形になる。完掘しており深さは、 3.6ｍを測る。遺物は平安時代初期から奈良時代後期まで遡る遺物を整理箱で４箱出土した。

東西溝ＳＤ4355は調査区北端にあるもので、溝の北肩は現在の前沖溝があるため検出していない。幅 2.0ｍ以上、深さは調査区西端で 0.6ｍ、東に向かって深くなり調査区東端では 0.7ｍである。遺物は奈良時代後期から鎌倉時代までのものを整理箱で７箱出土している。遺物から掘削年代を当時期に想定でき、埋没年代は鎌倉時代と考えられる。

（II）平安時代初期の遺構

掘立柱建物５、土坑３がある。また、井戸ＳＥ5300は当該期に埋没している。

掘立柱建物は、規模の判明する４棟（ＳＢ1919・5317・5325・5330）はすべて３間×２間の東西棟である。また、調査区東南部にあるＳＢ5345は南北２間、東西２間以上のもので、東の第66次調査では検出されていないため、３間×２間の東西棟と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ1919は奈良時代後期のＳＢ1918とほぼ柱掘形が重複し、規模、柱間はＳＢ1918と同じであるため、建て替えと思われる。ＳＢ5317は柱掘形は一辺 0.5ｍ程度、深さ 0.4ｍの方形を呈し、柱間は桁行 2.0ｍ、梁行 1.8ｍ。ＳＢ5330も一辺 0.5～0.8ｍ、深さ0.3ｍで柱間は桁行 1.9ｍ、梁行 1.7ｍである。棟方向は大旨東で北に５～６°振れる。

これらの建物は区画溝から奈良時代後期と同じ距離を保ちＳＢ1919・5317・5330の３棟が並行し、建物の間隔も約10ｍとほぼ等間隔に配置されている。また、調査区中央南ではＳＢ5325があり、この建物の東約16ｍには東西方向に棟方向をほぼ同じくするＳＢ5345が検出された。

土坑は調査区西北部の掘立柱建物ＳＢ1919とＳＢ5317の間で、ＳＫ5302・5303・5307がある。ＳＫ5302・5303は重複する土坑でＳＫ5302は東西 2.2ｍ、南北 2.6ｍ、深さ 0.4ｍの不整円形を呈する。ＳＫ5303はＳＫ5302より古いもので南北 1.7ｍ、東西 2.3ｍ、深さ0.3ｍ。ＳＫ5307は南北1.3ｍ、東西約2.0ｍ、深さ 0.2ｍ。いずれも土師器、須恵器が少量出土している。ＳＫ5342は調査区東南部にあり、畦を挟んで検出した。南北 4.3ｍ、東西 6.7ｍ、深さ 0.4ｍの楕

第８図　第79次遺構実測図（1：200）

円形を呈する比較的規模の大きな土坑である。遺物は土師器を中心にして整理箱で5箱出土した。

（Ⅲ）平安時代前期の遺構

この時期の遺構が当調査区では一番多い。以下前期でも古い前Ⅰ期と新しい前Ⅱ期に分け述べることにする。

平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物8、土坑7がある。

掘立柱建物は区画溝に沿った部分では初期の建物をかなり意識したようで、初期の建物の東4～5mの位置で検出された。調査区西からSB1918の東でSB1917、SB5317の東でSB5318～5320が重複し、SB5330の東にはSB5332がある。また、南の初期の建物のSB5325・5345ではSB5326・5346がほぼ同じ位置で建て替えられている。これらの柱掘形は一辺約 0.5mの隅丸方形を呈し、柱間は 1.8～2.0mである。

土坑は調査区東半部にあり、掘立柱建物SB5318・5326・5332・5346に囲まれる位置で検出し、SK5327～5329・5333・5341・5344・5346がある。SK5327・5328は掘立柱建物SB5326の東にあるものでSK5327は径 1.5m、深さ0.25mでSK5328より新しい。SK5328は南北5.8m、東西 1.2m、深さ 0.2mの南北に細長い土坑である。このうちSK5328はSB5326に沿うようにあるため建物に付属する土坑の可能性もある。

SK5329・5333は畦の部分で検出したもので、SK5329は南北 1.7m、東西1.0m以上、深さ0.3m。土師器が少量出土した。SK5333は南北 3.8m、東西 1.7m、深さ 0.4mで遺物は土師器と須恵器が整理箱で1箱出土した。

調査区東端中央にあるSK5341は南北 1.8m、東西 2.2m、深さ 0.2m。SK5344は南北2.2m、東西 0.8m以上、深さ 0.1m。SK5340は南北 3.1m、東西 2.0m、深さ 0.1mの不整円形で、いずれも出土した遺物は土師器を中心に整理箱で1箱程度であるが、このうちSK5340からは土師器、灰釉陶器片の他、ミニチュア円面硯の破片が出土した。

平安時代前Ⅱ期の遺構

掘立柱建物9、土坑3がある。

この時期の掘立柱建物は調査区の西と東にあり、西のものは前Ⅰ期の掘立柱建物SB1917の南でSB1920・5310～5314の6棟が、東のものは前Ⅰ期のSB5332の南でSB5334～5336の3棟を重複して検出した。

西に位置するSB1920・5310～5314は重複する位置から更にSB5310～5312とSB5313・5314に分けられる。SB5310～5312はほぼ同じ位置にあるもので新旧関係はSB5311→5310→5312の順である。このうちSB5311・5310の柱掘形は一辺 0.8～0.9m、深さ0.5mと比較的に規模

の大きなものであるが、ＳＢ5312は一辺 0.6ｍ、深さ約 0.5ｍと小さい。ＳＢ5313・5314も同じ位置で建て替えられたもので新旧関係はＳＢ5313→5314であり、柱掘形は一辺0.3～0.4ｍ、深さ 0.4ｍとやや小型である。後者の建物は前者の建物群のＳＢ5312より新しく前者の他の建物とは直接切り合いがないが、建物の位置、規模等から見てＳＢ5311→5310→5312→5313→5314と考えられる。また、ＳＢ1920は重複する位置にあるが切り合いがないため不明である。柱掘形は径0.4～0.5ｍ、深さ 0.4ｍの円形であり、比較的新しい要素を持つため前者と後者の間か後者の建物の後に建てられたものと考えられる。

東に位置する建物の新旧関係はＳＢ5335→5336→5334の順であり、このうちＳＢ5335・5336はほぼ同じ位置にあり建て替えと思われる。柱掘形はＳＢ5335は一辺が 0.6ｍと西の建物の古いグループに、ＳＢ5336・5334は径が 0.4ｍの円形と新しいグループに相当する。

このように西と東の建物はそれぞれ重複があり、多くとも２棟しか同時期に存在していなかったと思われる。

土坑はＳＫ5306・5309・5339があるだけで建物に比較して少ない。ＳＫ5306・5309は西の建物群の東にあるもので、ＳＫ5306は南北 2.5ｍ、東西 1.4ｍ、深さ 0.5ｍ。ＳＫ5309は南北2.3ｍ、東西 1.8ｍ、深さ 0.7ｍの不整円形を呈し、出土した遺物はいずれも整理箱で１箱程度である。ＳＫ5339は東の建物群の南にあり、南北 1.6ｍ、東西 1.8ｍ、深さ 0.3ｍの不整円形を呈する。遺物は整理箱で１箱出土している。

（Ⅳ）平安時代中期の遺構

この時期の遺構は掘立柱建物４があるだけである。建物の方位はこれまでの調査同様にこの時期のものは東で南に振れている。

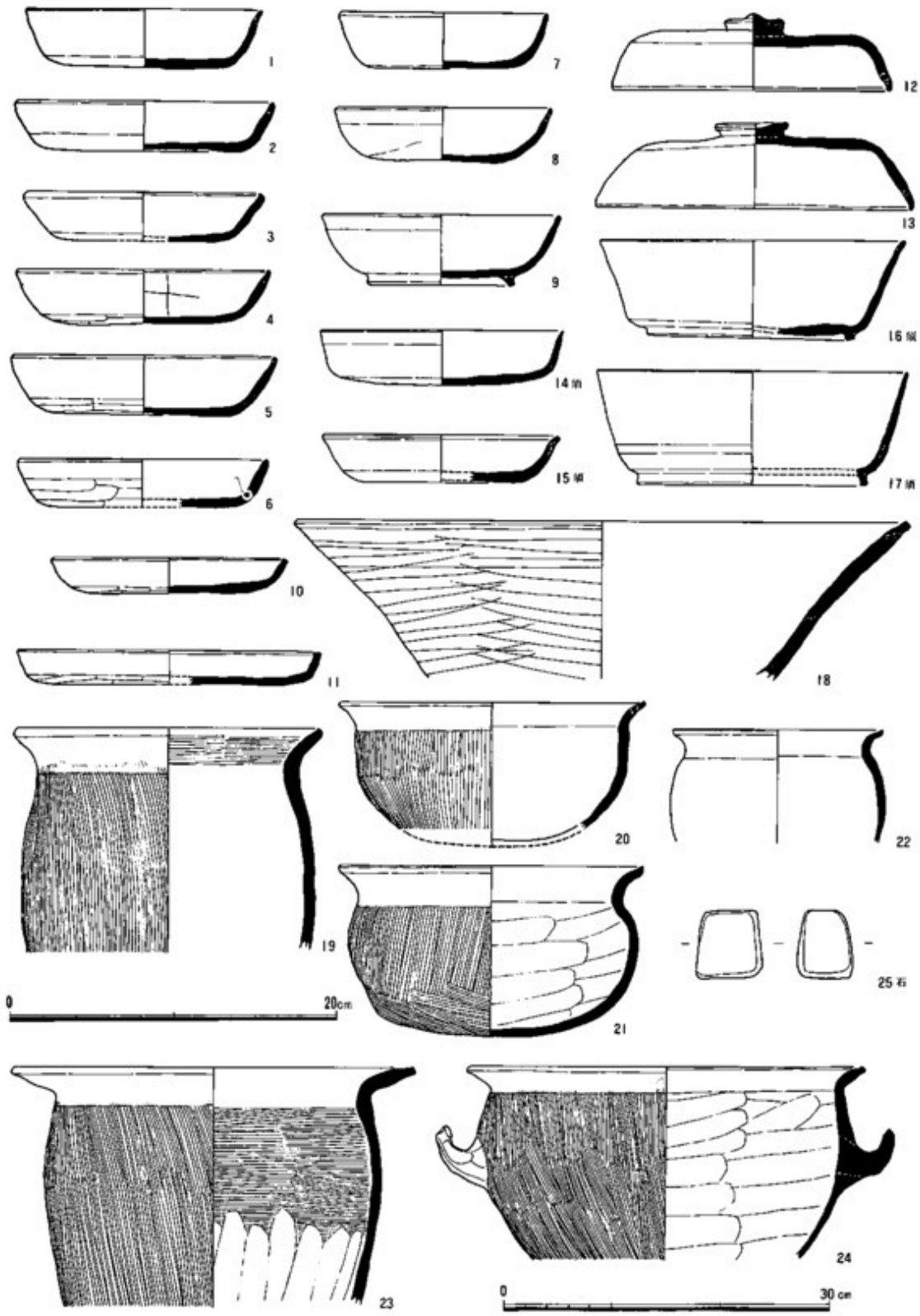
掘立柱建物には調査区中央にあるＳＢ5323・5324と調査区東にあるＳＢ5337・5338がある。いずれも３間×２間の東西棟で、柱掘形は径0.4～0.5ｍ、深さ 0.5ｍの円形である。このうちＳＢ5323は3間×2間の東西棟で南･北･東の三面に廂を伴う。廂の柱掘形は径 0.3ｍとやや小型である。またＳＢ5337・5338はほぼ同じ位置にあるため建て替えと考えられる。

（Ⅴ）平安時代後期の遺構

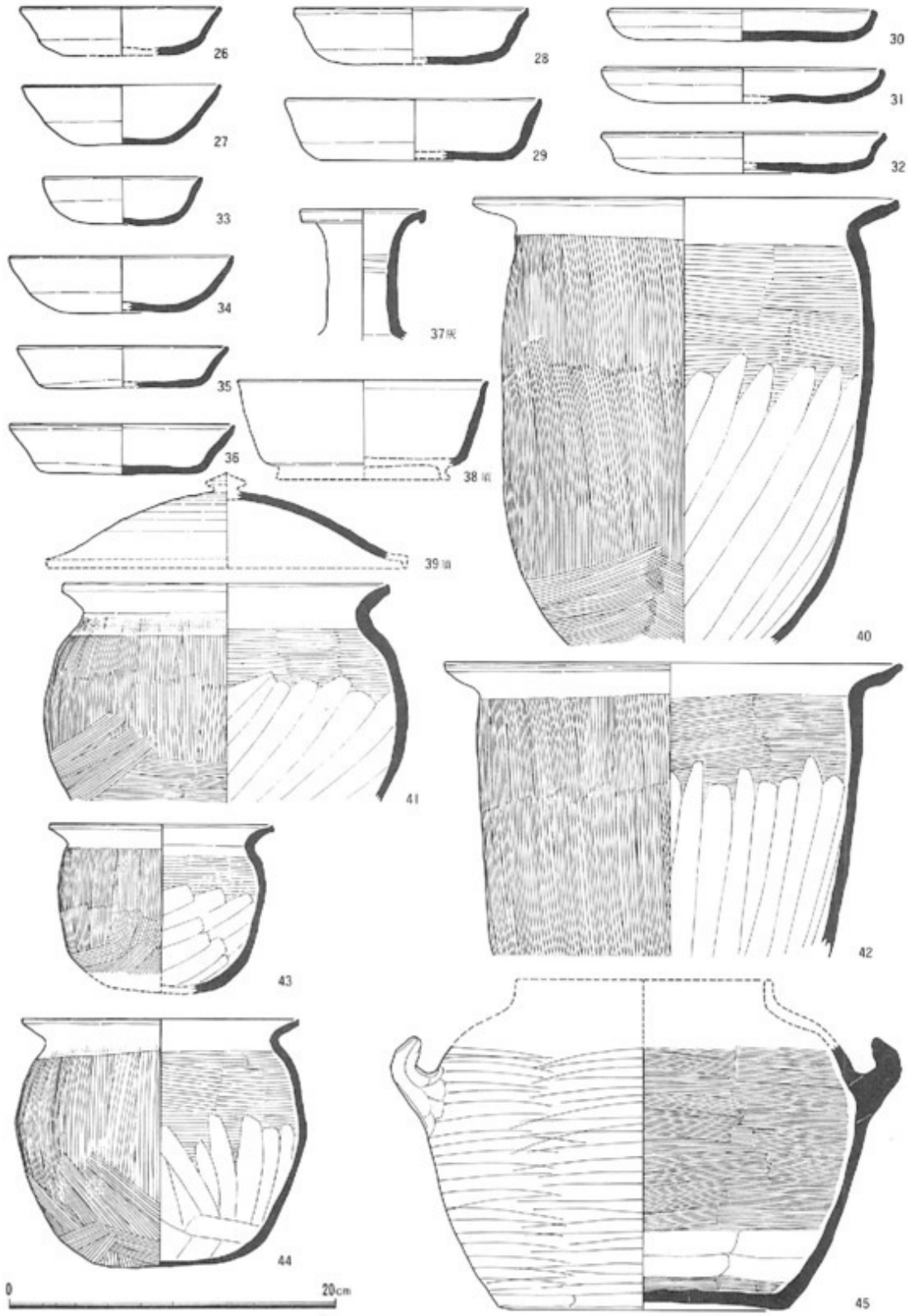
この時期の遺構も調査区西部に掘立柱建物３と調査区東端に井戸1の他、土坑１があるだけである。

掘立柱建物ＳＢ5301・5316は３間×２間の東西棟で、柱掘形は径 0.3ｍ、深さ 0.4ｍの円形を呈する。また、調査区西端にある掘立柱建物ＳＢ5315は南北２間、東西２間以上、調査区外に延びこれも３間×２間の規模になると思われる。

井戸ＳＥ4359は調査区東端中央に位置し西半分を検出した。南北 3.0ｍ、東西は東の第66次調査で一部検出している。深さは 2.0ｍまで下げたが完掘はしていない。平安時代後期の土



第９図　第79次出土遺物　ＳＫ5443；１～25（24は１：６）



第10図　第79次出土遺物　ＳＥ5300：26～45（36・43～45は最下層出土）

師器、灰釉陶器を整理箱で3箱出土した。

土坑ＳＫ5308は調査区中央部の平安時代前期の土坑ＳＫ5309と重複する位置にある。南北0.9m、東西 0.7m、深さ 0.3m。遺物は土師器を少量出土した。

（Ⅵ）その他の遺構

調査区西南隅で検出した掘立柱建物ＳＢ1921は2間×2間で、方位は東で南に2°振れる。出土した遺物はほとんどないため時期は不明である。

（Ⅶ）遺　物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約90箱あるが、土坑等からまとまって出土した遺物は少なく、奈良時代後期の土坑ＳＫ5343、奈良時代後期から平安時代初期の井戸ＳＥ5300、平安時代初期の土坑ＳＫ5342などからしかまとまって出土していない。

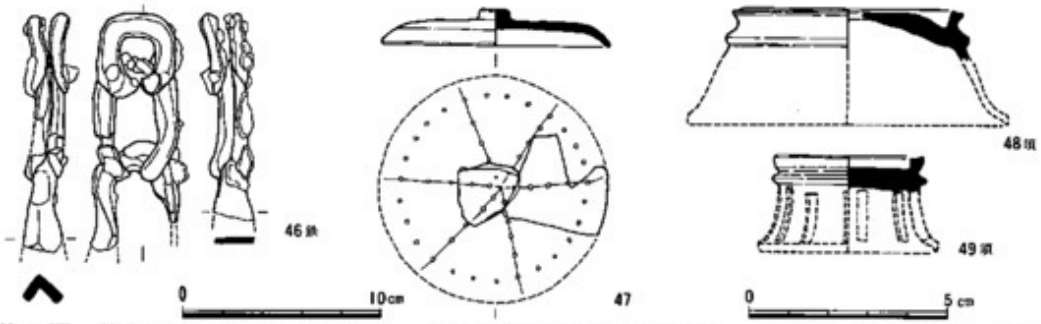
奈良時代後期の土坑ＳＫ5343からは土師器杯・杯蓋・皿・鉢・甕、須恵器は少なく杯・杯蓋・甕の破片が少量出土した。（47）は土師器杯蓋で内面には3本線を中心で交わるように施し、その線上に中心から穴を等間隔に穿ち、更に周縁部にも穴を巡らすものである。周縁部の穴は復元すると計27個になる。

また、他に軽石製の用途不明のもの（25）もある。

井戸ＳＥ5300からは整理箱で9箱出土した。土師器が大半で須恵器の出土量は非常に少ない。井戸の最下層からは土師器壺（45）、甕（43・44）、杯（36）などしか出土しなかった。

特殊な遺物には円面硯（48）、ミニチュアの円面硯（49）、緑釉陶器34点、鉄製遺物（鎧、46）がある。このうちミニチュア土器は史跡内ではこれまで27点が出土しており、そのうちの20点は中町裏から出土したものである。今回出土したミニチュアの円面硯は縁径 3.7cmの非常に小型のものであり、墨をする部分は径が 2.4cmしかない。脚部は出土していないが、長方形の透かしの痕跡が12ヶ所残っている。このような小型の円面硯は愛知県猿投古窯跡で出土しており、県内では名張市夏見廃寺でも出土している。

鎧は柱穴から出土したもので、同じ柱穴から出土した土器は平安時代後期のものであり、鎧の年代については不明な点が多いが一応同時期としておく。



第11図　第79次出土遺物　鎧（46）　線刻土器（ＳＫ5343；47）　円面硯（ＳＤ4355；48）ミニチュア円面硯（ＳＫ5340；49）（1：2）

（Ⅷ）まとめ

今回の調査では掘立柱建物が計33棟検出されており、その時期について現在のところ断定はできないが、以下のような変遷をたどっているものと考えられる。

奈良時代後期は、調査区北端に当区画の北を画する東西方向の区画溝ＳＤ4355が掘削され、それに並行するように約７ｍの空閑地をおきＳＢ1918・5321の東西棟と、その間にＳＢ5322の南北棟が検出されている。また調査区東南隅にＳＢ5348もあり、あまり規格性が見られない配置である。

平安時代初期の建物は区画溝から奈良時代後期と同じ距離を保ちＳＢ1919・5317・5330の３棟が並行し、建物の間隔も約10ｍとほぼ等間隔に配置されている。また、調査区中央南ではＳＢ5325があり、この建物の東約16ｍには東西方向に棟方向をほぼ同じくするＳＢ5345が検出された。

次の平安時代前期でも、古い時期では平安時代初期とほぼ同じ約10ｍの間隔をおきＳＢ1917・5319・5332が区画溝から同じ距離で検出されている。また、その南14ｍでも前時期と同じ位置でＳＢ5326・5346が建て替えられている。平安時代前期の新しい段階には、古い段階のＳＢ1917とＳＢ5332に南接する位置でＳＢ1920・5310～5314とＳＢ5334～5336が重複する位置で建て替えられて、これらの建物は、前時期の建物配置に強く規制を受けていたものと考えられる。

平安時代中期から後期にかけての建物は７棟検出されているが、その配置には規則性は認められない。

このようにみてくると、平安時代初期から前期にかけての建物配置にのみ何らかの規格性があったものと考えざるを得ない。

今回の調査結果は東の第66次調査とは異なり、３間×２間の規模の小さな建物ではあるが、平安時代初期から前期にかけて規則性のある造営が実施されたことが明らかとなった。第66次調査区西端では方形区画のほぼ中央にあたる位置で南北溝が検出されており、方形区画もさらに区割がされている可能性があり、これが建物の検出状況の違いとなって現われているとも考えられる。このような方形区画の区割については今回が初めてであり不明な点が多いが、当調査区南の調査によって区割の存在がさらに明らかになるものと思われる。

V　第80次調査

6AFG－F・G・H・I（西加座地区）

本年度第4回目の調査として実施した第80次調査は、宮城東部の字西加座地区で実施したもので、調査面積は約 1,100㎡、現況は畑地である。調査地は、多気郡明和町斎宮2696番地で、昭和59年度の第54次調査の南、昭和62年度の第75次調査の北西にあたる。

今回の調査地では、昭和56年度に第41次調査の「6AFG－F」トレンチ調査が、幅3m、長さ63mにわたって実施されており、今回はそのうちの北30mを含む範囲で発掘区を設定している。第41次調査では、東西方向に延びる区画溝SD2340、南北方向に続く区画溝SD2345などが確認されている。

今回の調査は、こういった今までの調査の成果を踏まえて、碁盤目状に想定されている方形区画の北から1列目で、東から2列目と3列目を区画する溝の状況を明らかにし、その周辺の遺構の状況を把握するために実施した。

調査の結果、検出した遺構には、奈良時代後期の土坑3・溝1、平安時代初期の掘立柱建物2・土坑2、平安時代前期の掘立柱建物12・土坑4、溝1・井戸1、平安時代中期の掘立柱建物1、平安時代後期の掘立柱建物7・土坑8・溝1、平安時代末期から鎌倉時代前期の土坑8・溝7・井戸1がある。

（I）奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には土坑3、溝1がある。

土坑SK5384は、西をSD2385、東をSD2387によって切られているので全容は不明だが深さ 0.2mと浅い。須恵器摺鉢が出土している。SK5388・5389は東調査区の南西隅に位置しており、いずれも西に拡がり、 0.8m前後の楕円形をしている。SK5388は深さ 0.1m前後と浅いが、SK5389は 0.4mと深い。いずれも土師器杯・皿・甕が出土している。

溝SD2345は、東から2列目と3列目を区画する道路の西側溝にあたると考えられる。土師器杯・皿、須恵器杯が出土している。大部分は第41次調査で既に調査が行われており、その際には、他に土師器甕・竈、須恵器長頸壺・甕等が出土している。今回の調査では、この時期の建物は検出されなかった。

（II）平安時代初期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物2、土坑2がある。

掘立柱建物SB5393・5396は東調査区の東端で検出された。調査区のさらに東に続く桁行3間×梁行2間の東西棟の建物になると想定される。両者の新旧関係は不明であるが、建て替え

の関係にあると考えられる。柱間はＳＢ5396の方がやや狭い。

土坑ＳＫ5390・5391は、ＳＢ5393の北に位置している。ＳＫ5391はさらに調査区東側に拡がるものであるが、どちらも２～３ｍ前後の不整形な楕円形をしており、深さは 0.2ｍ前後である。ＳＫ5390からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕、製塩土器、黒色土器椀Ａ類等が、ＳＫ5391からは、土師器杯・皿・甕・竈が出土している。ＳＫ5391は埋没後に、平安時代前Ⅰ期の掘立柱建物ＳＢ5392の柱掘形が掘りこまれている。

（Ⅲ）平安時代前期の遺構

この時期の遺構は大きく３期に分れる。斎宮跡土師器編年の標式遺構であるＳＫ1424→ＳＫ3127→ＳＫ2650に相当する時期である。ＳＫ1424に相当する時期を前Ⅰ期、他を前Ⅱ期として述べる。

前Ⅰ期に相当する時期の遺構には、掘立柱建物９、土坑２、溝１がある。

掘立柱建物は、発掘調査区外へ続いて全容の窺い知れないものもあるが、ＳＢ5405・5415が桁行５間×梁行２間、ＳＢ5406が同じく４間×２間、他は３間×２間の規模の東西棟と考えられる。これらの建物のうち、ＳＢ5372・5392を除く建物は、大旨区画溝より約10ｍの空閑地をおいて建てられている。東調査区のほぼ中央に位置するＳＢ5405・5406は規模を縮小した建て替え関係にあると考えられる。柱掘形は双方とも 0.6ｍ前後の円形のものであるが、ＳＢ5405の方がやや大きい。柱掘形の切り合い関係から、ＳＢ5405の方が古い。調査区東へ続くＳＢ5392・5394は共に桁行３間×梁行２間の東西棟の建物で、建て替え関係にあると考えられるが、新旧関係は不明である。ＳＢ5394の方が柱間は狭い。ＳＢ5415は、柱掘形が 0.4ｍと小さいが、５間×２間の東西棟の建物と考えられる。柱掘形の切り合い関係から、ＳＢ5415の方が古い。ＳＢ5419・5420・5421は、発掘区南東隅で検出されたものである。ＳＢ5419は、ＳＢ5415と同じく棟方向が方位にのる。ＳＢ5420・5421はともに北に対して西へ13°と大きく偏る。双方の建物は建て替え関係にあると考えられ、柱掘形の切り合い関係から、ＳＢ5421の方が古い。

土坑には、東調査区のほぼ中央に位置するＳＫ5397・5398がある。双方ともほぼ円形の土坑で、土師器杯・皿・甕、須恵器甕が出土している。

溝には、ＳＤ5387がある。北に対して西へ4°前後偏っており、ＳＤ2345に並行する。出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器甕がある。

次に前Ⅱ期のうちＳＫ3127に相当する時期の遺構は、掘立柱建物２がある。

掘立柱建物ＳＢ5416・5417は調査区南東にあり、東西棟の建物の西妻柱列しか検出していない。棟方向はどちらも方位にのるもので、西面廂をもつ同一の建物である可能性もある。しかし、ＳＢ5417の方が柱間が狭いこと、柱掘形もＳＢ5416は0.7～0.8ｍであるのに対し、ＳＢ

80次

第12図　第80次遺構実測図（1：200）

5417は 0.7m前後と小さいことなどから、2棟を別の建物と考えた。今後、東側の調査が行われた際の課題となるであろう。

前II期のうちSK2650の時期に相当する遺構はSB5422がある。

SB5422は、調査区南西端で柱穴が二つ確認されているのみで全容を窺い知ることはできない。

また、この時期に完全に埋没したと考えられる遺構に井戸SE5380がある。

SE5380は西調査区の南西隅にあり、さらに西へ拡がる。遺構検出面から 2.2mまで掘り下げたが完掘できなかった。井戸の埋土としては、上層より暗褐色土、暗茶褐色土、黄褐色土であるが、黄褐色土は途中まで掘り下げただけで未掘である。埋土からは、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・段皿・長頸壺が出土しているが、層位による出土遺物の時期差は見られない。

前期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断のし難い遺構に土坑SK2342・5411がある。

SK2342は、第41次調査で確認されているものである。SK5411は東調査区の南端にその一部が確認されたものである。深さは 0.4mで、黒褐色土の埋土より土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

（Ⅳ）平安時代中期の遺構

この時期の遺構・遺物は少なく、掘立柱建物SB5395が1棟確認されているにすぎない。調査区東端で検出されたもので、さらに東へ続く建物である。北に対して東へ5°偏っており、宮域東部のこの時期の建物の特徴を示している。

（Ⅴ）平安時代後期の遺構

斎宮跡土師器編年のSE2000からSK1730・1074に相当する時期の遺構をこの時期のものとしている。SE2000に相当する時期を後I期、他を後II期としてのべる。

後I期の時期に相当する遺構は、掘立柱建物6、土坑6、溝1がある。

SB5377は西調査区の南西隅にあり、同時期の土坑SK2344よりは新しいものである。東調査区では、前II期の建物が集中して検出されたところに再びこの時期の建物が集中する。北からSB5399・5400・5413・5407・5408があるが、SB5399は南北棟の3間×2間の建物、SB5407は東西棟の5間×2間の建物、SB5408は3間×3間の総柱建物、他は3間×2間の東西棟の建物と考えられる。SB5399の桁行の柱間、SB5400・5408は梁行の柱間が不揃いである。

土坑には、同時期の土坑がいくつも重複している。SK5371のほか、2～3m前後の不整楕円形で深さが0.2～0.5m前後の土坑SK5370・5373・2344・5412・5418がある。SK2344はSK5378に西側を切られている。SK5412は、SB5399・5407より新しいことを埋土の切り合い関係により確認している。いずれも土師器杯・皿・甕、須恵器甕が出土している。SK5370・5412からは灰釉陶器椀が、SK5373からは灰釉陶器椀、製塩土器などが出土している。

溝ＳＤ5386は、北に対して12°前後西に振る南北溝である。埋土は暗灰褐色土で一部をＳＤ5385に切られているほか、調査区の中央あたりでは同時期の土坑がいくつも重複している。土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器甕、灰釉陶器椀などが出土している。ちなみに灰釉陶器椀は東山72号窯期のものである。

後Ⅱ期の時期に相当する遺構には、掘立柱建物１、土坑１がある。

ＳＢ5414は、前代から引き続き東調査区の南東寄りにある建物で、調査区の東にさらに続く建物である。規模の全容は不明であるが、東西棟の建物で柱間は桁行、梁行ともに 2.3ｍと広い。

ＳＫ5374は、西調査区の中央東で確認されたものでさらに東へ続く。深さは 0.1ｍと浅い。土師器杯・甕が出土している。

後期の遺構のうち、どの時期に相当するか判断し難いものに土坑ＳＫ2341・2343がある。いずれも第41次調査で確認されているものである。

（Ⅵ）平安時代末期から鎌倉時代前期の遺構

この時期の遺構には、土坑８、溝７、井戸１がある。

土坑には、西調査区にＳＫ5375・5378がある。東調査区では、北西隅に同時期の土坑がいくつも重複しているため、その全体をＳＫ5383とした。その中で明瞭なものをＳＫ5381・5382とした。径２ｍ前後の不整楕円形をしている。さらに中央南寄りに、東西１ｍ、南北２ｍ前後のＳＫ5409・5410がある。いずれも土師器杯、山茶椀等が出土している。

溝にはＳＤ2340・5379・5385・5401～5404がある。

ＳＤ2340は、第41次調査で確認されているもので、北を区画する東西方向の区画溝である。現代の水路によって撹乱を受けている。わずかに残った溝底部からは平安時代前期から平安時代中期の遺物が出土しており、それより上層の埋土には山茶椀が見られる。溝幅は底で 1.6ｍ前後、深さは遺構面より0.6～0.8ｍである。溝底のレベルは東の方が 0.1ｍ程低い。土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・壺、黒色土器椀、土馬が出土している。ＳＤ5385は、北に対して10°前後東へ偏る溝であるが、調査区の北で東へ大きく曲がり、ＳＤ2340に切り込む。溝幅は１ｍ前後、深さは遺構面から 0.7ｍ前後である。溝底のレベルは北の方が 0.3ｍ程低い。ＳＤ5401～5404は幅0.2～0.3ｍ、深さ 0.1ｍ足らずの溝である。ＳＤ5402はＳＤ5403より古い。

井戸ＳＥ5376は、径２ｍ前後の不整楕円形である。遺構面より 4.5ｍ程掘り下げたが完掘はしていない。遺構面より１ｍ程下がったところからオーバーハングしていく。埋土は、上層より暗褐色土、灰褐色砂礫土である。土師器杯・皿・鍋、山茶椀、瓦器、白磁、土錘が出土している。

（Ⅶ）遺　物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約90箱ある。遺物の時期は奈良時代後期から鎌倉時代前期に及ぶ。遺物の大半は溝から出土したものである。特殊な遺物としては、緑釉陶器が 103点、墨書土器２点、朱の付着した山茶椀１点、土馬３点、瓦２点がある。緑釉陶器の中には、陰刻花文を施したものが１点ある。その陰刻花文の特徴から黒笹90号窯の時期に相当する。

以下、比較的まとまった資料の得られた遺構の出土遺物について概述する。

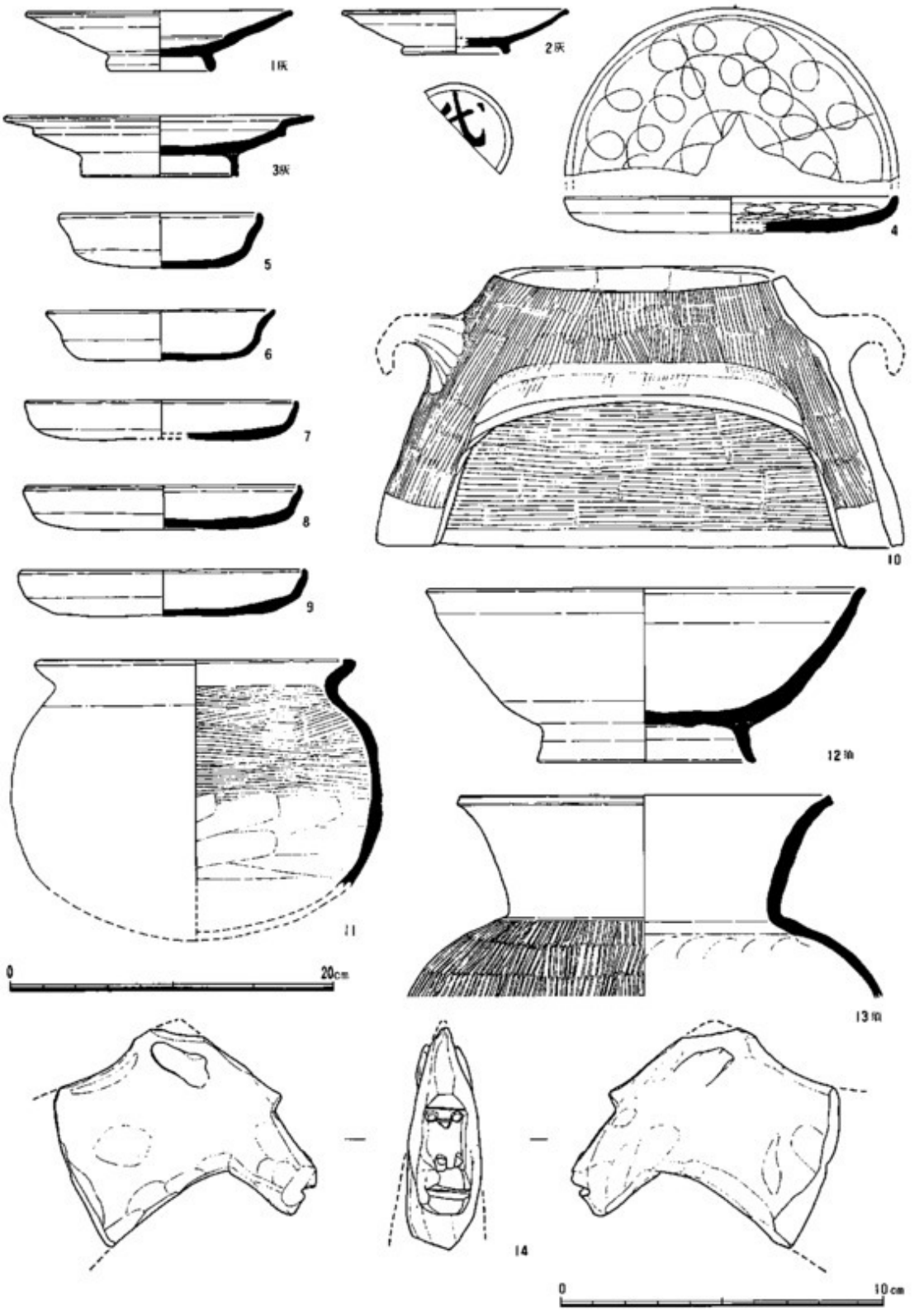
ＳＤ2345出土遺物には、土師器杯・皿、須恵器杯がある。皿（４）は、口径20.2cm、器高2.2cm。底部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデするｂ手法で調整されているが、底部の一部には指押さえが見られ、やや新しい様相を示す。底部内面には螺旋状暗文が３条施され、最後に「＋」状の暗文を施している。須恵器杯は口径13.6cm、器高 3.2cm、ロクロ回転方向は上から見て左回りである。いずれも奈良時代後期に位置付けられよう。

ＳＫ5391出土遺物には、土師器杯・皿・甕・竈がある。皿（７～９）は口径17cm前後、器高は（７）が 2.4cmと低いが、（８）は 2.7cm、（９）は 2.9cmである。いずれも底部を指押さえの後ナデ、口縁部をヨコナデするｅ手法で調整する。皿には他に底部内面に螺旋状暗文を施し、更に「＋」状の暗文を施すものがある。杯（５・６）もｅ手法で調整される。（６）は口径14.2cm、器高 3.1cm、（５）はやや小さく口径12.6cm、器高 3.4cmである。（６～７）が橙褐色であるのに対し、（５）は淡黄色である。竈（10）は器高が17cm前後で、外面は縦方向のハケメを施した後ナデ調整されており、内面は横方向のハケメが施され、ススがかなり付着している。これらの土器は平安時代初期の標式遺構であるＳＫ1445出土土器並行時期に位置付けられよう。

また、他にこの時期に位置付けられるものに、ＳＫ5390出土遺物がある。土師器杯・皿・甕、須恵器甕、製塩土器、黒色土器椀等が出土しているが、杯・皿共にｅ手法で調整される。杯の中には、内面に放射状暗文・螺旋状暗文が施されるものがある。製塩土器は口径が20cm前後のもので、いわゆる志摩式製塩土器と呼ばれるものである。また、黒色土器椀は内面が黒色でヘラミガキが施されている。いわゆる黒色土器Ａ類と呼ばれるものである。

ＳＤ5387出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器甕がある。須恵器甕（13）は口径が23cm、外面は平行タタキ、内面はタタキのあとナデている。杯はｅ手法で調整されるもので、平安時代前Ⅰ期の標式遺構であるＳＫ1424出土土器並行時期に位置付けられよう。

ＳＥ5380出土遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・段皿・長頸壺がある。杯・皿はｅ手法で調整されるものである。灰釉陶器段皿（３）は口径18.6cm、器高 3.7cmのもので内面全体に灰緑色に発色する釉がハケ塗りされている。段は明瞭にヘラをあててつくりだしている。これらの灰釉陶器は、猿投窯編年の黒笹90号窯期に相当するものである。



第13図　第80次出土遺物　ＳＤ2340；１・２、ＳＥ5380；３・14、ＳＤ2345；４
ＳＫ5391；５～10、ＳＤ5385；11・12、ＳＤ5387；13、（14は１：２）

ＳＤ2340出土遺物には、土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺、黒色土器椀、山茶椀、土馬がある。最下層の暗褐色粘質土層には、e手法で調整される土師器杯・皿のほか灰釉陶器がある。灰釉陶器皿（２）は口径13.8㎝、器高2.7㎝、底径は6.4㎝である。口縁部内外面のみ施釉される。底部外面には墨書が見られ、墨が淡くて判読し難いが、「代」かもしれない。段皿（１）は口径16.4㎝、器高 3.7㎝、底径 6.2㎝のもので、段はあまり明瞭ではなく、重ね焼きの痕跡が残っている。これらの灰釉陶器は猿投窯編年の折戸53号窯期に相当するものである。

ＳＤ5385出土の遺物には土師器杯・皿・鍋、須恵器甕・鉢、瓦器椀、青磁皿、山茶椀がある。須恵器鉢（12）は、口径26.8㎝、器高10.8㎝で灰色をしたものである。鍋（11）は、口径18.8㎝、器高は推定17.3㎝である。内面上半はヨコハケメ、下半はヨコ方向のヘラケズリで調整し、外面は指押さえと思われる。ススがかなり付着している。その他、青磁皿は口径10㎝前後、器高２㎝で灰白色の胎土に淡白緑色の釉がかかる。

ＳＥ5376出土の遺物には、土師器杯・皿・鍋、山茶椀、瓦器、白磁、土錘がある。土錘は、長さ 9.8㎝、径 4.8㎝、重さは 230ｇと大きいものである。

ＳＤ5385、ＳＥ5376、ＳＤ2340の上層より出土する山茶椀は、藤沢氏編年のII段階４型式からIII段階の時期に相当する。これらの遺構は平安時代末期から鎌倉時代前半まで存続したと考えられる。

その他の遺物としては、ＳＥ5380出土の土馬は頭部の破片で、目と鼻は凹刻みで表現し、口はヘラケズリ、耳は粘土はりつけで表現している。土馬は他にＳＤ2340より脚の部分と胴の部分が出土しているが、胴の部分は中空で飾りの表現はない。３個体とも別個のものである。

（Ⅷ）まとめ

今回の調査で確認された掘立柱建物は、平安時代初期の建物２、前Ｉ期の建物９、前II期の建物３、中期の建物１、後Ｉ期の建物６、後II期の建物１の22棟である。宮城東部における建物の変遷については、従来の調査の成果から計画的な配置が考えられてきているところである。平安時代前期までの建物は方位にのるか、北に対して２～4°西へ偏っていることが今回も確認されている。ところが、調査区の南東隅で検出された前Ｉ期の建物ＳＢ5420・5421については北に対して13°も西へ偏っている。広域圏道路より東の地域の調査では、これまで平安時代前期の建物は約 300棟検出されているが、このように大きく西へ偏っている建物は例がない。建物の規模も明確でないので今後の課題である。

一方、中期の建物は北に対して東へ偏り、後期になると北に対して西へ偏る建物へと変化する傾向にあることは従前通りである。

また、今回の調査地区東部は、方形区画の北から１列目、東から２列目の北西隅にあたる。

建物は、溝から約10ｍ程の空閑地をおいて建てられている。今回の調査も含めてこの区画内で検出された建物は、奈良時代末期から平安時代後期までの76棟がある。その中で平安時代中期の建物は３棟、後期の建物は３棟しか見つかっていなかった。今回中期１棟、後期６棟の建物が増加した。中期以降になると区画溝と建物の計画的な配置の関係がくずれ、建物が少なくなってくる傾向にある。今回検出した建物は、平安時代前期に引き続き同じ場所に建てられていることが確認された。

今回の調査では、区画溝のあり方を明らかにするのが目的の一つであった。北を区画するのがＳＤ2340であるが、この溝は平安時代前期には埋まり始めており、上層は鎌倉時代前期に完全に埋まっている。この溝に注ぎ込むのがＳＤ5385で、ＳＤ2340の最下層まで切りこんでいる。

ＳＤ2345は東から２列目と３列目を区画する道路の西側溝と考えられる溝であるが、これに対応する東側溝については平安時代後期以降の溝、土坑と重複するために明確にはできなかった。しかし、ＳＤ2345に並行する平安時代前Ｉ期の溝ＳＤ5387を東側溝と考えると道路幅は溝の中心で13ｍ前後となり、第73次調査で確認されている道路と一致する。

東西方向と南北方向の区画溝の関係については、ＳＤ2345・5387ともに途中で切れてしまいＳＤ2340とつながらないために確認することができなかった。

これまでこの区画では、昭和54年度の第24次調査で「驛」と書かれた墨書土器、昭和59年度に実施した第57次調査で「殿司」と書かれた墨書土器、昭和62年度に実施した第75次調査では「水司」と書かれた墨書土器がそれぞれ出土しており、「駅官院」・「殿部司」・「水部司」といった役所に関係する資料が見られたが、今回の調査ではそれらと関連するような資料は得られなかった。

遺物については、これまでこの区画では緑釉陶器の出土は少なかったが、今回は 103点と多く出土し、新たな資料が増加した。

斎宮跡ではこれまで22点の土馬が出土している。今回の調査では３点が出土した。過去22点のうち半数の11点は古里地区で出土している。宮域東部の中町地区では、昭和60年度の第63次調査で２点、昭和54年度の第29次調査で１点の３点しか出土していない。現在までのところ土馬の出土は奈良時代の遺構の多い宮域西部に顕著である。斎宮寮における祭祀の実態把握に関しては、なお今後の課題としておきたい。

Ⅵ　第 76 次 調 査

（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）

第76－2次調査　6ADE－F・G　（長谷川　個人住宅の新築）

申請地は史跡中央部の篠林地区の中央西部に位置し、東西14.5m、南北21mの調査区を設定し約 300㎡について調査を行った。

遺構面までの深さは 0.4mで、検出した遺構は平安時代前期の土坑SK5451・溝SD5460、平安時代末期の土坑SK5459・5463～5465、鎌倉時代前半の土坑SK5452・5454～5458・5461・5462、溝SD5450、鎌倉時代後半の溝SD5453がある。

このうち、鎌倉時代前半のSD5450の北東隅では、刀子が2つ出土している。1つは、半分に折れているが完全に残っており、木質も比較的良く残っている。

出土した遺物は、整理箱で約20箱あり、特殊な遺物としては、緑釉陶器3点、墨書土器2点、瓦1点がある。

第76－3次調査　6ABE　　（明和町　古里地区整備事業　排水路新設）

申請地は史跡西部の古里地区北部の東西に走る農道部分と台地周縁部である。農道部分については幅3m、長さ94mのトレンチを、台地周縁部については3ケ所トレンチを入れ様子を探ることにした。調査面積は 434㎡で、北から第1トレンチ、第2～4トレンチとした。

第1トレンチ　検出した遺構には弥生時代中期の方形周溝SX5470・5471、飛鳥時代の竪穴住居2・掘立柱建物1、奈良時代の竪穴住居5・掘立柱建物3・土坑2、平安時代末期から鎌倉時代の溝3（SD5478・5479・5486）がある。

飛鳥時代の竪穴住居SB5472・5480は出土した遺物から7世紀後半の遺構と思われる。また、掘立柱建物SB5481はSB5480と重複しSB5480より古い。

奈良時代の遺構には竪穴住居SB5469・5475・5483～5485、掘立柱建物SB5468・5473・5477、土坑SK5474・5476がある。このうち掘立柱建物は、柱掘形から出土する遺物が少なく時期は限定できないが、奈良時代のものと考えられる。SB5468は東西3間分検出した。柱間が狭いので3間×3間の総柱建物と思われる。他の掘立柱建物は規模の判明するものはないが、柱掘形は 0.5～ 0.7mの方形を呈している。

第2～4トレンチ　台地周縁部の調査は、台地上端から下端までの斜面部分の遺構の残存状況を探ることに主眼をおいた。斜面部分では遺構は検出されず、現在の台地上端部から東に2～3m入った所から地山がなだらかに落ちていることが確認された。第4トレンチは平坦な所に位置する。この平坦な部分は、調査の結果、祓川用水の工事の盛土であることが判明した。

第76－4次調査　6ＡＣＫ　　（山際　個人住宅の新築）

申請地は、南西部の竹川墓地の南70ｍ程に位置し、３ｍ×６ｍのトレンチを設定し、18㎡について調査を実施した。

遺構面までの深さは 0.3ｍで、検出した遺構には、奈良時代の竪穴住居２・土坑１がある。

竪穴住居ＳＢ5490・5489は調査区中央の撹乱を挟んで検出したもので、遺構の新旧関係は不明である。ＳＢ5490には幅0.2～0.3ｍ、深さ0.05ｍの周溝が巡る。土坑ＳＫ5491はＳＢ5490より古いものであるが、遺物はほとんど出土しなかった。

第76－5次調査　6ＡＥＥ－Ｗ　（岡田　個人住宅の新築）

申請地は、史跡中央部でも北の楽殿地区の北寄りに位置し、東西10ｍ、南北２ｍのトレンチを設定し、20㎡の調査を実施した。

遺構面までの深さは約 0.6ｍであり、検出した遺構には奈良時代の竪穴住居ＳＢ5492がある。東西４ｍ、南北は両側とも調査区外に延びる。深さは 0.3ｍ。東辺中央部ではカマドを検出した。カマドの南の貯蔵穴からは完形の土師器杯３点が出土した。また、調査で出土した特殊遺物には緑釉陶器が２点ある。

第76－6次調査　6ＡＣＢ－Ａ　（今西　個人住宅の新築）

調査地は県道南藤原竹川線に接し、第76－１次調査の北側にあり、東西20ｍ、南北15ｍの調査区を設定し、300㎡の調査を実施した。

検出した遺構には、古墳時代の周溝ＳＸ5500、奈良時代の土坑墓ＳＸ5498・5499、土坑ＳＫ5493、平安時代の井戸ＳＥ5496、鎌倉時代の溝ＳＤ5494・5495・5497がある。

古墳時代のＳＸ5500は方墳の周溝で、東西14ｍ、南北15ｍの規模であることが判明した。

奈良時代の土坑墓ＳＸ5498・5499はＳＸ5500の周溝内で検出したもので、ＳＸ5499は東西0.8ｍ、南北 1.1ｍ、深さ 0.2ｍで、壁面は赤く焼け底には炭が検出されている。ＳＸ5498は掘形等は確認できなかったが、土師器の甕が１個体据えられており、中から人骨が出土した。人骨は細片になっており、火葬された後埋葬されたものと思われる。

第76－7次調査　6ＡＣＭ－Ｍ　（明和町　斎宮小学校給食室移転改築）

申請地は斎宮小学校敷地の中央北部に位置し、東西12.5ｍ、南北15ｍの調査区を設定し、185㎡の調査を実施した。

遺構面までの深さは約 0.7ｍで、検出した遺構は南の第15次調査で検出した溝３条（ＳＤ711・712・704）の続きである。ＳＤ711・712は並行する鎌倉時代末期のものである。ＳＤ 704は幅 2.0ｍ以上、深さ 0.5ｍの規模で、平安時代後期のものである。第15次調査ではこの延長線上には南北溝はなくこの位置で東西溝ＳＤ 704が終わっているため、東西溝ＳＤ 704が北に折れ曲がったものと考えられる。

第76－8次調査　6AFM－B・G・H　（近畿日本鉄道　保全柵の新設）

申請地は竹神社東 100ｍの近鉄宇治山田線沿い北側で、保全柵（延長70ｍ）新設工事に伴ない遺構面の検出された40ｍについて幅 0.3ｍのトレンチを設定し12㎡の調査を実施した。

遺構面までの深さは約 0.5ｍで、検出した遺構は平安時代前Ⅱ期の土坑ＳＫ5503だけである。土坑ＳＫ5503は東西 3.0ｍ、幅が狭いため深さ 0.2ｍ（地表から約 0.7ｍ）下げただけで完掘はしていない。平安時代前期の遺物を少量出土しただけである。

第76－9次調査　6ACQ　（田所　住宅の新築）

申請地は厳密には史跡に接する露越遺跡の範囲に入っている。南北に幅５ｍ、東西に幅３ｍのトレンチを十文字に設定し 175㎡の調査を実施した。現状は畑地である。

遺構面までの深さは 0.4ｍであり、検出した遺構は時期的に新しいものが多い。

発掘区西端の南北溝ＳＤ5504からは、細片ながら13世紀代の土師器鍋が出土している。また、東端にある南北溝ＳＤ5505及びＳＫ5506はいずれも平安時代末ごろのものである。ＳＤ5507・5508からの遺物はなく、時期は不明である。その他、包含層や撹乱土坑をはじめ、数箇所のピットからは16世紀末～17世紀初頭の土師器鍋や陶器類の出土が目立った。

第76－10次調査　6ABD－U　（池田建設　盛土）

申請地は史跡西部の古里地区の北部に位置し、東西16ｍ、南北28ｍの調査区を設定し 448㎡の調査を実施した。なお、今回の調査区の西では第39次調査が実施されている。

遺構面までの深さは、0.6～0.7ｍで、検出した遺構には、奈良時代の竪穴住居ＳＢ5510・掘立柱建物２、鎌倉時代の掘立柱建物１・土坑４（ＳＫ5509・5511・5516・5518）・溝６（ＳＤ5512～5514・5517・5521・5522）、井戸ＳＥ5519がある。掘立柱建物ＳＢ2245は、調査区西端で検出したもので、柱間は 1.4ｍである。第39次調査でも検出されており、３間×３間の総柱建物になると思われる。ＳＢ5520も発掘区西に続く、３間×３間の総柱建物と考えられる。柱間は南北が1.5ｍ、東西1.35ｍである。

鎌倉時代の掘立柱建物ＳＢ5515は、３間×３間の総柱建物で人頭大の川原石を根石としている。柱間は南北 2.0ｍ、東西 1.8ｍである。

第76－11次調査　6ABE　（明和町　古里地区整備事業　ふれあい広場）

申請地は史跡西部の古里地区に位置し、２ヶ所調査区を設定した。北調査区は東西30ｍ、南北13ｍ（面積 400㎡）で第76－３次調査の中央南に接する位置にある。南調査区は北調査区の南方で、東西21ｍ、南北25ｍ（面積 525㎡）の調査区を設定した。

検出した主な遺構は北調査区では、弥生時代の方形周溝ＳＸ5525、奈良時代の掘立柱建物ＳＢ5530、竪穴住居ＳＢ5531、鎌倉時代の井戸ＳＥ5526、溝ＳＤ5527・5529・5532がある。方形周溝ＳＸ5525の周溝の東北隅から弥生時代後期の壺がまとまって出土した。

奈良時代の掘立柱建物ＳＢ5530は３間×３間の総柱建物である。柱掘形は径0.7～0.9ｍと比較的大きなものである。また竪穴住居ＳＢ5531は東西 3.0ｍ、南北 2.8ｍで北壁中央にはカマドを伴う。カマド部分には後世の南北溝が走っており、残存状況はあまりよくなかった。

南調査区では飛鳥時代の竪穴住居３（ＳＢ5540・5544・5545)、奈良時代の竪穴住居１(ＳＢ5533)、土坑３（ＳＫ5534・5542・5543)、鎌倉時代の井戸ＳＥ5538、土坑ＳＫ5537のほか溝ＳＤ5535・5541がある。

飛鳥時代の竪穴住居ＳＢ5544・5545は調査区中央南にあり、奈良時代の土坑ＳＫ5543と重複するＳＢ5545は東西 5.1ｍ、南北 5.2ｍ、ＳＢ5544は東西３ｍ、南北 2.6ｍと小型である。重複関係からＳＢ5544の方が新しい。

第76－12次調査　６ＡＥＥ　　(明和町　町道下水管新設)

申請地は史跡中央部の楽殿地区でも北寄りにある。当該現状変更は、現在使用されている東西道路に下水管を埋設するためのものである。そのため幅 0.6ｍ、長さ40ｍで重機を使用し調査に入った。

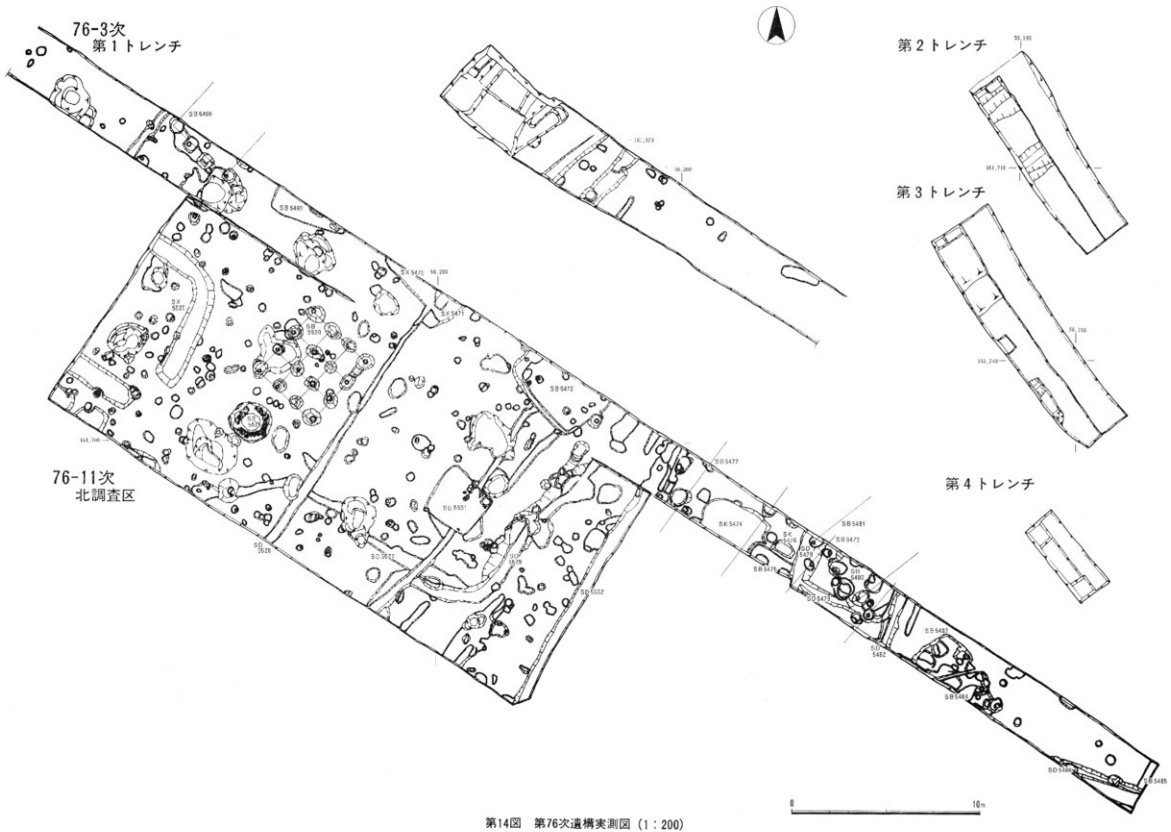
検出した遺構は、柱穴、土坑などがあるが、遺物がほとんど出土しなかったことや、調査区の幅が狭いため性格は不明である。

第76－13次調査　６ＡＤＤ－Ｋ　(中西　プレハブの新設)

申請地は史跡中央部の篠林地区の中央西部に位置し、今回の調査は、対象地区の中央宅地部分を避け、北に４ｍ×17ｍ、南に10.5ｍ×17ｍの調査区を設定し、調査面積は 246㎡である。遺構面までの深さは 0.5ｍである。検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物５・竪穴住居２・土坑７、平安時代前期の土坑２、時期の不明な掘立柱建物１がある。

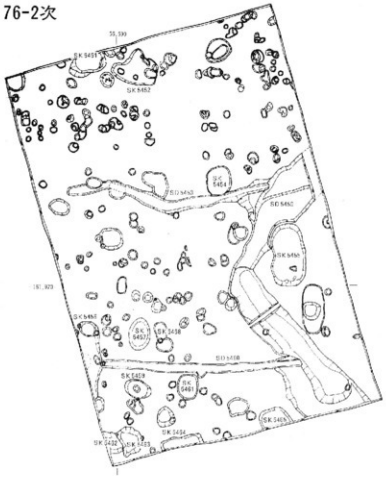
奈良時代の掘立柱建物は北側調査区の西部に集中する。ＳＢ5570は総柱建物で東西２間、南北１間分検出しており東北に延びる３間×３間の建物と思われる。東西の柱間は 1.4ｍ、南北は 1.6ｍである。このＳＢ5570と重複する位置でＳＢ5568・5569を検出した。ＳＢ5569は東西１間分を検出しただけであるが、柱間がＳＢ5570とほぼ同じため総柱建物と考えられる。建物の新旧関係はＳＢ5570→ＳＢ5569、ＳＢ5568→ＳＢ5569で、建物の柱掘形から出土した遺物は少ないが奈良時代前期のものと考えられる。同じ調査区にはＳＡ5567がある。柱間が異なるため南から２つめで東南に折れ曲がり建物になる可能性もある。奈良時代前期の土坑ＳＫ5566より古く、ほぼ同時期と思われる。南の調査区ではＳＢ5574・5577があり、ＳＢ5574は奈良時代、ＳＢ5577の時期は不明である。

竪穴住居ＳＢ5573・5575は南の調査区で検出した。いずれもカマドを南壁に造り煙道部が残るものである。ＳＢ5575の煙道部には土師器甕が転用されている。出土した遺物は少ないが、いずれも奈良時代前期と考えられる。

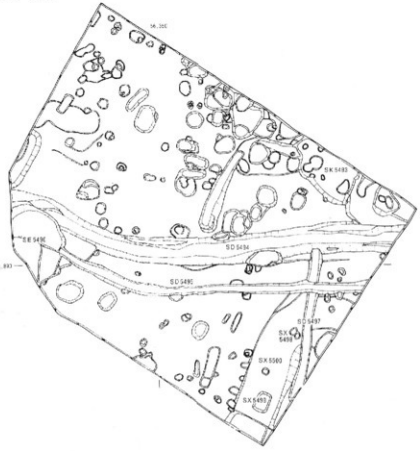


第14図　第76次遺構実測図（1：200）

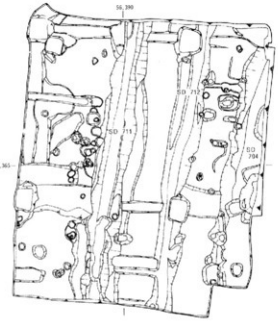
76-2次



76-6次

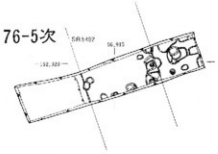


76-7次



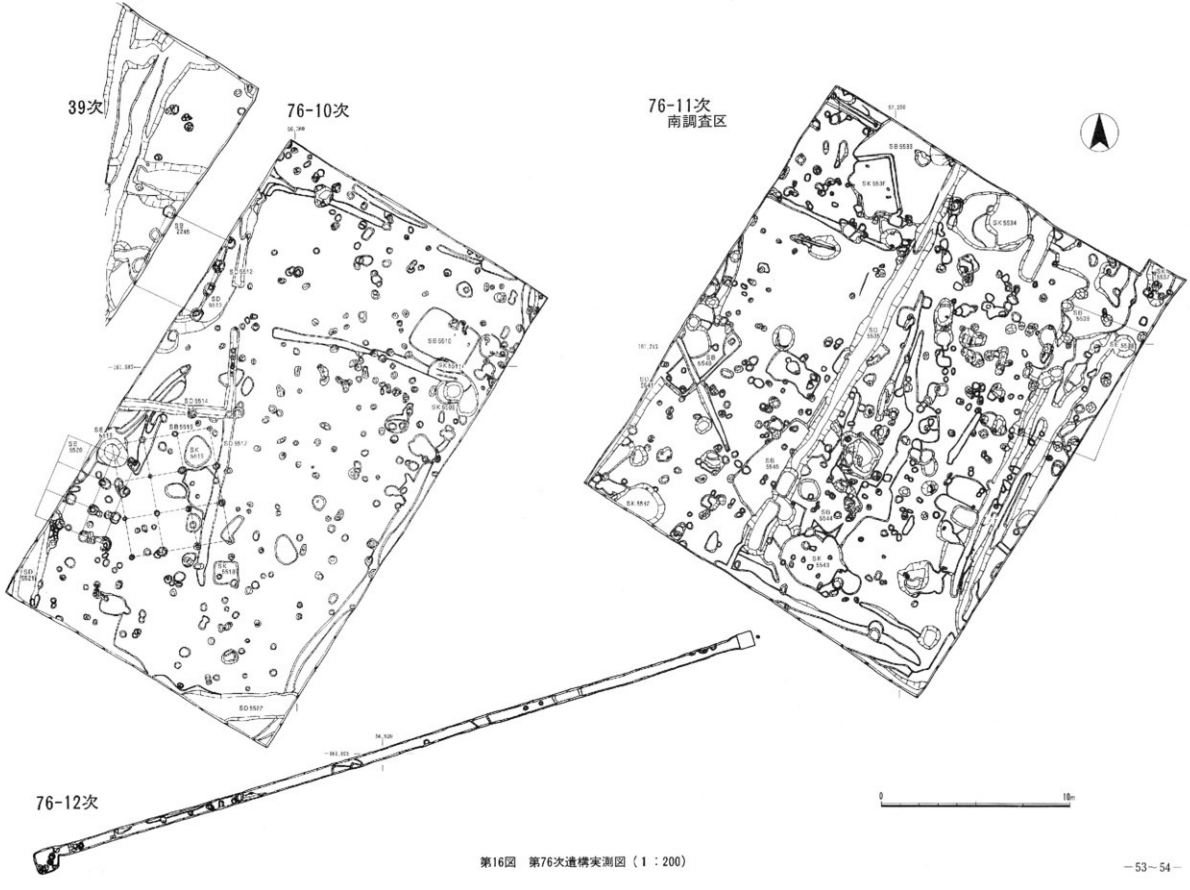
76-4次

76-5次

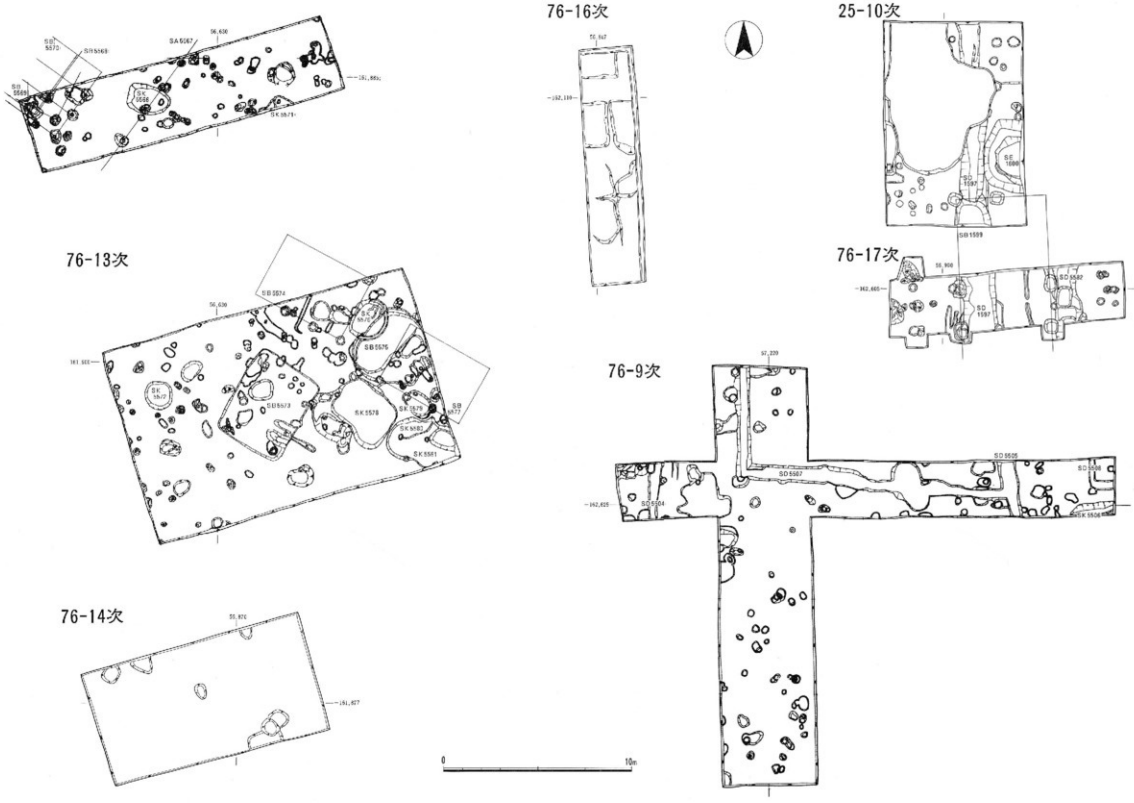


76-8次

第15図　第76次遺構実測図（1：200）



第16図　第76次遺構実測図（1：200）



第17図　第76次遺構実測図（1：200）

第76－14次調査　６ＡＥＥ－Ｓ　（山路　個人住宅の新築）

申請地は、史跡中央部でも北の楽殿地区の北寄りに位置し、東西12ｍ、南北12ｍを最初に設定したが、遺構面まで深いことが判明したため南北の長さを６ｍにして調査を実施した。

遺構面までの深さは 0.7ｍで、検出した遺構は撹乱のみであり、奈良時代から平安時代まで遡る遺構は検出されなかった。

第76－16次調査　６ＡＥＫ－Ｂ　（明和町　史跡公園内の便益施設の設置）

申請地は斎王の森の南東約20ｍの所に位置している。かつて昭和57年度に実施した第42次調査区の南側に隣接する。

第42次調査ではその南端で東西溝（区画溝）ＳＤ2625が検出され、土取りの跡も相当に確認された所である。現在は史跡公園として整備されている。(年報1982)

今回はその南側であったが、後世の土取りによって、本来はあったと思われる遺構はすでに消失していた。

第76－17次調査　６ＡＥＶ－Ａ　（永島　個人住宅の増築）

申請地は史跡中央南の鈴池地区に位置し、昭和54年度に実施した第25－10次調査区の南５ｍのところに東西12.5ｍ、南北３ｍのトレンチを設定し、38㎡の調査を実施した。

検出した遺構には掘立柱建物１、南北溝２がある。

掘立柱建物ＳＢ1599は第25－10次調査で検出された東西２間、南北３間以上の南北棟で、今回の調査では妻柱が検出されなかったので、柱通りは更に南に延びて４間ないし５間はあろうと推定される。柱間は 2.4ｍ前後である。平安時代前Ｉ期の遺構と考えられる。

南北溝ＳＤ1597は第25－10次調査で検出されたもので、ＳＤ1597の東側にもＳＤ5582が走ることが確認された。これらの南北溝はＳＢ1599より新しいもので、幅 1.0～1.8ｍ、深さ約0.5ｍである。両溝の間を道路と考えると、道路幅は約３ｍである。出土遺物が少ないので断定しかねるが、平安時代後期に位置付けておく。

ここは現在の史跡範囲の南端にあたっており、また、昨年第70－３次調査でも奈良時代末期から平安時代前期の大型建物が２棟検出されているところから史跡南端の牛葉・木葉山・鈴池地区は更に重要視されるべき地域であろう。斎宮寮の遺跡は更に南方へ拡大して考える必要性も将来的には予想すべきである。

Ⅶ　第４次環境整備事業

昭和57年度に始まった斎宮跡の史跡環境整備も本年度で第４回目を数える。昨年度は、近鉄斎宮駅から斎宮歴史博物館までの間をつなぐ、いわゆるアプローチ道路沿いの塚山地区で実施した。それは昭和55年度に実施した第32次調査地区を対象として計画・施工したものであった。同調査において検出された掘立柱建物のうち３棟を選んで、花壇及び藤棚として表示した。

今年度はその公園の東方約 140ｍの地点を中心に 4,231㎡を施工対象とした。そこは、昭和58年度に実施した第49次調査区に一部重複しながら北接する所で、ちょうど来年度に町づくり特別対策事業として予定されている博物館からのアプローチ道路（古道復元）が、南の近鉄線路に向かって大きくＬ字形に曲がる地点に当っている。既設の道路は更にこの公園の北端を大きく東方にカーブすると斎王の森に達し、また北へ直進すると史跡北辺を西進する博物館への進入道路（新設）へも出る。従って今回整備した公園は、駅、斎王の森、博物館、進入道路という重要なスポットを結ぶ回遊道路網の中心部に位置している。

将来的にはサイトミュージアムを目ざす斎宮跡を訪れる人々が、自由に憩える多目的な広場という意味で、全体に極力障害物を省いた芝生広場とした。最終的には約15,000㎡の芝生広場にする予定である。

（Ⅰ）盛　土

現状はほぼ南東にむかってなだらかに傾斜する草生地である。地下の遺構を保存する為に全体に10～20㎝の盛土をした。排水路は特には設けず、斜面を利用して自然排水とした。

西側の道路沿いには約50㎝の高さに土塁状の盛土を築成し、植栽をした。

（Ⅱ）芝　生

上記の沿道盛土部分以外は全面芝生広場とした。コウライ芝を使用した８分張りである。張芝面積は 3,400㎡である。

（Ⅲ）縁　石

道路と公園の境界から約50㎝ひかえて縁石を設けた。延長約 170ｍである。

（Ⅳ）ベンチ

擬木の平板ベンチを５基設置した。緑陰に腰掛けて微風のシャワーが楽しめる。

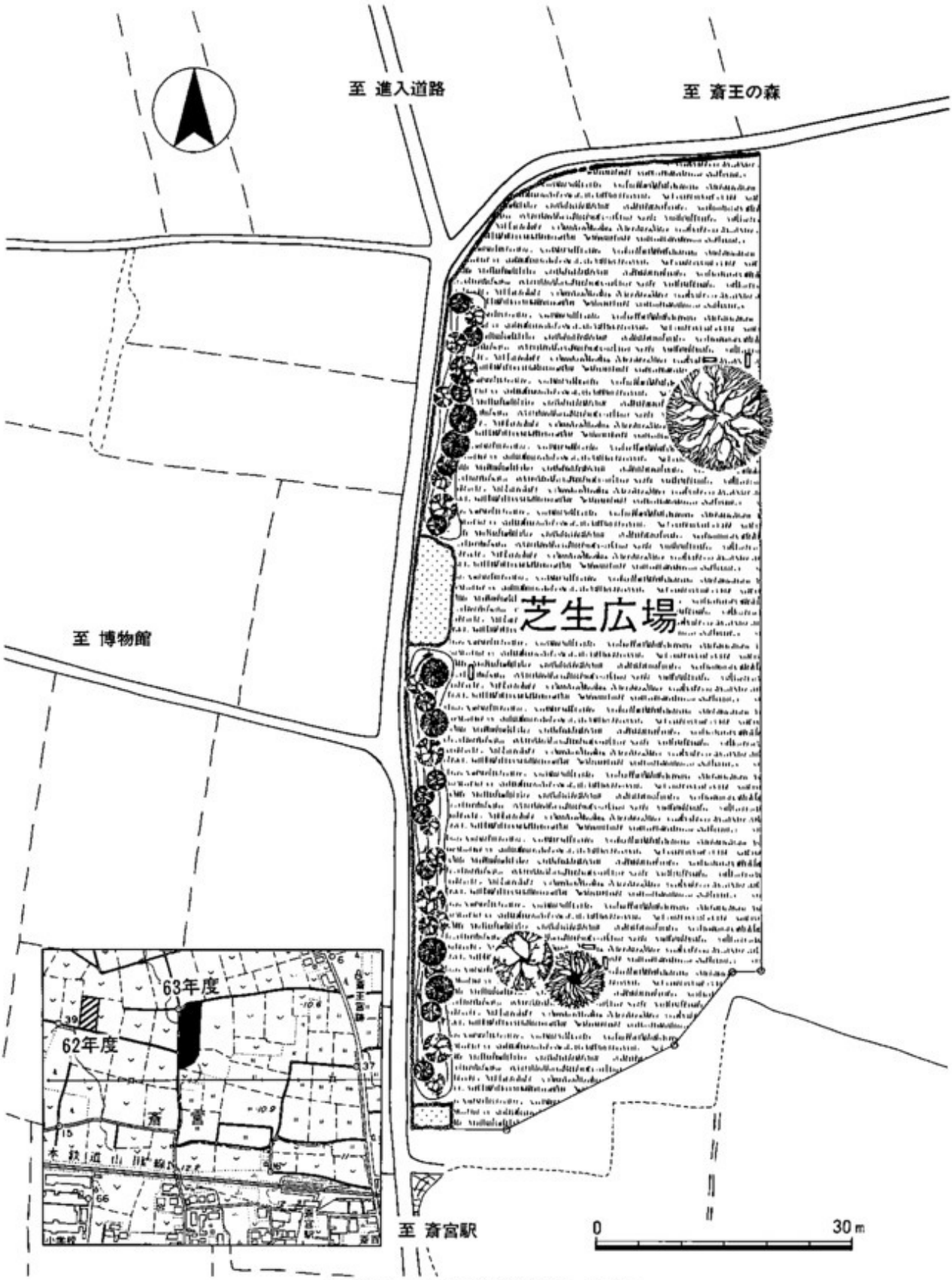
（Ⅴ）植　栽

・高　木：ケヤキ、クスノキ、シラカシ、イロハモミジ、ヤマザクラ、ウメ。

・中高木：サザンカ、モチノキ、ウメ。

・低　木：クチナシ、ヤマツツジ、ヤマブキ、サツキツツジ、ボケ、ドウダンツツジ。

上記の外、サツキ45本を現地供給して計89本を植栽した。



第18図　史跡環境整備図（1：700）

Ⅷ　調査事務所要覧

Ⅰ　調査概要

(1)　調査事業　13,720㎡

ア　計画発掘調査　4次　4,900㎡

第77次調査	東加座地区	1,300㎡
第78次調査	宮ノ前地区	1,000㎡
第79次調査	東加座地区	1,500㎡
第80次調査	西加座地区	1,100㎡

イ　緊急発掘調査（個人住宅新築等）

第76－1～17次調査　8,820㎡

(2)　環境整備事業

第4次史跡環境整備事業

施工場所　上圏地区

施工面積　4,231㎡

施工内容　芝生広場
植栽及びベンチ設置

(3)　普及事業

ア　現地説明会の開催

(ア)　第77次発掘調査現地説明会

日　時　昭和63年6月19日(日)11時

報　告　田阪　仁　　参加人員　約230名

(イ)　第78次発掘調査現地説明会

日　時　昭和63年8月28日(日)10時30分

報　告　上村安生　　参加人員　約180名

(ウ)　第79次発掘調査現地説明会

日　時　昭和63年11月3日(祝)10時30分

報　告　泉　雄二　　参加人員　約200名

(エ)　第80次発掘調査現地説明会

日　時　平成元年2月5日(日)10時30分

報　告　上村安生　　参加人員　約180名

イ　調査報告会

(ア)　10月6日　三重県産業安全衛生大会
山沢　義貴

(イ)　10月12日　明和町教育研究会　研究集会
山沢　義貴

(ウ)　10月27日　三重県高等学校社会科研修会
日本史部会
田阪　仁

(エ)　10月27日　みえ社会保険センター教養講座
田阪　仁

(オ)　10月28日　みえ社会保険センター教養講座
山沢　義貴

(カ)　1月28日　三重大学歴史研究会総会
山沢　義貴

(キ)　2月3日　建築行政協会三重県支部研修会
山沢　義貴

(ク)　2月11日　大阪と古代史を考える集い
泉　雄二

(ケ)　3月3日　建築行政協会三重県支部研修会
山沢　義貴

ウ　調査報告等

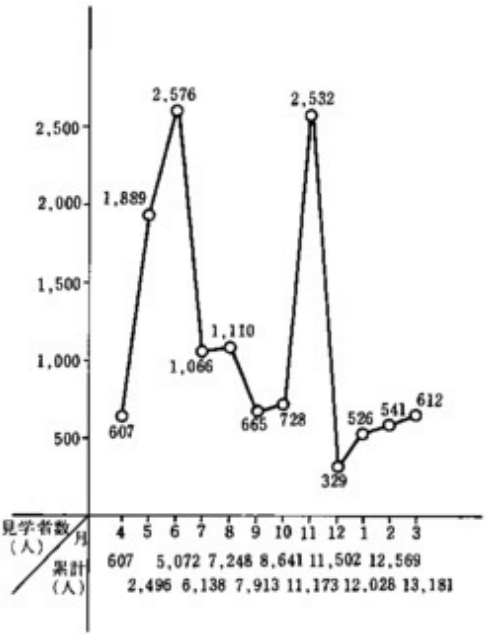
「斎宮案内記（その五）」

『あすの三重　No.71』
三重社会経済研究センター
田阪　仁

「斎宮を掘る」

『毎日グラフ別冊　古代史を歩く10　伊勢・美濃』
毎日新聞社
山沢　義貴

エ　資料展示室見学者総数



オ　その他

斎宮跡講演会

日　時　昭和63年11月３日　午後１時30分

場　所　明和町中央公民館

演　題　「徽子女王－歌と生涯－」

講　師　関西大学教授　清水好子氏

II　予　算

斎宮跡保存対策費　　81,220千円

（単位：千円）

区分 / 事業名	歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	32,565	17,565	15,000	
史跡公有化補助金	36,000	36,000	—	公有化面積約 0.8ha
保存啓発事業	500	500	—	
維持管理	2,155	2,155	—	
環境整備	10,000	5,000	5,000	上園古道沿
計	81,220	61,220	20,000	

III　組織規定

三重県教育委員会事務局組織規定抜粋

昭和43年４月１日

教育委員会会則　第６号

最終改正　昭和54年３月31日

教育委員会会則第６号

第三章　出先機関の組織

（教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等）

第12条　事務局の事務（県立学校関係事務を除く。）を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

３．斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名称	位置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

（分掌事務）

第14条　３．斎宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則　昭和54年３月21日、教育委員会規則第６号抄

この規則は、昭和54年４月１日から施行する。

IV　職　員

職	氏名
所長	中林昭一
主幹	山沢義貴
主事	田阪仁
技師	泉雄二
主事	上村安生
調査補助員	奥野実
事務補助員	坂真弓美
事務補助員	松田早苗
事務補助員	上田真登
事務補助員	中桐真紀

V　その他

(1)　斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

１．設　置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員（以下「委員」という。）を置く。

２．所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の

求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

(2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。

(3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。

(4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。

(5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3 定数等

(1) 委員の定数は、10人以内とする。

(2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4．任 期

任務が完了するまでの間とする。

5．会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6．庶 務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7．その他

この要綱に定めるもののほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附 則

この事項は、昭和54年10月19日から施行する。

○調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山敏男	建築史	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
服部貞蔵	考古学	三重大学名誉教授
久徳高文	国文学	椙山女学園大学名誉教授
坪井清足	考古学	(国)文化財保護審議会専門委員
門脇禎二	古代史	京都府立大学学長
樋崎彰一	考古学	名古屋大学教授
早川庄八	古代史	名古屋大学教授
渡辺 寛	古代史	皇学館大学助教授
北原理雄	都市工学	三重大学助教授

○委員会の開催

1．第1回斎宮跡調査指導委員会

日時 昭和63年8月30日

場所 三重県斎宮跡調査事務所
明和町役場 第3会議室

指導内容

第78次調査現地指導

斎宮跡史跡整備（塚山地区）現地視察

斎宮歴史博物館（仮称）建設現場現地視察

昭和62年度事業結果について

昭和63年度事業計画について

中町裏第2種保存地区の調査の結果および見直しについて

博物館建築および環境整備事業について

斎宮歴史博物館（仮称）展示工事、資料製作進捗状況について

2．第2回斎宮跡調査指導委員会

日時 平成元年2月15日

場所 明和町中央公民館、視聴覚室

指導内容

第80次調査現地指導

斎宮歴史博物館（仮称）現地視察

昭和63年度発掘調査等について

平成元年度発掘調査等について

史跡環境整備事業について

保存管理計画の見直しについて

斎宮歴史博物館（仮称）について

昭和63年度所内日誌

自　昭和63年4月1日
至　平成元年3月31日

月　日	内　　容
4月1日	県人事異動により新所長就任
〃	第76－1次発掘調査　開始（町道塚山線）
8日	斎王まつり実行委員会総会……明和町農構センター
11日	第76－2次発掘調査　開始（個人住宅新築）
19日	第76－3次発掘調査　開始（古里地区整備事業　排水路新設）
5月6日	第77次発掘調査　開始（東加座地区）
9日	第76－2次発掘調査　完了
10日	第7回博物館建設指導委員会……松阪・博物館建設現場
23日	松阪地方県民局地方連絡会議で報告（所長）
〃	埋蔵文化財技術者研修（6月22日まで）
28日	第76－3次発掘調査　完了
6月1日	博物館周辺環境整備関係者会議……松阪庁舎
〃	「文様陶器の流れ」展に斎宮跡出土品展示……愛知県三好町立歴史民俗資料館
8日	斎王まつり実行委員会……明和町中央公民館
14日	県政モニター施設見学
19日	第77次発掘調査　現地説明会（田阪仁報告）
〃	斎王まつり
27日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
7月4日	第76－4次発掘調査　開始（個人住宅新築）
〃	第76－5次発掘調査　開始（個人住宅新築）
5日	第78次発掘調査　開始（宮ノ前地区）
〃	博物館周辺整備会議……調査事務所
6日	第76－4次発掘調査　完了
〃	第76－5次発掘調査　完了

月　日	内　　容
7月7日	県議会・教育警察常任委員会調査
13日	第77次発掘調査　完了
22日	三重大学人文学部学生（3名）博物館実習（27日まで）
25日	第76－6次発掘調査　開始（個人住宅新築）
26日	中町地区役員会……中町公民館
28日	斎宮跡体験発掘（保存啓発事業、上御糸小学校6年、28日～29日）
8月11日	博物館資料調査委員会……調査事務所
22日	第76－7次発掘調査　開始（斎宮小学校給食室移転改築）
25日	第76－8次発掘調査　開始（保全柵新設）
〃	大規模遺跡六県会議……佐賀県（25日～26日）
26日	第76－8次発掘調査　完了
28日	第78次発掘調査　現地説明会（上村安生報告）
29日	第76－6次発掘調査　完了
30日	斎宮跡調査指導委員会……明和町役場第3会議室
9月1日	博物館周辺環境整備関係者会議……松阪庁舎
6日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町農構センター
9日	第76－7次発掘調査　完了
11日	明和町制30周年記念式典
13日	博物館シンボルマーク選定委員会
16日	第79次発掘調査　開始（東加座地区）
20日	斎宮跡地権者の会（公有化小委員会）……明和町農構センター
26日	第76－9次発掘調査　開始（住宅新築）
30日	第76－9次発掘調査　完了
10月7日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町農構センター
〃	資料館入館者数10万人達成
8日	「日本陶磁絵巻」展に斎宮跡出土品展示……五島美術館・愛知県陶磁資料館
19日	全国史跡整備市町村協議会……大分県（19日～21日）
20日	第78次発掘調査　完了

月　日	内　　容
10月26日	文化振興・斎宮跡保存促進三重県議員連盟視察（一宮市博物館・木曾三川公園）
11月１日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町農構センター
3日	第79次発掘調査　現地説明会（泉雄二報告）
〃	斎宮跡文化財講演会「徽子女王－歌と生涯－」　関西大学教授　清水好子氏 ……明和町中央公民館
15日	第76－11次発掘調査　開始（古里地区整備事業　ふれあい広場）
16日	第76－10次発掘調査　開始（盛土）
26日	斎宮跡地権者の会（公有化小委員会）……明和町中央公民館
28日	第76－13次発掘調査　開始（個人住宅新築）
12月２日	第76－10次発掘調査　完了
〃	博物館関連事業にともなう交通安全協議……現場事務所
5日	第79次発掘調査　完了
〃	第80次発掘調査　開始（西加座地区）
12日	県道地元協議（坂本）
13日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場
19日	第76－11次発掘調査　完了
23日	第76－13次発掘調査　完了
1月10日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町農構センター
18日	第76－14次発掘調査　開始（個人住宅新築）
24日	博物館連絡調整会議……松阪庁舎
26日	第76－15次発掘調査　開始（県道拡幅）
30日	中町・牛葉地区懇談会……中町公民館
2月１日	第76－14次発掘調査　完了
〃	博物館本体文化課引き渡し
〃	中町・牛葉地区懇談会……中町公民館
5日	第80次発掘調査　現地説明会（上村安生報告）
10日	上園地区史跡環境整備事業　開始

月　日	内　　容
2月15日	斎宮跡調査指導委員会……明和町中央公民館
21日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
22日	第76－12次発掘調査　開始（町道下水管新設）
〃	第76－16次発掘調査　開始（史跡公園内の便益施設の設置）
23日	第76－16次発掘調査　完了
27日	第76－12次発掘調査　完了
3月2日	中町地区総集会……中町公民館
7日	牛葉地区集会……牛葉公民館
8日	第80次発掘調査　完了
9日	調査作業員見学旅行（彦根市）
10日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場
14日	第76－17次発掘調査　開始（個人住宅増築）
20日	第76－17次発掘調査　完了
22日	三重県文化審議会……吉田山会館
〃	遺跡環境整備担当者会議……福岡市（22日～23日）
30日	上園地区史跡環境整備事業　完了
31日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町農構センター

掘立柱建物・塀一覧表

SB	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第77次調査（6AGJ－D）								
5209	3×2	E4°N	7.2	5.4	2.4	2.7	奈良後	SE5210より古い
5201	—	(E5°N)	—	—	(2.4)	—	平安初	SK5200より古い
5208	(5)×2	N2°W	—	3.8	1.9	1.9	〃	やや新
5220	5×2	E5°N	12.3	5.1	2.46	2.55	〃	
5221	5×2	E3°N	11.5	4.8	2.3	2.4	〃	SB5230より新しい
5229	(2)×(1)	E3°N	—	—	2.15	3.1	〃	
5230	(5)×(2)	E5°N	—	5.2	2.6	2.6	〃	
3961	5×2	E2°N	11.0	4.6	2.2	2.3	平安前Ⅰ	第60次調査で検出
5222	5×3	E2°N	11.4	7.7	2.28	2.5	〃	南面廂、廂柱間 2.7m
5233	4×2	N6°W	8.2	4.4	2.05	2.2	〃	
3960	5×2	E3°N	11.1	4.3	2.22	2.15	平安前Ⅱ	第60次調査で検出 SB3961の建て替え
3966	4×2	E5°N	8.4	4.0	2.1	2.0	〃	第60次調査で検出 SA3966→SB3966
5227	3×2	E4°N	5.7	4.1	1.9	2.05	〃	やや新
5212	3×2	E3°N	5.7	3.8	1.9	1.9	平安中	SD5211・5213より古い
5225	3×2	N6°W	5.9	3.8	1.96	1.9	〃	SD5206・5226より古い
5215	3×2	N5°W	5.6	4.0	1.86	2.0	平安後Ⅰ	
5231	5×2	E7°S	9.5	3.9	1.9	1.95	平安後Ⅱ	
5214	3×2	E3°S	5.7	4.0	1.9	2.0	平安後	
第78次調査（6ADL－C・D・J・M）								
5271	3×2	E20°S	5.7	3.9	1.9	1.95	平安前Ⅰ	
2866	3×2	E6°S	7.2	4.4	2.4	2.0	平安前Ⅱ	第47次調査で検出 棟方向・柱間寸法変更
2867	6×2	E6°S	14.4	4.6	2.4	2.3	〃	第47次調査で検出 棟方向変更、東面廂、廂柱間2.4m
2869	3×2	E2°S	5.4	3.6	1.8	2.0 1.6	〃	第47次調査で検出 棟方向・建物規模変更、SB5272より古い、梁行柱間不揃
2871	4	E4°S	7.6	—	1.9	—	〃	塀 4間分 柱間 1.9m 第47次調査SB2871を変更
2873	(3)×2	E6°S	—	4.2	2.1	2.1	〃	第47次調査で検出 棟方向・建物規模変更
5270	5×2	E6°S	12.0	4.2	2.4	2.1	〃	
5272	6×3	E12°S	13.7	7.1	2.2	2.2	〃	西面廂、廂柱間 2.7m 南面廂、廂柱間 2.7m
5273	5×2	E6°S	10.5	4.2	2.1	2.1	〃	SB5274より古い
5274	5×2	E4°S	10.0	5.6	2.0	2.8	〃	SB2869より古い SB5272より古い
5275	4×(1)	N5°E	8.0	—	2.0	—	〃	
2872	5×2	E4°S	9.5	4.0	1.9	2.0	平安中	第47次調査で検出 建物規模変更
5276	3×(1)	E1°S	5.7	—	1.9	—	〃	
第79次調査（6AGG－A・B）								
1918	3×2	E3°N	6.3	3.6	2.1	1.8	奈良後	
5321	3×2	E4°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	
5322	3×2	N1°E	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	
5348	(3)×(1)	E0°	—	—	2.0	—	〃	
1919	3×2	E6°N	6.0	3.8	2.0	1.9	平安初	SB1918より新しい。
5317	3×2	E6°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	
5325	3×2	E6°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	

SB	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
5330	3×2	E6°N	5.7	3.6	1.9	1.8	平安初	
5345	(3)×2	E4°N	6.0	4.0	2.0	2.0	〃	
1917	3×2	E5°N	5.7	3.8	1.9	1.9	平安前I	
5318	3×2	E5°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	SB5320より新しい
5319	3×2	E5°N	6.0	3.4	2.0	1.7	〃	
5320	3×2	E5°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	SB5321→SB5319→SB5320
5326	3×2	E5°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	SB5325より新しい
5332	3×2	E5°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	
5346	(3)×2	E4°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	SB5345より新しい
1920	3×2	E7°N	5.7	4.0	1.9	2.0	平安前II	
5310	3×2	E3°N	5.7	4.4	1.9	2.2	〃	
5311	3×2	E3°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	
5312	3×2	E8°N	5.2	4.0	1.7	2.0	〃	SB5311→SB5310→SB5312
5313	3×2	E9°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	SB5314より新しい
5314	3×2	E9°N	5.4	4.0	1.8	2.0	〃	
5334	3×2	E5°N	5.1	4.6	1.7	2.3	〃	SB5335より新しい
5335	(3)×2	E4°N	—	4.0	2.0	2.0	〃	
5336	(3)×2	E4°N	—	4.6	1.8	2.3	〃	SB5335より新しい
5323	4×4	E4°S	9.2	8.3	2.33	2.15	平安中	三面廂、南北廂、廂柱間 2.0m 東面廂、廂柱間 2.2m
5324	3×2	E1°S	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	
5337	3×2	E1°S	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	
5338	3×2	E3°S	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	
5301	3×2	E6°N	5.1	4.2	1.7	1.9 / 2.3	平安後	梁行柱間不揃
5315	(2)×2	E8°N	—	4.0	2.0	2.0	〃	
5316	3×2	E3°N	5.7	4.2	1.9	2.1	〃	
1921	2×2	E4°S	3.4	3.4	1.7	1.7	不明	

第80次調査（6AFG－F～I）

5393	(3)×2	E4°N	—	4.2	2.1	2.1	平安初	
5396	(3)×2	E3°N	—	3.6	2.0	1.8	〃	
5372	(2)×2	E3°N	—	4.4	2.2	2.2	平安前I	
5392	3×2	E4°N	6.0	4.2	2.0	2.1	〃	
5394	(2)×2	E2°N	—	3.8	1.9	1.9	〃	
5405	5×2	E2°N	12.0	4.6	2.4	2.3	〃	
5406	4×2	E3°N	9.8	4.8	2.45	2.4	〃	SB5405より新しい SB5415より新しい
5415	(5)×2	E0°	—	3.8	1.9	1.9	〃	
5419	(3)×(2)	E0°	—	—	2.6	2.1	〃	
5420	(3)×(1)	E13°N	—	—	1.9	—	〃	SB5421より新しい
5421	(3)×(1)	E13°N	—	—	2.0	—	〃	
5416	(1)×2	E0°	—	4.6	—	2.3	平安前II	
5417	(1)×2	E0°	—	4.4	—	2.2	〃	
5422	(2)×(1)	E6°N	—	—	2.0	—	〃	
5395	(3)×2	E2°S	—	3.8	1.6 / 2.0	1.9	平安中	桁行柱間不揃
5377	(2)×2	E9°N	—	4.2	2.2	2.1	平安後I	

SB	規　模	棟方向	桁　行 (m)	梁　行 (m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時　期	備　　考
5399	3×2	N2°W	6.0	4.2	2.2 / 1.8	2.1	平安後Ⅰ	桁行柱間不揃
5400	3×2	E0°	6.0	3.8	2.0	2.0 / 1.8	〃	梁行柱間不揃
5407	5×2	E0°	9.5	3.6	1.9	1.8	〃	
5408	3×3	N2°E	6.0	6.0	2.0	1.8 / 2.0	〃	梁行柱間不揃
5413	(2)×2	E3°N	—	3.0	1.8	1.5	〃	
5414	(3)×2	E3°N	—	4.6	2.3	2.3	平安後Ⅱ	
第76－3次調査（6ABE）								
5481	(1)×2	N52°E	—	4.0	—	2.0	飛　鳥	竪穴住居SB5480より古い
5468	(1)×3	N43°E	—	3.9	—	1.3	奈　良	総柱建物
5473	(2)×2	N40°E	—	4.0	—	—	〃	
5477	(2)×2	N37°E	—	4.0	—	—	〃	
第76－10次調査（6ABD－U）								
2245	3×3	N27°E	4.2	3.6	1.4	1.2	奈　良	総柱建物
5520	3×(3)	N23°E	4.6	—	1.6	1.3	〃	総柱建物
5515	3×3	N10°W	6.0	5.2	2.0	1.73	鎌　倉	総柱建物
第76－11次調査（6ABE）								
5530	3×3	E47°N	4.2	3.9	1.4	1.3	奈　良	北調査区・総柱建物
5539	3×2	N22°E	7.2	4.4	2.4	2.2	〃	南調査区
第76－13次調査（6ADD－K）								
5567	3	N36°E					奈　良	塀 南から柱間2.0m、1.6m、1.6m
5568	(2)×(2)	N27°E	—	—	1.8	1.3	〃	
5569	(1)×(2)	E36°S	—	—	—	1.4	〃	総柱建物
5570	(2)×(3)	E36°S	—	—	1.6	1.4	〃	総柱建物
5574	(3)×2	E28°S	—	3.6	1.7	1.8	〃	
5577	(3)×(1)	E29°S	—	—	1.6	—	不　明	
第76－17次調査（6AEV－A）								
1599	(4)×2	N2°W	—	4.8	2.4	2.4	平安前Ⅰ	第25－10次調査で検出 棟方向、建物規模変更

竪穴住居一覧表

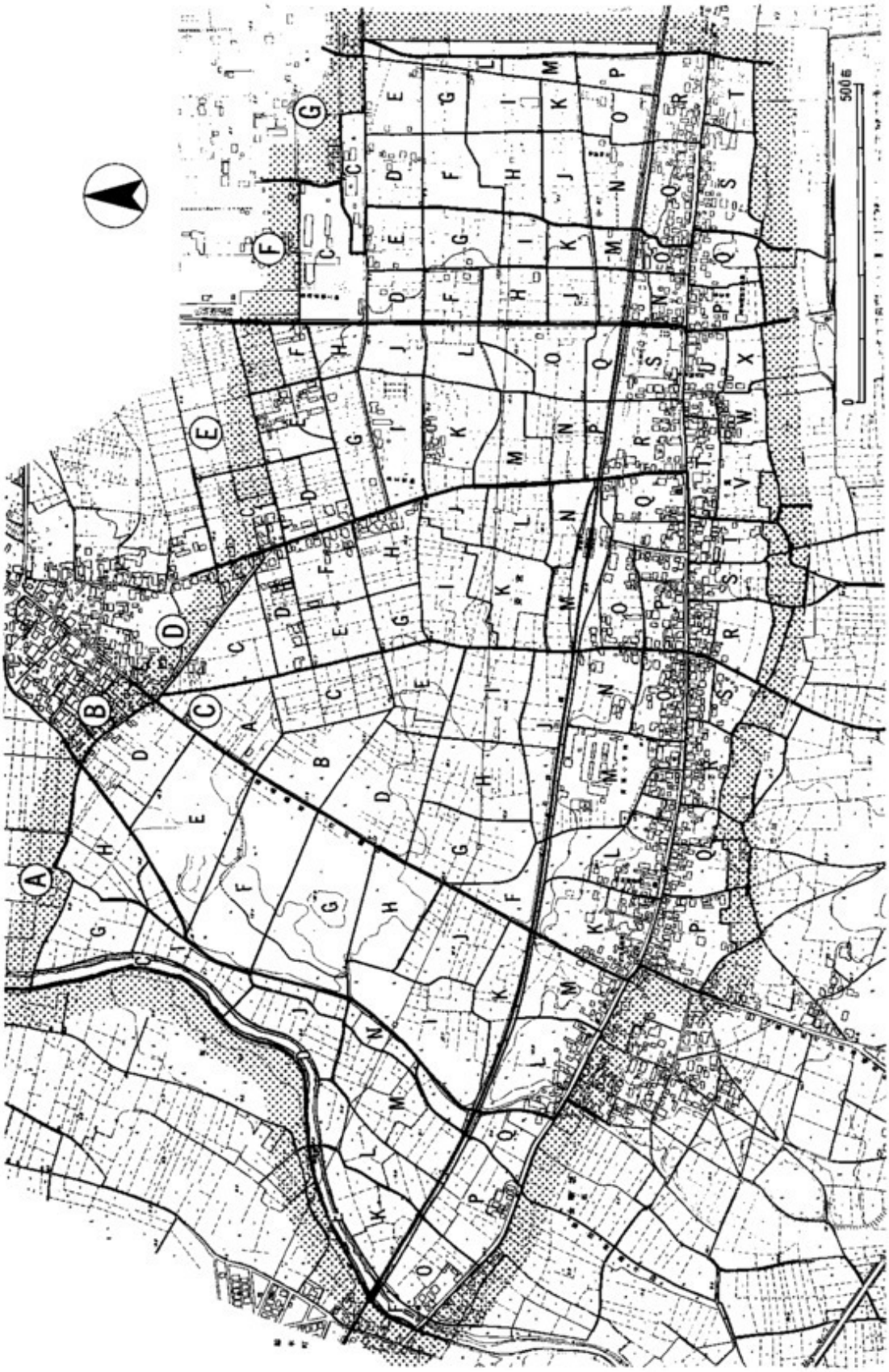
SB	規　模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	カマド	時　期	備　　考
第76－3次調査（6ABE）							
5472	4.9×—	E61°S	40	○		飛　鳥	
5480	—×—	E27°N	40			〃	
5469	4.2×—	E20°S	20			奈　良	
5475	—×—	E33°S	20			〃	
5483	—×2.2	E40°N	10			〃	
5484	—×2.4	E13°N	10			〃	SB5483より新しい
5485	—×—	N29°E	7			〃	
第76－4次調査（6ACK）							
5489	—×—	—	30			奈　良	
5490	—×—	E0°N	20			〃	周溝あり
第76－5次調査（6AEE－W）							
5492	4.0×—	N18°W	30		東　壁	奈　良	
第76－10次調査（6ABD－U）							
5510	3.2×2.4	E30°S	5		北　壁	奈　良	
第76－11次調査（6ABE）							
5531	3.2×3.0	N32°E	30		北　壁	奈　良	北調査区
5540	4.5×—	N47°E	25	○		飛　鳥	南調査区、周溝あり
5544	3.0×2.6	E56°S	10			〃	南調査区
5545	5.2×5.1	N51°E	20			〃	南調査区、SB5544より古い
5533	—×—	E49°S	30			奈　良	南調査区
第76－13次調査（6ADD－K）							
5573	5.0×3.8	N32°E	20		東　壁	奈　良	
5575	—×—	—	30		東　壁	〃	

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区
1	45	試掘
2	46	古里A地区
3		B地区
4	47	C地区
5	48	D地区
6－1		Aトレンチ
6－2		Bトレンチ
6－3		Cトレンチ
6－4		Dトレンチ
6－5		Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1		Fトレンチ
8－2		Gトレンチ
8－3		Hトレンチ
8－4		Iトレンチ
8－5		Jトレンチ
8－6		Kトレンチ
8－7		Lトレンチ
8－8		Mトレンチ
8－9		Nトレンチ
8－10		Oトレンチ
8－11		Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2		Rトレンチ
9－3		Sトレンチ
9－4		Tトレンチ
9－5		Uトレンチ
9－6		Vトレンチ
9－7		Wトレンチ
9－8		Xトレンチ
9－9		Yトレンチ
9－10		Zトレンチ
10		広域園道路
11－1		西加座2661－1（山中）
11－2		〃 2681－1（山名）
11－3		東前沖2483－2（前田）
11－4		下 園2926－9（吉木）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2		2Bトレンチ
12－3		2Cトレンチ
12－4		2Dトレンチ
13－1		西加座2436－7（浜口）
13－2		〃 2436－4（中村）
13－3		古 里3283（村上）
13－4		桑 殿2916～2917（松井）
13－5		御 館2974－1（川本）
13－6	51	中垣内375－1（南）
13－7		東 裏328（小川）
13－8		西加座2771－1（細井）
13－9		〃 2773（細井）
13－10		東 裏362－1（児島）
13－11		西加座2681－1（浮田）
13－12		〃 2721－3、2724－2（森川）
13－13		東前沖2506－2（宮下）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2		2Fトレンチ
14－3		2Gトレンチ
14－4		2Hトレンチ
14－5		2Iトレンチ
15		斎宮小学校
16－1		竹川町道A
16－2		〃 B
16－3		〃 C
16－4		〃 D
16－5		〃 E
16－6		〃 F
17－1		竹神社社務所
17－2		竹神社防火用水
17－3		西加座2721－6（西沢）
17－4		桑 殿2894－1（中川）
17－5		〃 2895－1（西口）
17－6		出在家3237－3（吉川）
17－7		〃 3237－1（里中）
17－8		桑 殿2894－1（西村）
17－9		東海遺機
18	53	6AEL－E・I（下園）
19		6AEN－M・N・O（御館）
20		6AEO－I・J（柳原）
21－1		6AGN－B（鍛冶山、中山）
21－2		6AFI－D（西加座2711-2,2717-4他、山路）
21－3		6AFD－D（西前沖2649－1、大西）
21－4		6AFH－F（西加座2678,2679-3、森下）
21－5		6AGD－K（東前沖、波部）
21－6		6ACA－T（古里3269－2、中西）
21－7		6AFE－F（東前沖2531－1、鈴木）
21－8		6AEG－A（桑殿2909－3、大西）
21－9		6AED－R（篠林3218－3、宇田）
22－1		6AGU
22－2		6AGU
22－3		6AGW
23	54	6AEL－B（下園）
24		6AGF－D（西加座）

次	年度	調　査　地　区
25－1	54	6ADP−K（牛葉3029－1、三重土地ホーム）
25－2		6ACA−Y（古里3270、脇田）
25－3		6ADD−F（篠林3139－3、池田）
25－4		6AER−H（牛葉3014、牛葉公民館）
25－5		6AGN−H（鍛冶山2392、丸山）
25－6		6AFH−A（西加座2675－5、谷口）
25－7		6AEK−V（下園2926－10、奥田）
25－8		6AFC−D（西前沖2064－5、山本）
25－9		6ACN−C（広頭3387－1、北出）
25－10		6AEV−A（鈴池339－1、永島）
25－11		6ACF−B（東裏364－1、沢）
25－12		6AEE−Y（楽殿2892－3、山本）
25－13		6AFJ−E（西加座2766－1、山内）
26－1		6AFR　（中西）
26－2		6AEX~6ACQ（鈴池、木葉山、南裏）
26－3		6AEV·W·X（鈴池）
26－4		6ACR　（木葉山、南裏）
27		6ACG−S·T（東裏）
28		6AEO−D（柳原）
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ−M·X·W（中垣内）
31－1		6ADO−M（内山3038－13、岩見）
31－2		6ACP−I（南裏227－2、鈴木）
31－3		6ABD−A（古里588－4、北畝）
31－4		6ADQ−T（牛葉3018－2、百五銀行）
31－5		6ACC−G（塚山3338－3、水谷）
31－6		6ABO−X（古里576－1、池田）
31－7		6AGI−L（東加座2427－1、竹内）
31－8		6ACN−G（広頭3388－1·5·8·9、森）
31－9		6AGD−L（北野2487－1、中川）
31－10		6ADM−O（内山3043－3、斎宮駅）
31－11		6ADT−I（木葉山304－2、澄野）
31－12		6ADT−J（木葉山304－7、宇田）
32		6ACE−D·E·F（塚山）
33		6ADE−C·D他（篠林）
34		6AFK−F·G·H（西加座）
35		6APE他（西前沖）
36	56	6ABI−F（中垣内）
37－1		6AFC−M（西前沖2064、日本経木）
37－2		6ADQ−R（牛葉3021－2、野田）
37－3		6AFC−F（西前沖2604－6、押田）
37－4		6AFC−M（西前沖2604、日本経木）
37－5		6AFC−G（西前沖2064－7、中村）
37－6		6ABD−A（古里588－2、北畝）
37－7		6AEC−M（苅干2861－2、斎王公民館）
37－8		6ADR−P（木葉山128－8·13·14、富山）
37－9		6AGK−E（東加座2355－1、竹内）
37－10		6AED−O（楽殿3217－1、渡部）
37－11		6ADN−O（内山3043－3、斎宮駅）
37－12	56	6AFH−J（西加座2681－1·3·4、渋谷）
37－13		6AGK−F（東加座2385－3、2386－3、竹内）
38		6ACD−S（塚山）
39		6ABD−R·S·T（古里）
40		6AGH−L·M（東加座）
41		6AGJ−J他（斎宮地内）
42－1	57	6AEI−D·F（楽殿）
42－2		6AEK−A·B（楽殿）
43－1		6ADC−C（出在家3235－2、永田）
43－2		6ADT−B（木葉山308－1、山本）
43－3		6ACP−T（南裏241－1、辻）
43－4		6ADS−D（牛葉123－3、西山）
43－5		6ADE−D（篠林3220－3、澄野）
43－6		6AGE　（東前沖、町道側溝）
43－7		6ABD−F（古里588－6、今西）
43－8		6ADQ−H（牛葉3025－2、大西）
44		6AFL−A·B（鍛冶山2759－1、他）
45		6AEG−P·Q（楽殿2904－2、他）
46		6AGN−C·D（鍛冶山2737－1、他）
47		6ADJ−D·G他（西加座、御館、宮ノ前、上園）
48－1	58	6ACM−M（広頭3385、斎宮小）
48－2		6ADP−Q（牛葉3033－1·2、吉田）
48－3		6ABL−M（中垣内434－6、西川）
48－4		6AGL−B（東前沖2480、倉田）
48－5		6AGD~6AFE（東前沖、町道側溝）
48－6		6AGC−A（西前沖3550－1、今西）
48－7		6ADT−H（木葉山307、森西）
48－8		6ACL−E·F·G（東裏334－15、他）
48－9		6AEV−J（鈴池341－1、乾）
48－10		6AGT　（牛葉、町道側溝）
48－11		6ADP−E（鍛冶山2351－1、2352－1、榊原）
48－12		6AFC−H（西前沖2604－8·9、清水）
48－13		6ACM−O（東裏、斎宮小）
48－14		6AET　（牛葉、町道側溝）
49		6ADI−D·U·V·W·X（上園3083、他）
50		6ACH−H（東裏294、297、山本）
51		6AFF−D（西加座2663－1·4、2664、森下）
52		6AGF−D（西加座2703、他）
53－1	59	6ACM−P（東裏284、体育館）
53－2		6ACA−M（古里3280－2、中西）
53－3		6ABE　（古里573－2、永納）
53－4		6ACL−S（東裏271－1、田所）
53－5		6ACR　（木葉山97－5、田中）
53－6		6AGO　（鍛冶山、町道側溝）
53－7		6ADD−U（篠林3147－3、野呂）
53－8		6AGE−O（東前沖2470－2、上田）
53－9		6ACS−O（木葉山95－2、浅尾）
53－10		6ACA−R（古里3267－1、西川）
53－11		6ADR−W（木葉山131－7、西村）

次	年度	調査地区
53－12	59	6ABL-K（中垣内464－2、沢）
53－13		6ADQ-L（牛葉3022、辻）
53－14		6ACM-O（東裏287－3、体育庫）
53－15		6AFK-C・D（西加座2721－1、鈴木）
54		6AFE-N（西前沖2630、他）
55		6AEN-P（柳原、御館2785－1、他）
56		6ACH-S（東裏289－1、他）
57		6AGF-H・I（東加座2441、他）
58－1	60	6AFK-C・D（西加座2721－1、鈴木）
58－2		6AFH-N（西加座2681－8、三村）
58－3		6ACM-N（東裏3385－2、斎宮小）
58－4		6ABL-A（中垣内4731－1、小家）
58－5		6ADQ-Q（牛葉、町道側溝）
58－6		6ADR-V（木葉山131－3、西山）
58－7		6AGS-G（中西611、山路）
58－8		6ABM-A（中垣内430－3他、近鉄）
59		6ACJ-I（広頭3379－1、他）
60		6AGJ-B・D・G（東加座2450－1、他）
61		6AFF-H・I・D（西加座2663－1、他）
62		6AGI-J・K（東加座2425、他）
63		6AFG-M・N（西加座2659－1、他）
64－1	61	6ACO-H（牛葉3395－1、トーカイ）
64－2		6AGL-F（東加座2435－1、大和谷）
64－3		6ADD-A（篠林3136－1、山路）
64－4		6AGR-N（笛川2340、丸山）
64－5		6ACM-R・Q・P（東裏3385－2、斎宮小）
64－6		6ACK（東裏361－2、竹川自治会）
64－7		6AGI-G（東加座2435－2、大和谷）
64－8		6AGR-J（笛川2341－6、山下）
64－9		6ADQ-M（牛葉、町道側溝）
64－10		6ACF-A（東裏365－1、樋口）
64－11		6ACM-O（東裏3385－2、斎宮小）
64－12		6ADE-B（篠林3162－3、江崎）
65－1		6ACC-M（塚山3331－1）
65－2		6AEG-S（楽殿2908－2、他）
65－3		6AEI-L・M（楽殿2917－4、他）
66		6AGG-C（東加座2437－1、他）
67		6ABF（古里523、他）
68		6ABF（古里502、他）
69		6AGM-E~H（東加座2373、他）
70－1	62	6ACC-X（塚山3325－1、江崎）
70－2		6AEE-W（楽殿2875－2、岡田）
70－3		6ADR-I（木葉山129－5、大西）
70－4		6ACN-A・B・E・L（広頭3389－8、林）
70－5		6AEW-A（鈴池333－1、八田）
70－6		6ABL-S（中垣内430－6、奥山）
70－7		6AEE-T（楽殿577、浅尾）
70－8		6AEU・6AEX-A（牛葉、鈴池、三重県）
70－9		6AEP-C・D（御館、柳原、近鉄）
70－10	62	6AFD-B・D（西前沖2649－4、大西）
70－11		6AGO-H（鍛冶山2363－2、川合）
70－12		6ADD-F・G（篠林3158、長谷川）
70－13		6AEC-N・G（苅干、佐藤）
70－14		6ABL-R（中垣内459、北岡）
70－15		6AFD-A（西前沖2644－1、山本）
70－16		6ACB-A他（町道塚山線拡幅）
71		6ABE（古里501、他）
72－1		6ABE（古里500、他）
72－2		6ABF（古里523、他）
72－3		6ABF（古里551－2、他）
72－4		6ABF（古里528－1、他）
73		6AFF-B・C・E・G（西加座2663－5、他）
74－1		6ABF（古里523、他）
74－2		6ABF（古里522、他）
74－3		6ABE・F（古里524、他）
74－4		6ABE（古里548－1、他）
74－5		6ABE（古里543、他）
75		6AGF-C（西加座2702、他）
76－1	63	6ADB-A~D（町道塚山線拡幅）
76－2		6ADE-F・G（篠林3158、長谷川）
76－3		6ABE（古里554、明和町）
76－4		6ACK（東裏354－13、山際）
76－5		6AEE-W（楽殿577、関田）
76－6		6ACB-A（塚山3276－1、今西）
76－7		6ACM-M（広頭3385－2、斎宮小）
76－8		6AFM-G（鍛冶山2736－3、近鉄）
76－9		6ACQ（南裏144－1、田所）
76－10		6ABD-U（古里579、池田建設）
76－11		6ABE（古里554、明和町）
76－12		6AEE（楽殿、町道下水管）
76－13		6ADD-K（篠林3143、中西）
76－14		6AEE-S（楽殿2878－3、山路）
76－15		6ABF~6ABH（中垣内、県道拡幅）
76－16		6AEK-B（下堀2936－2、明和町）
76－17		6AEV-A（鈴池339－5、永島）
77		6AGJ-D（東加座2453、他）
78		6ADL（宮ノ前3054、他）
79		6AGG-A・B（東加座2440、他）
80		6AFG-F~I（西加座2696、他）

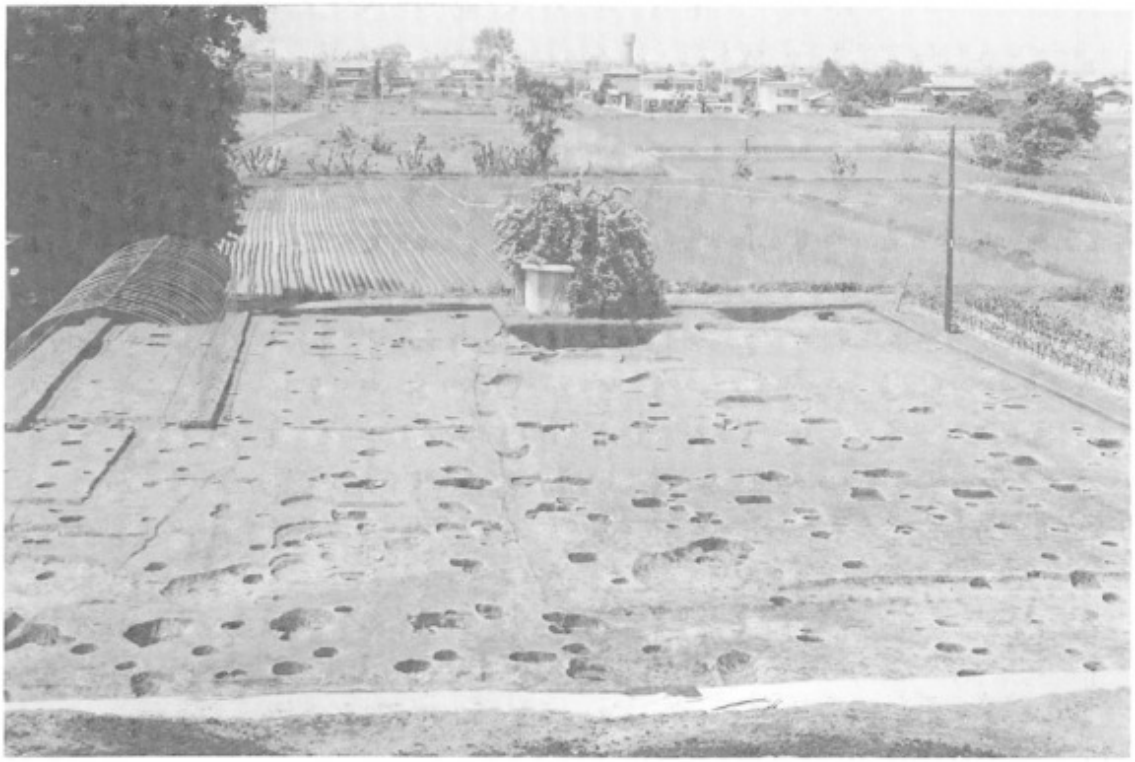


斎宮跡・地区表示

図　　版

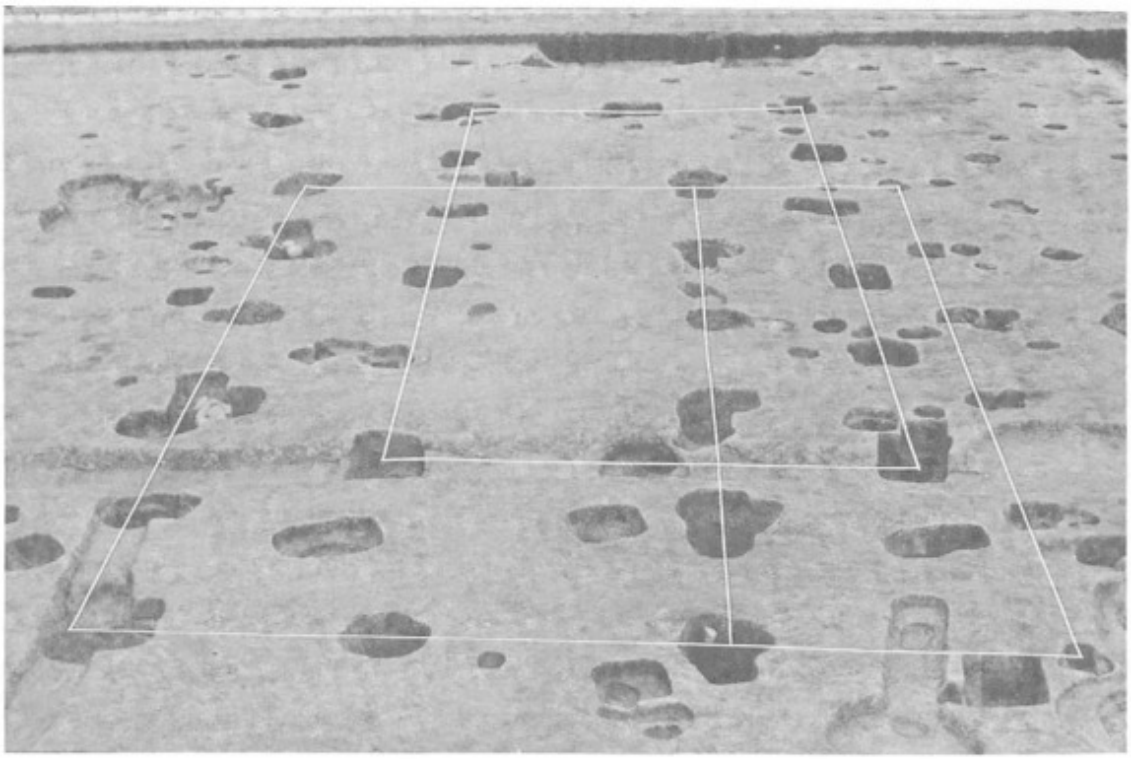
第77次調査（南から）

第79次調査（西から）

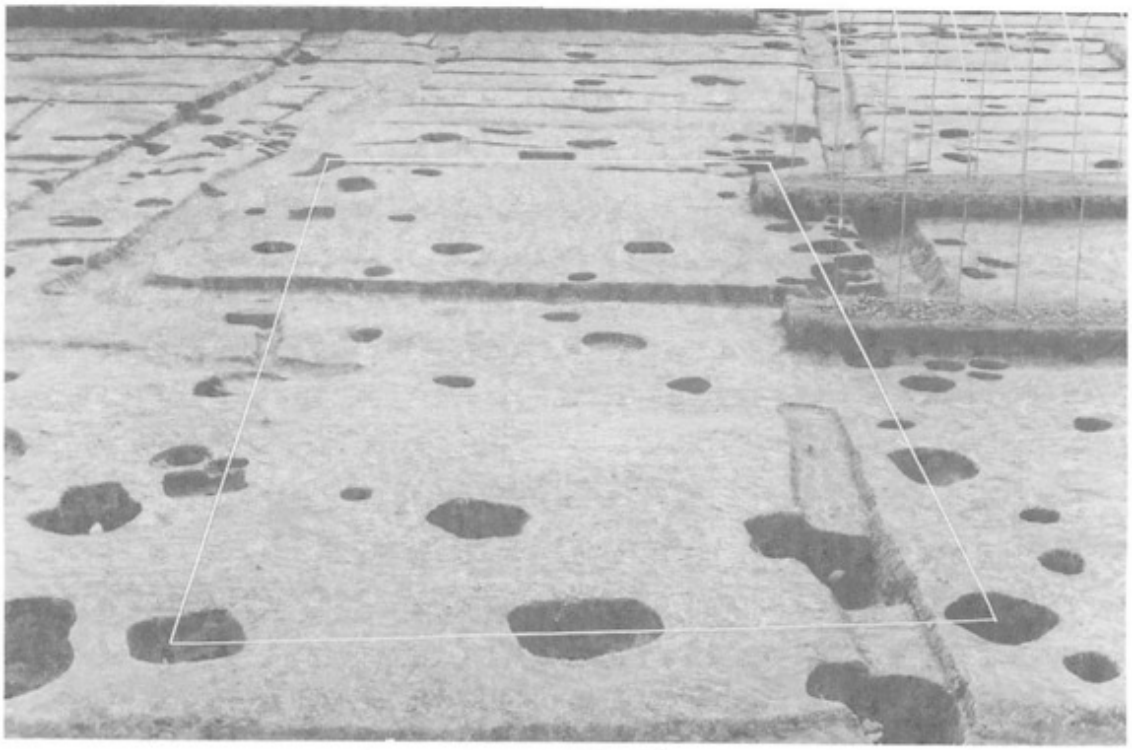


全　景（南から）

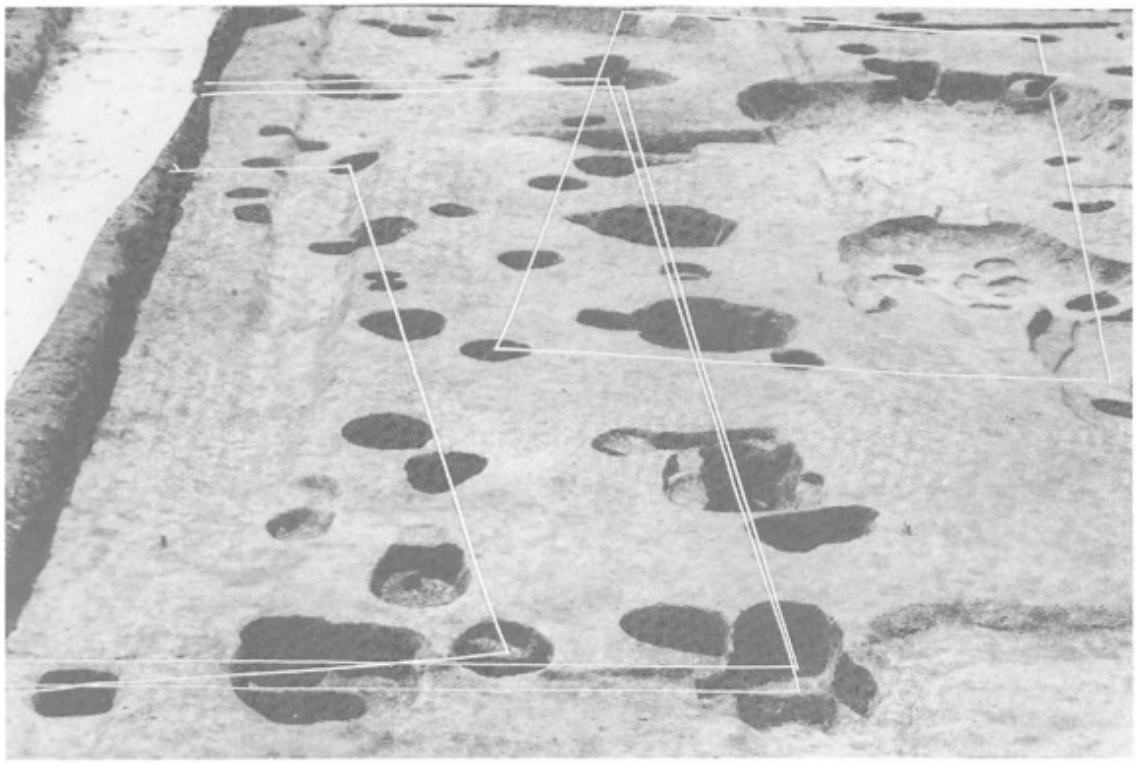
南部景（北から）



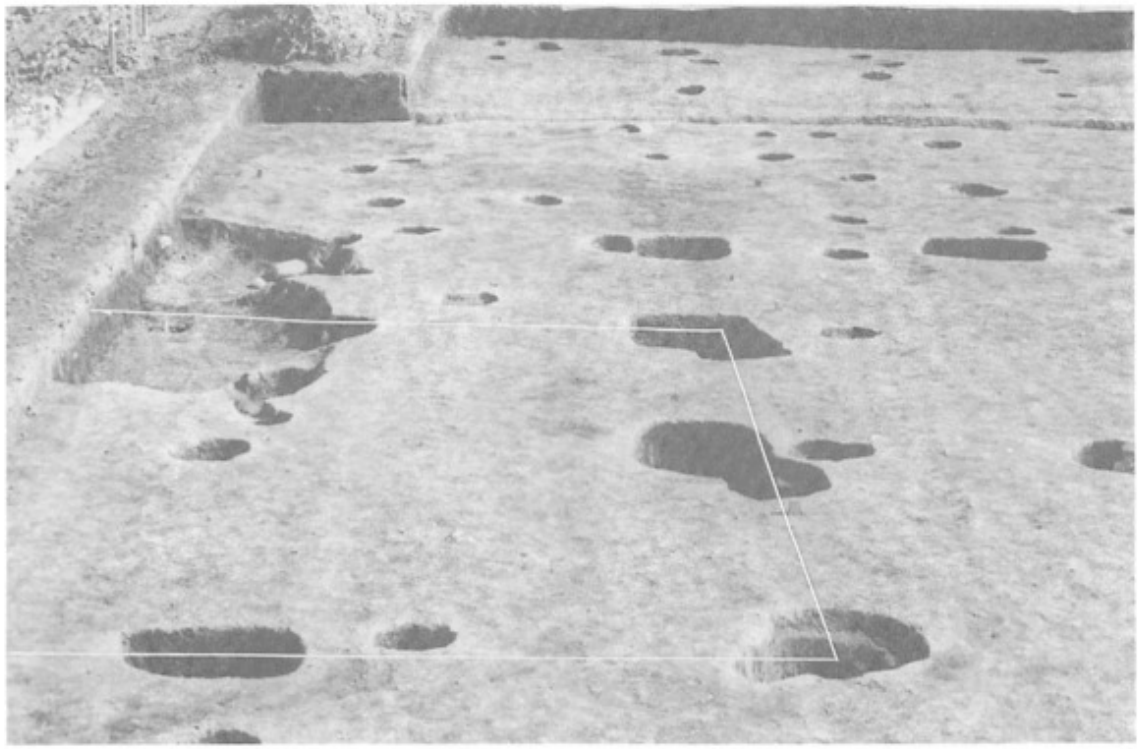
ＳＢ5221・ＳＢ5222（西から）



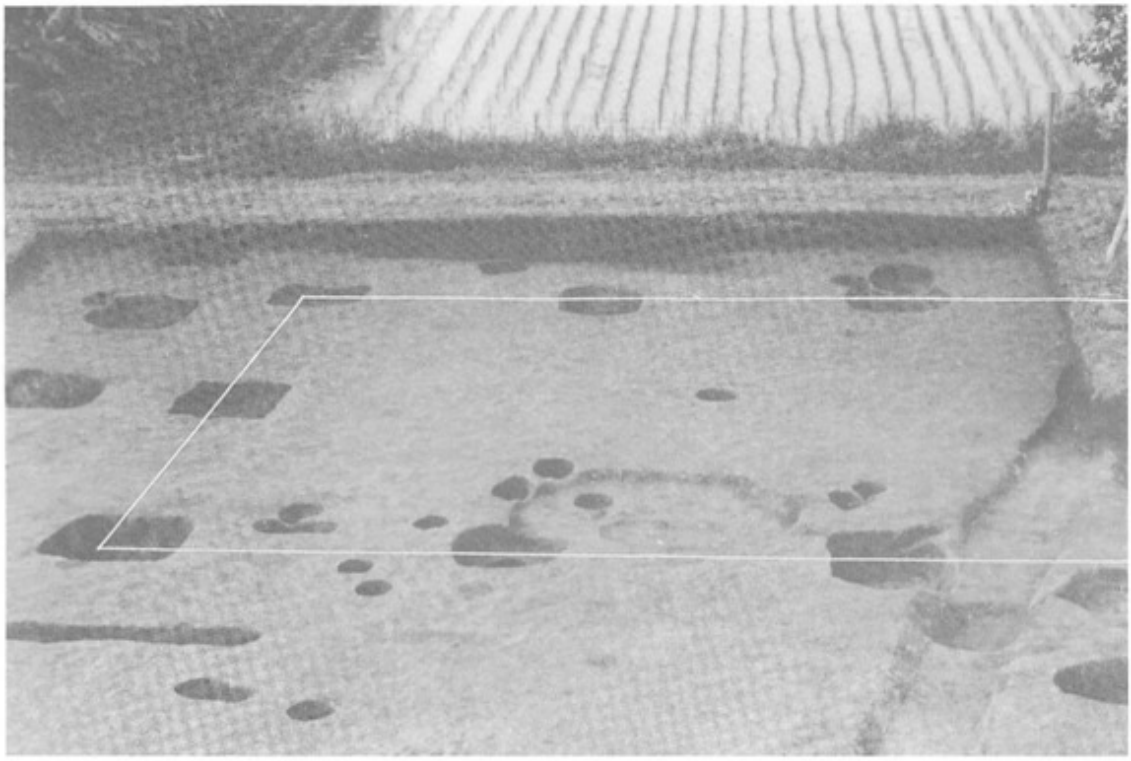
ＳＢ5220（東から）



SB5231・SB3960・SB3961・SB3966（東から）



SB5230（北から）



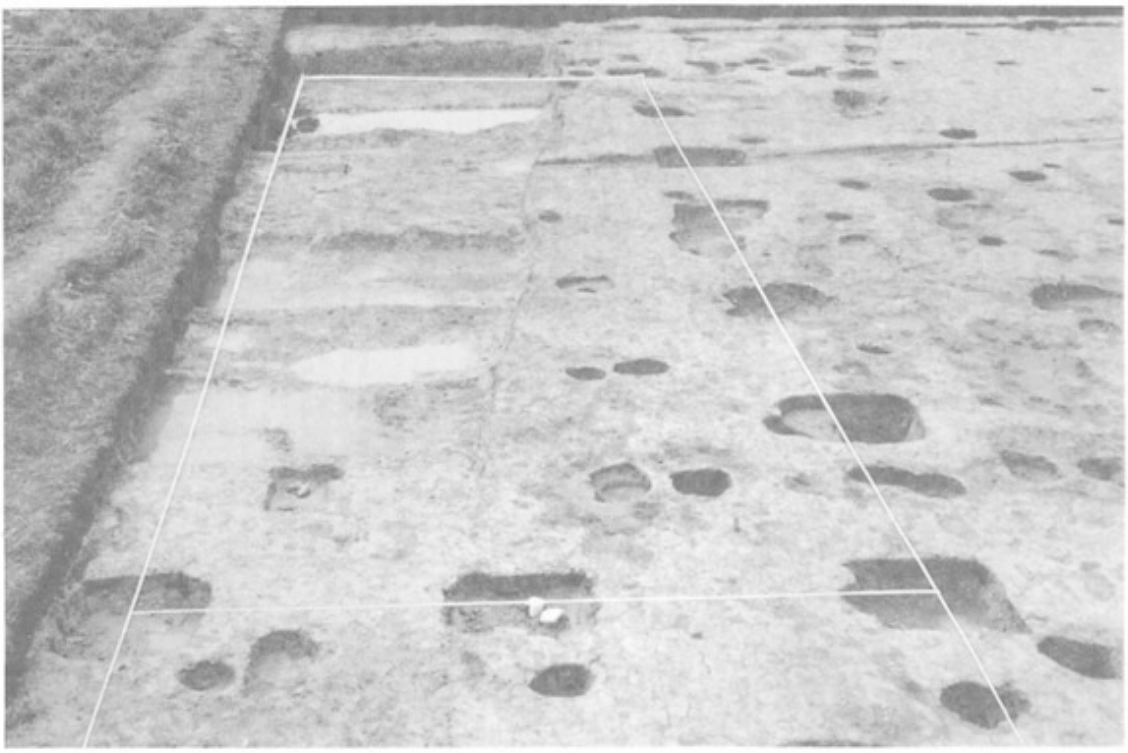
SB5209（南から）

SE5210（東から）

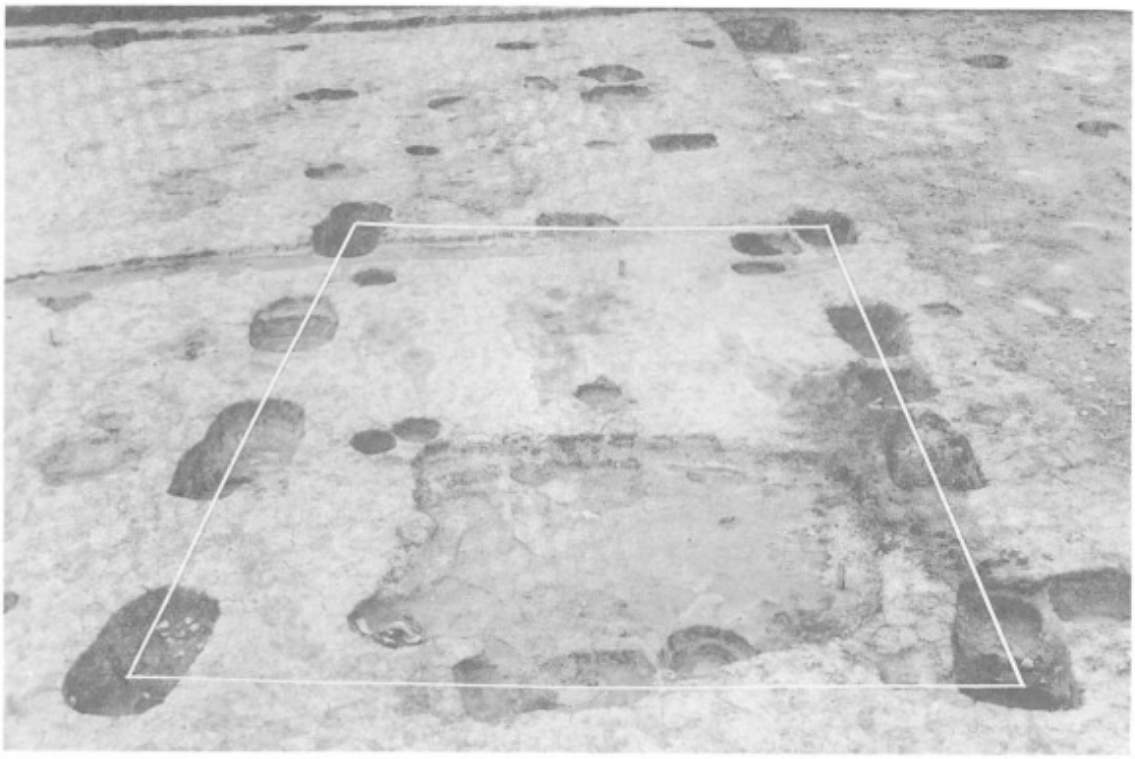
全　景（北から）

北部景　溝群（東から）

南部景（東から）



SB2867（東から）

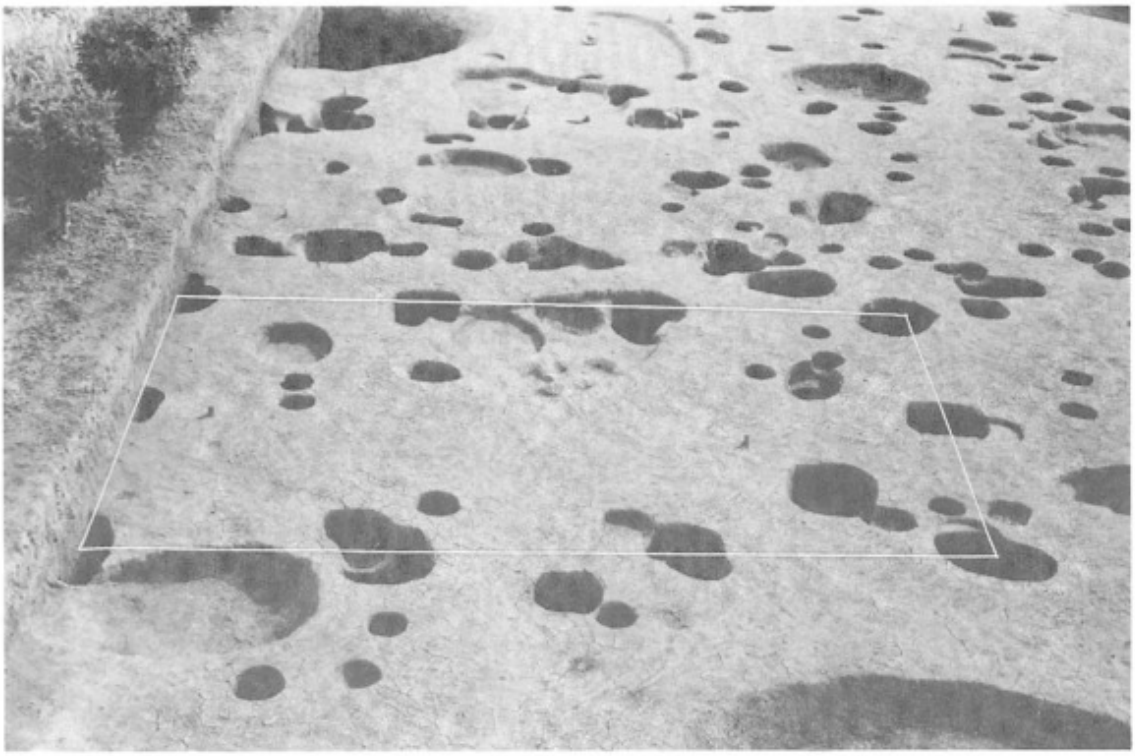


SB5271（東から）

SB5272・SB5273・SB5274（東から）

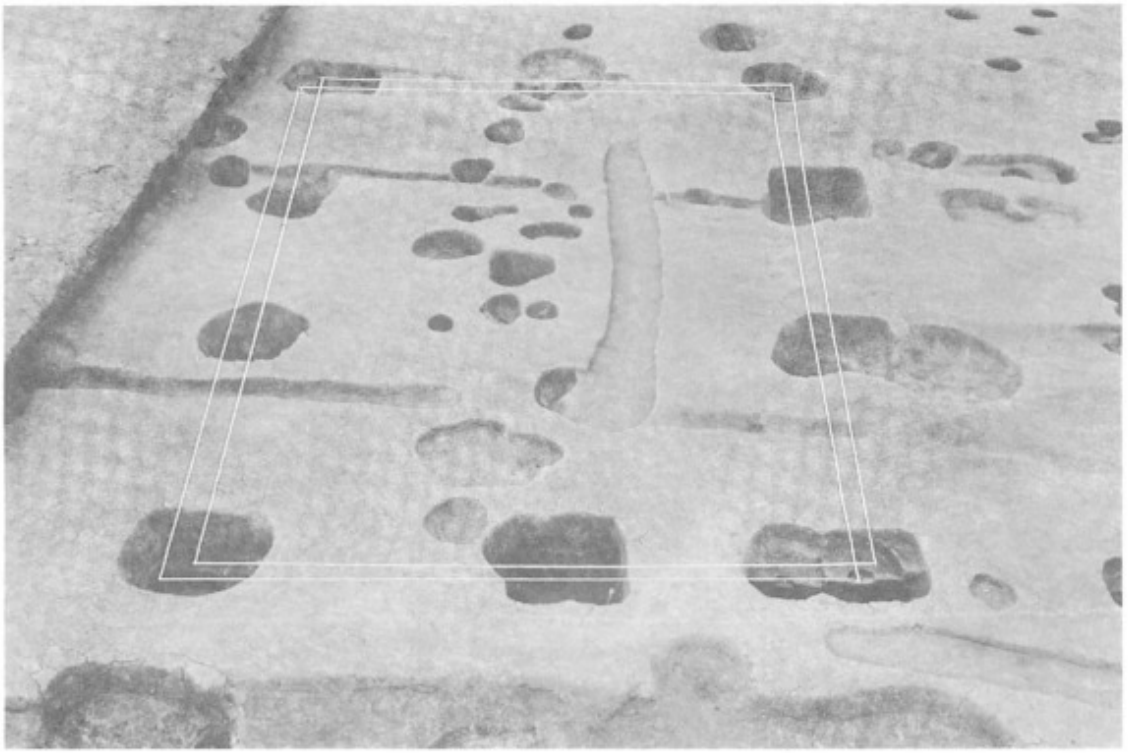
全　景（北西から）

ＳＢ5317・ＳＢ5322（西から）

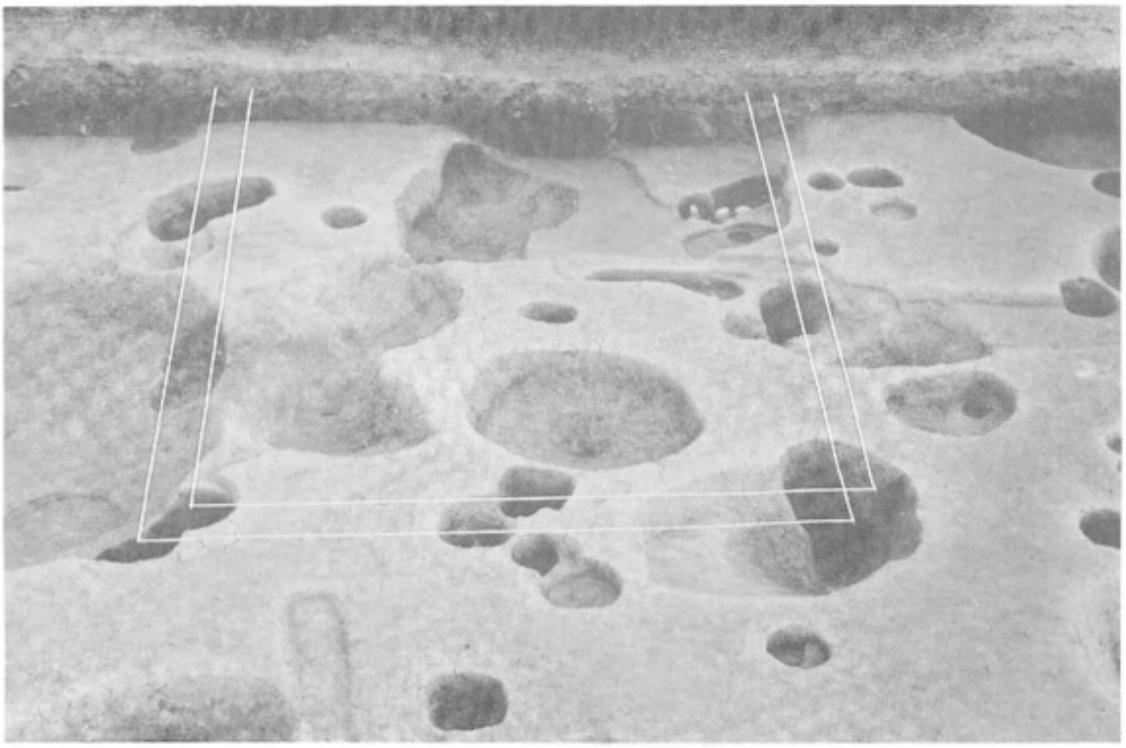


SB5332（北から）

SB5321（北から）



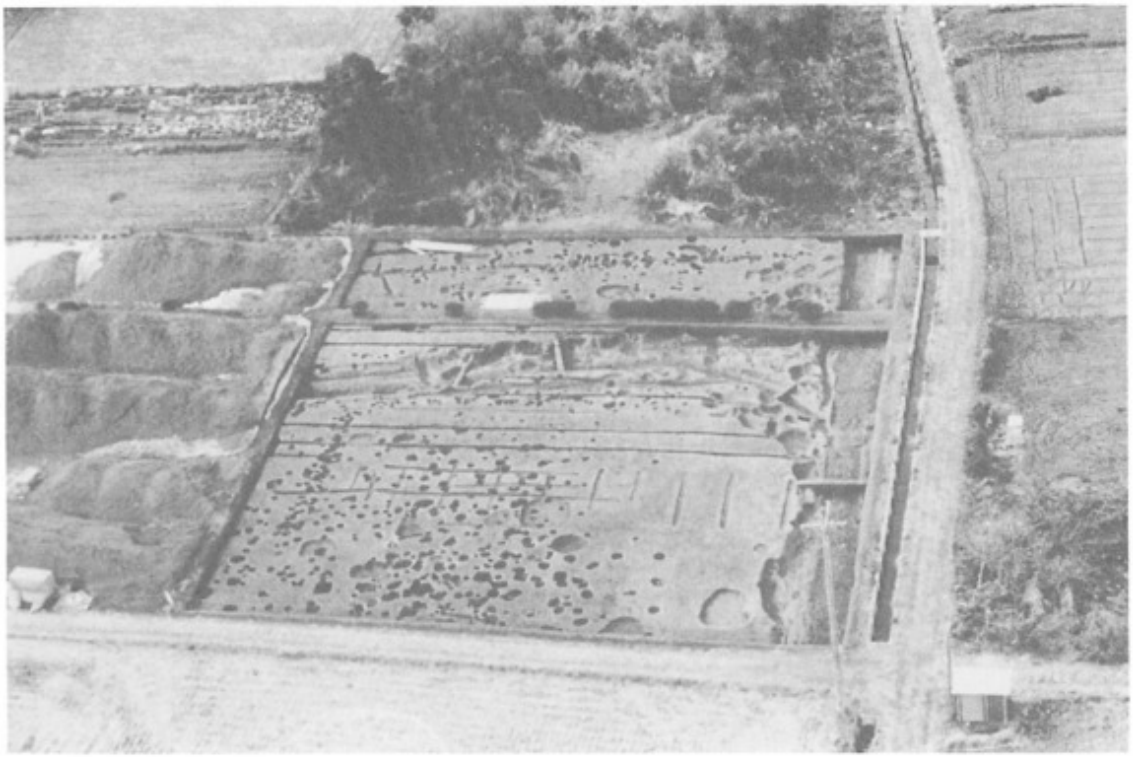
SB5325・SB5326（東から）



SB5345・SB5346（西から）

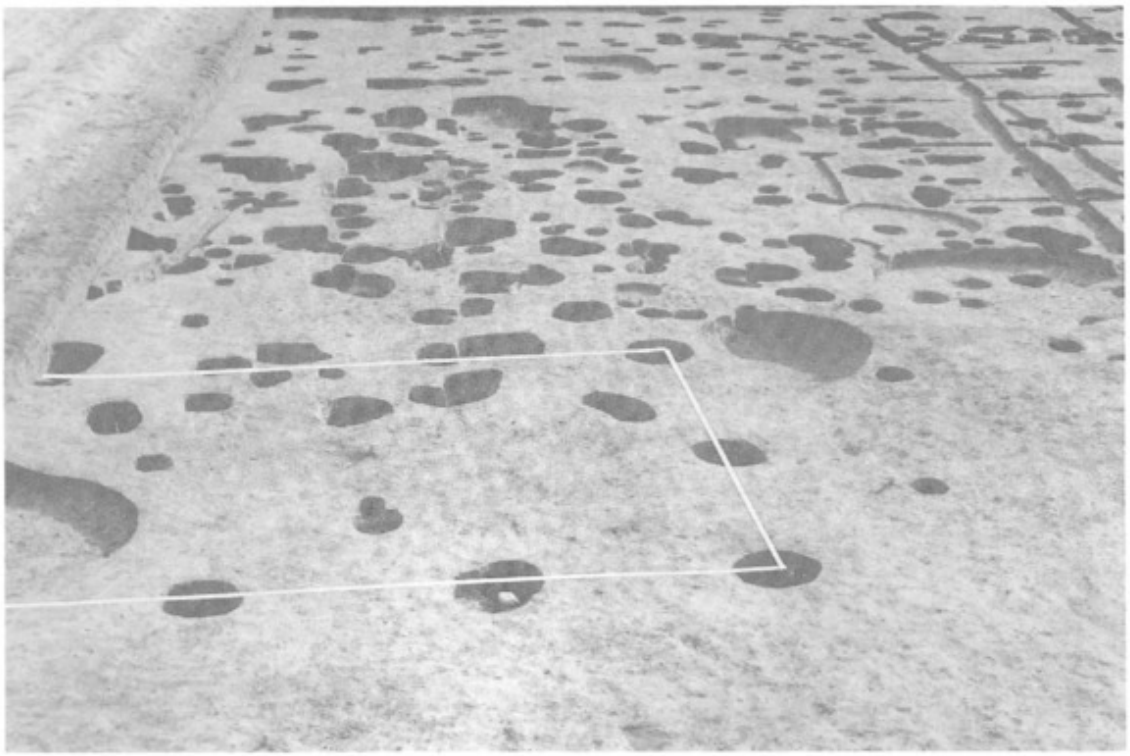
SB5310・SE5300（南から）

SB1921・SB5316（西から）

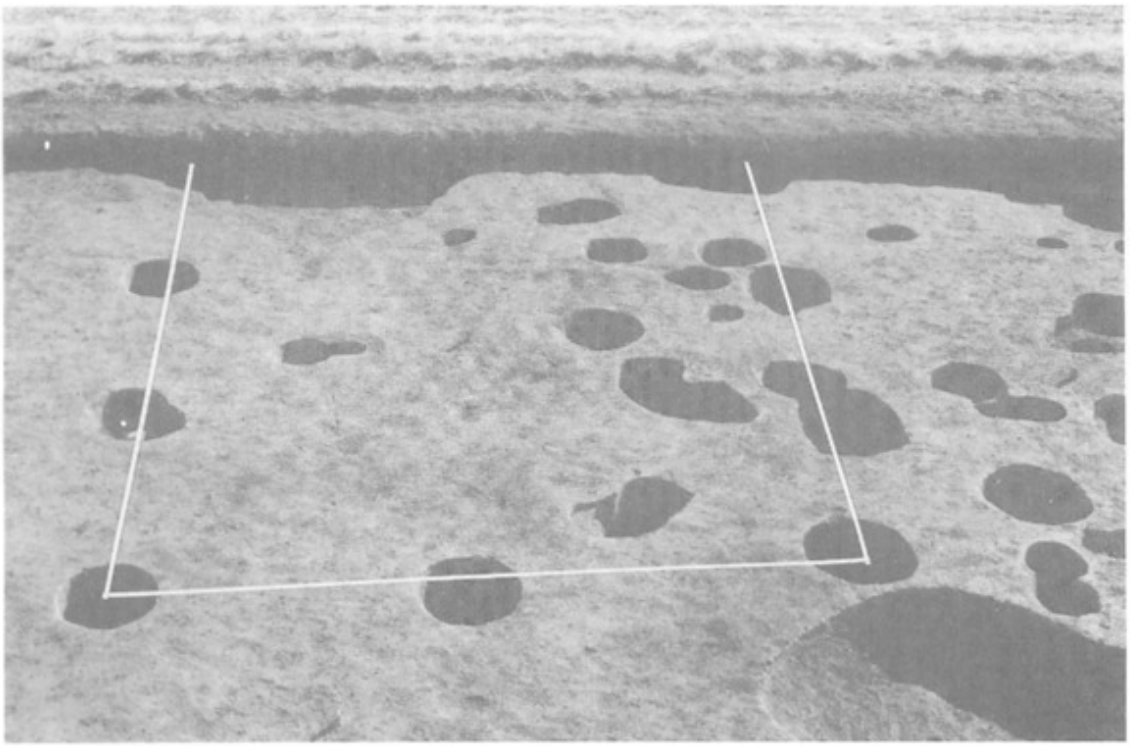


全　景（東から）

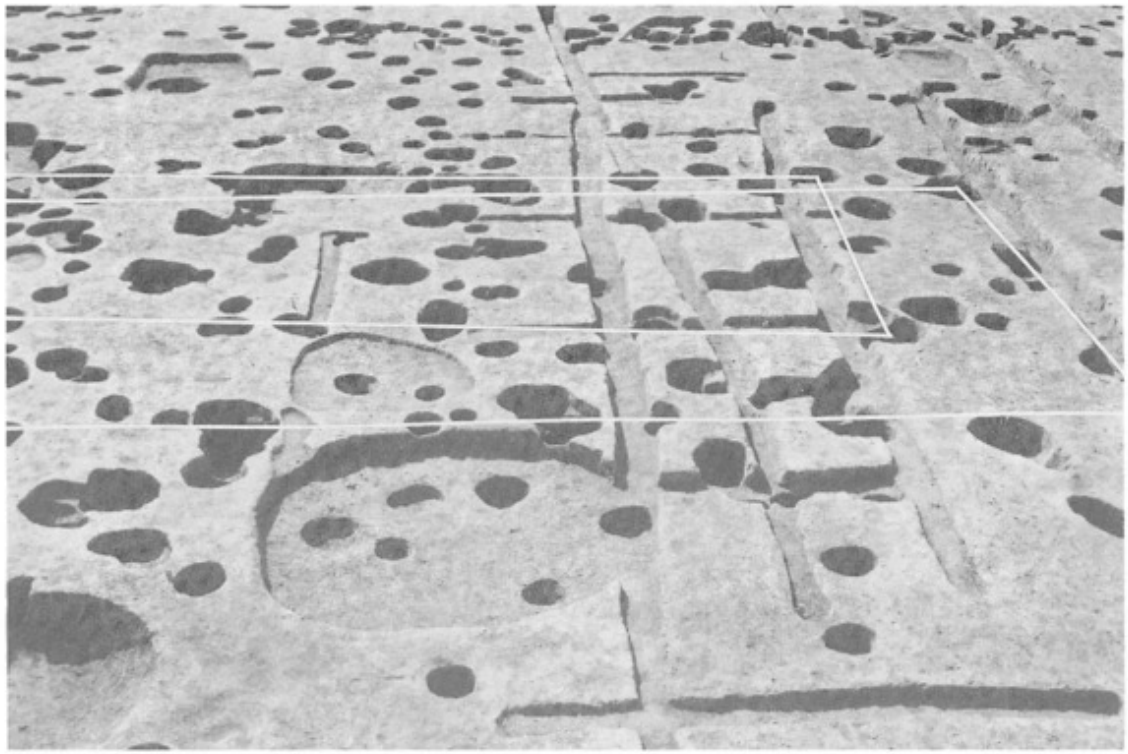
全　景（北から）



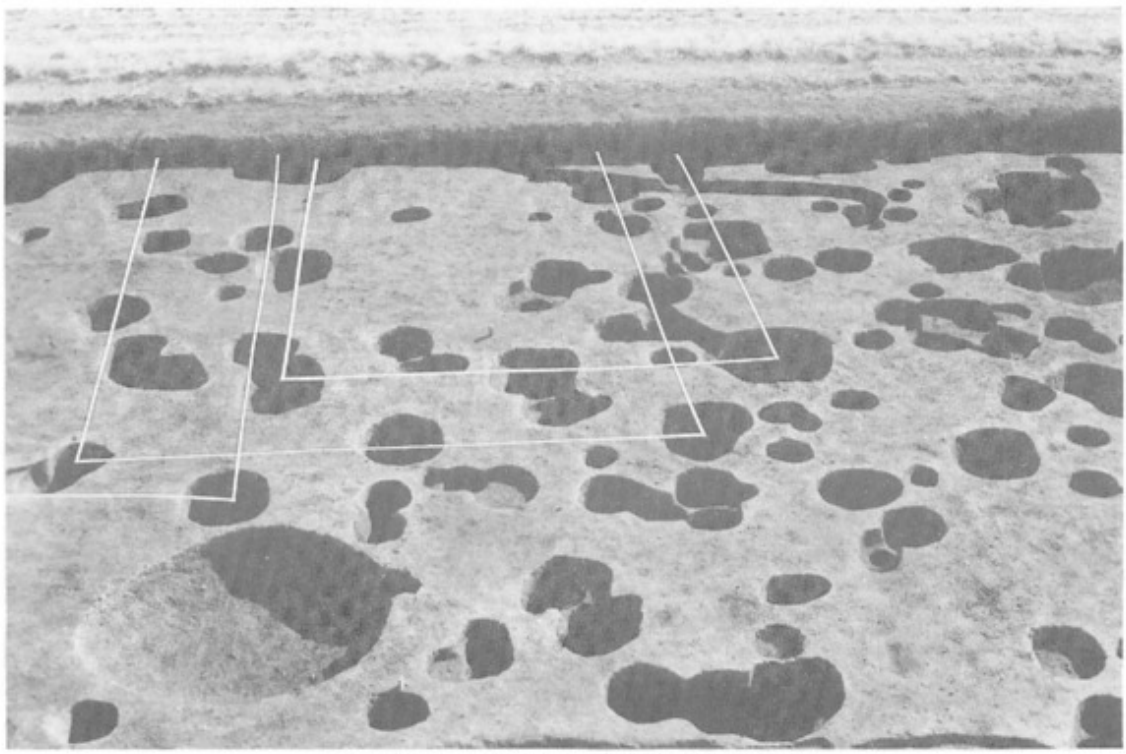
東部景（北から）



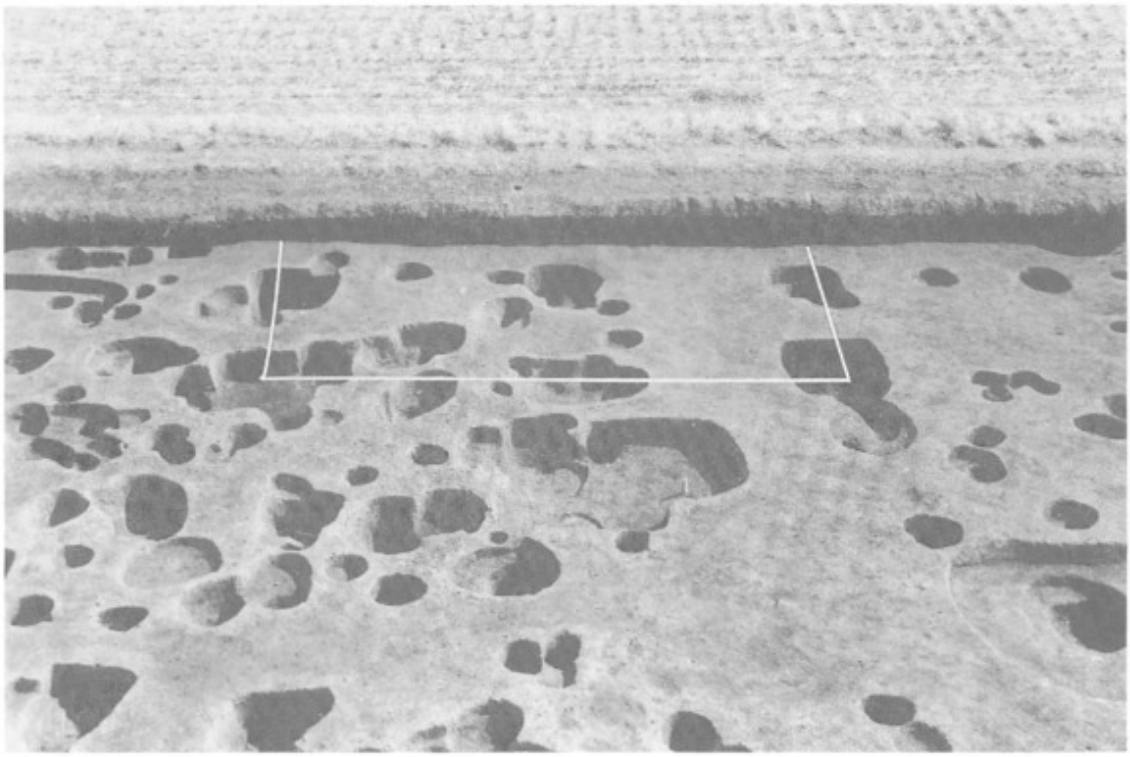
SB5392（西から）



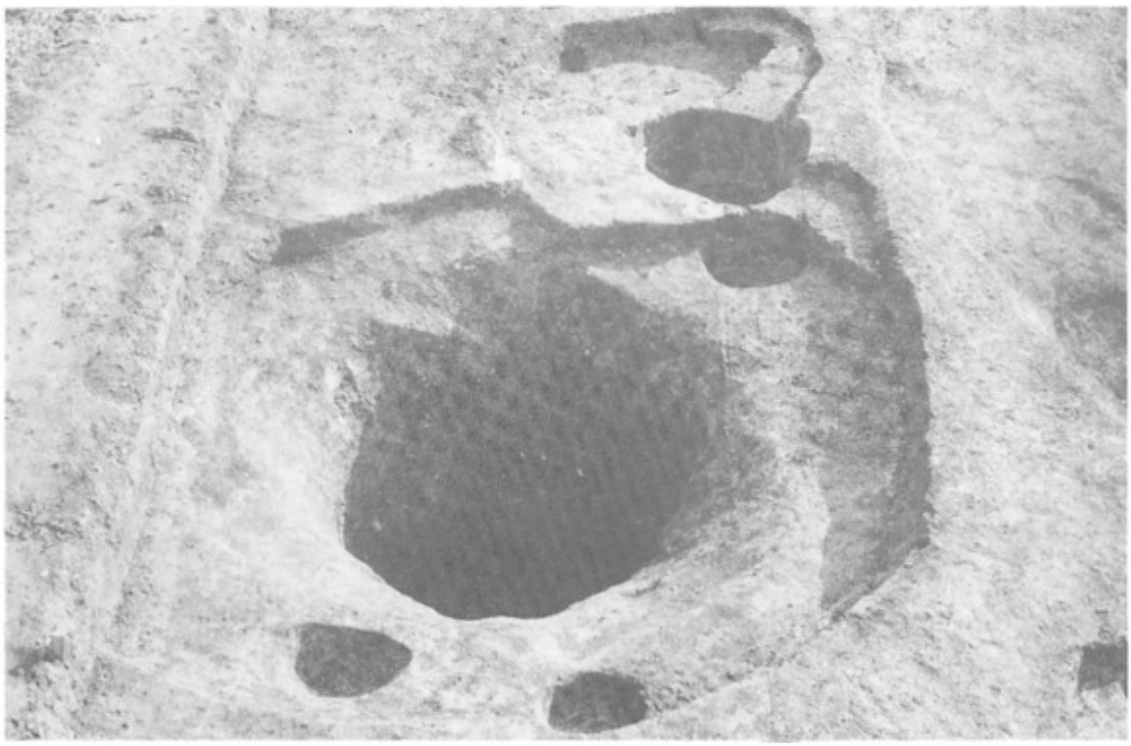
SB5405・SB5407（北から）



SB5392・SB5393・SB5396（西から）



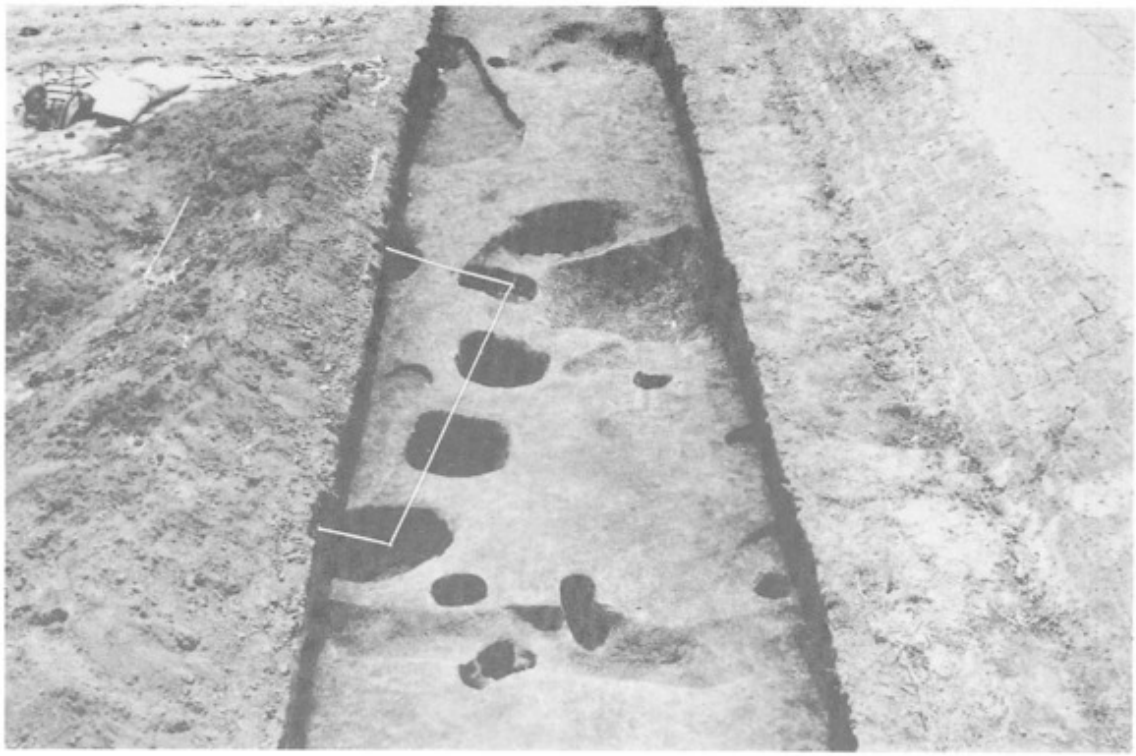
SB5416（西から）



SE5376（北から）

第76－2次調査　東部景（北から）

第76－2次調査　西部景（北から）



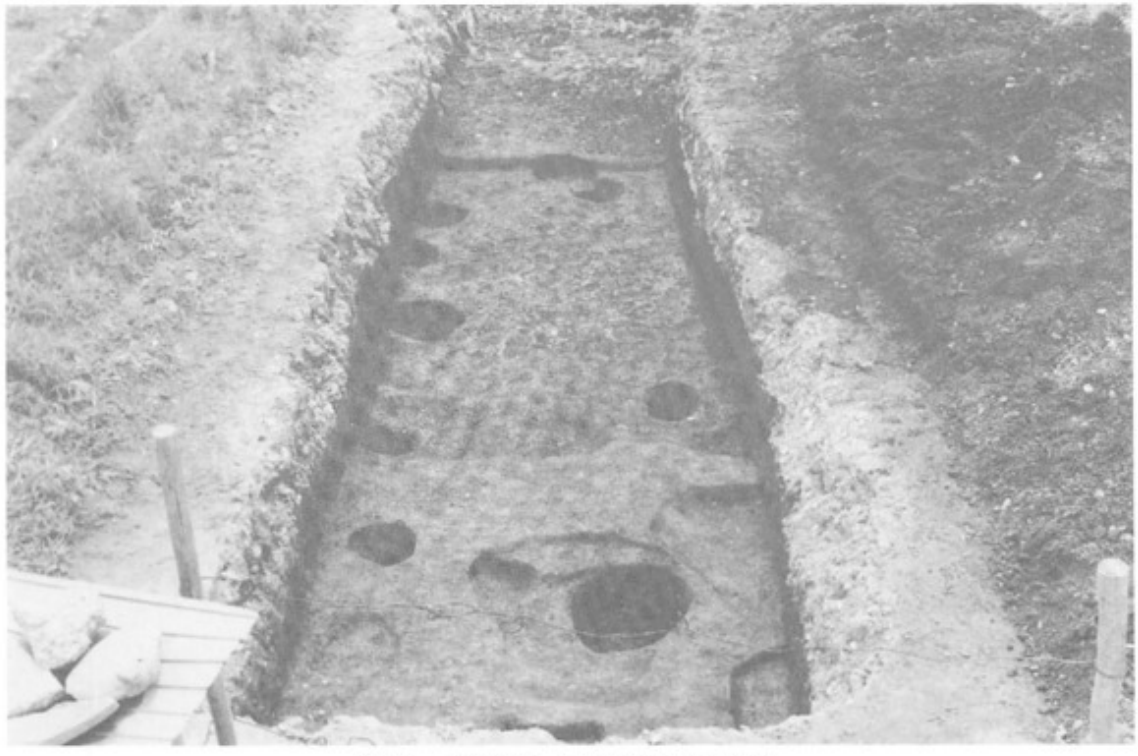
第76－3次調査　第1トレンチSB5468（西から）

第76－3次調査　第1トレンチSB5472（西から）

第76－3次調査　第2トレンチ（東から）

第76－3次調査　第3トレンチ（東から）

第76－4次調査（東から）

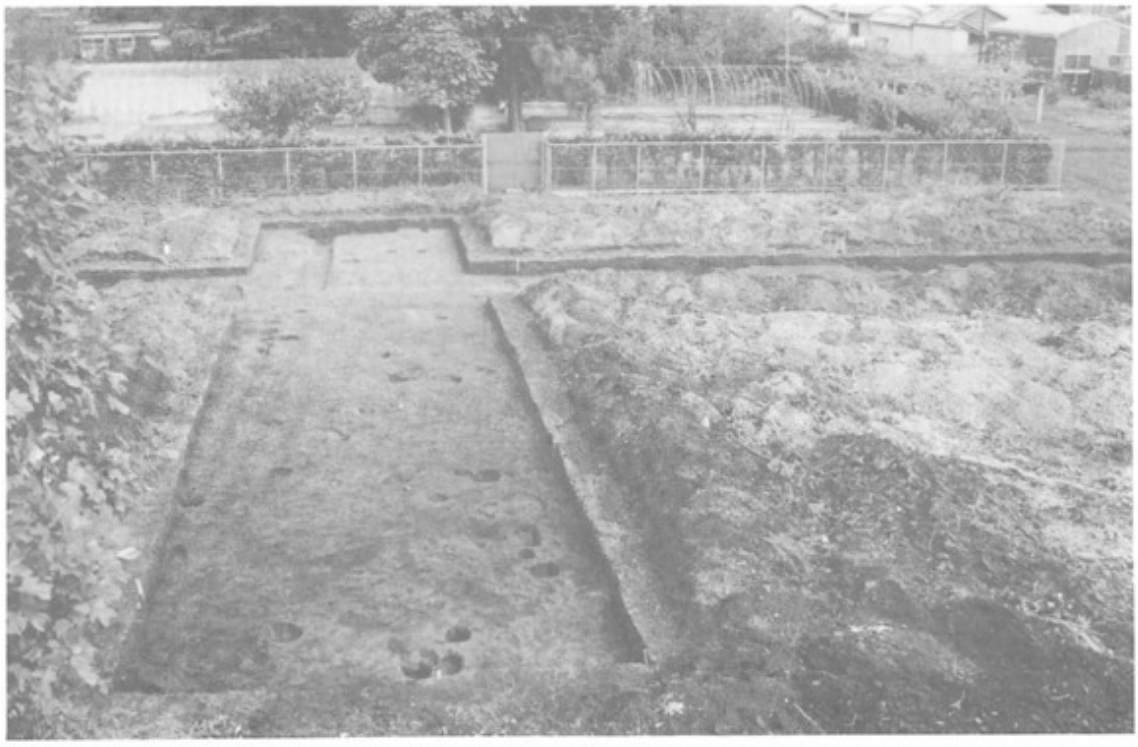


第76－5次調査　SB5492（東から）

第76－6次調査（東から）

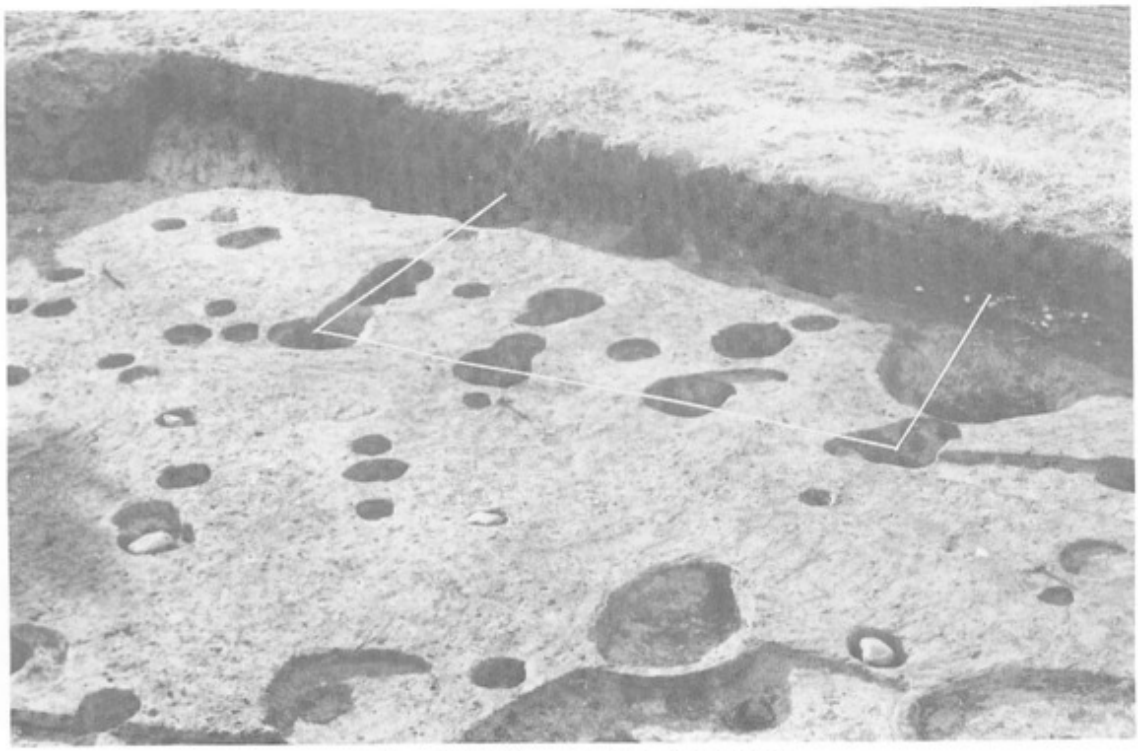
第76－7次調査（北から）

第76－８次調査（東から）

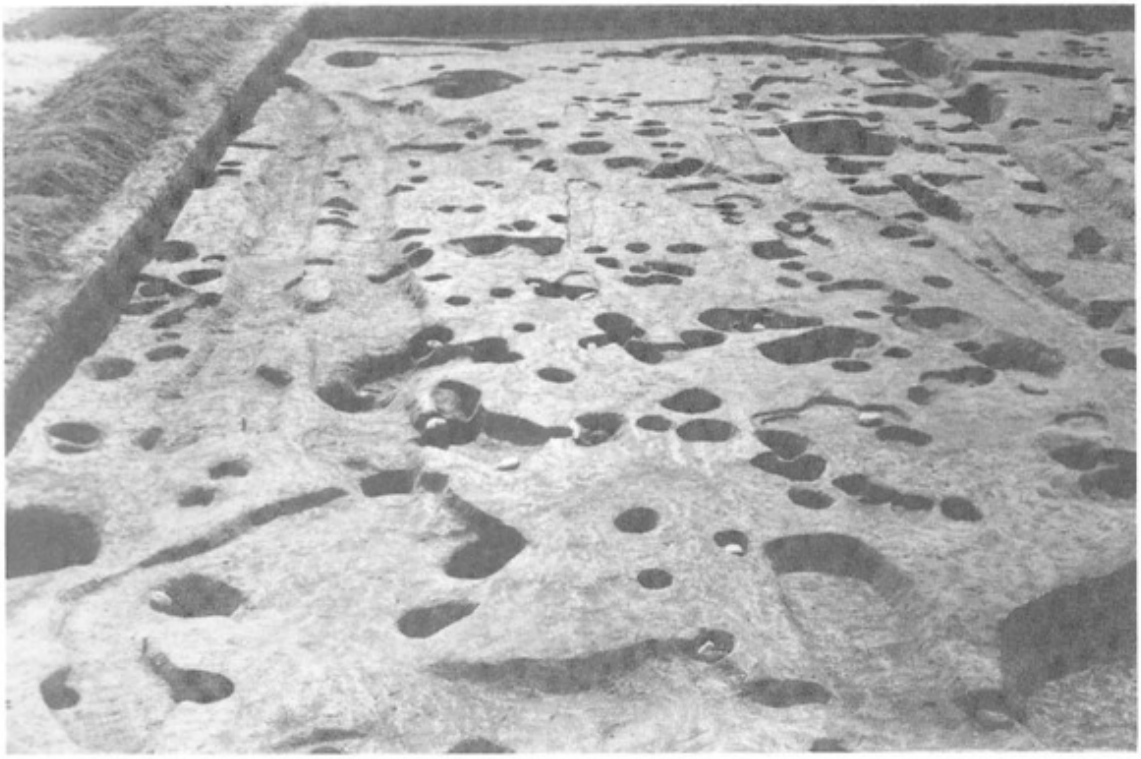


第76－９次調査（南から）

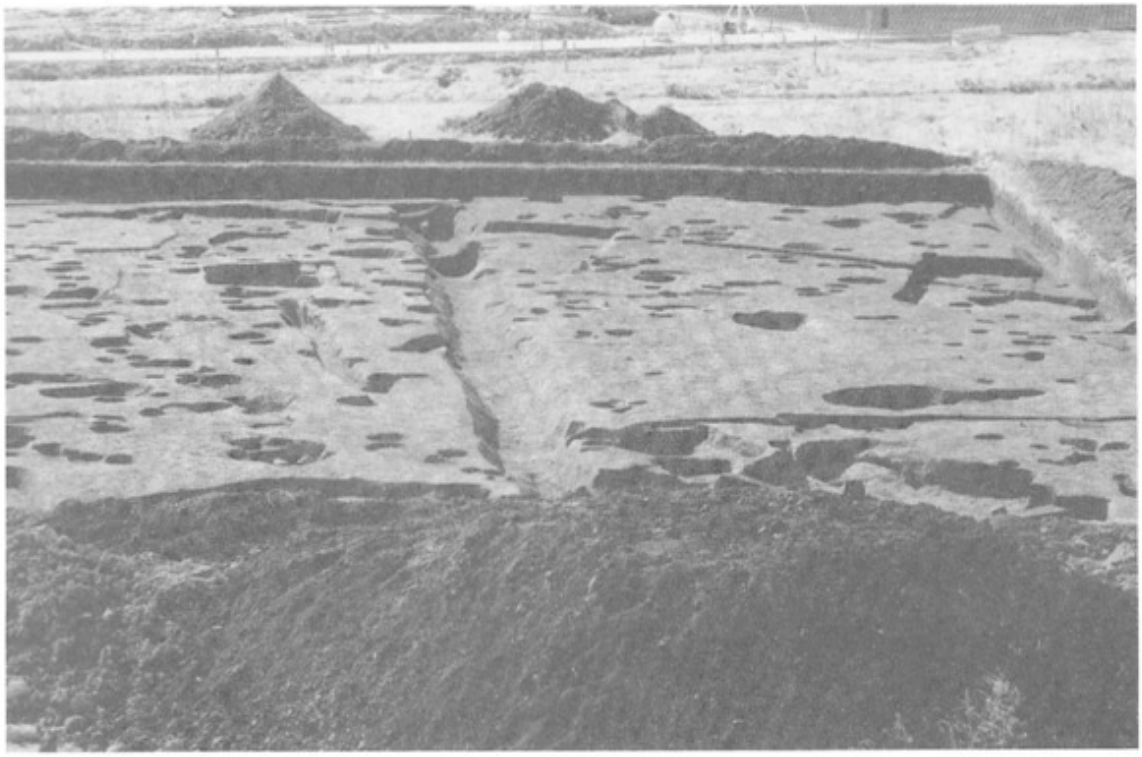
第76－10次調査（南から）



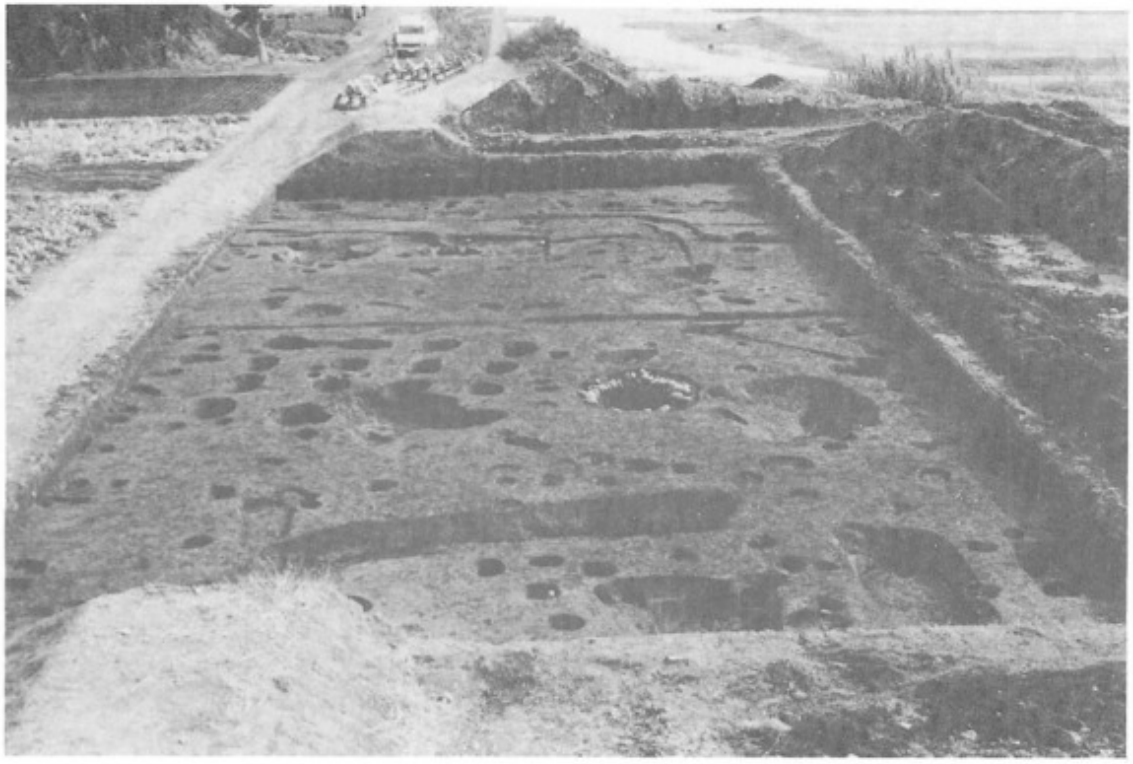
第76－10次調査　ＳＢ5520（東北から）



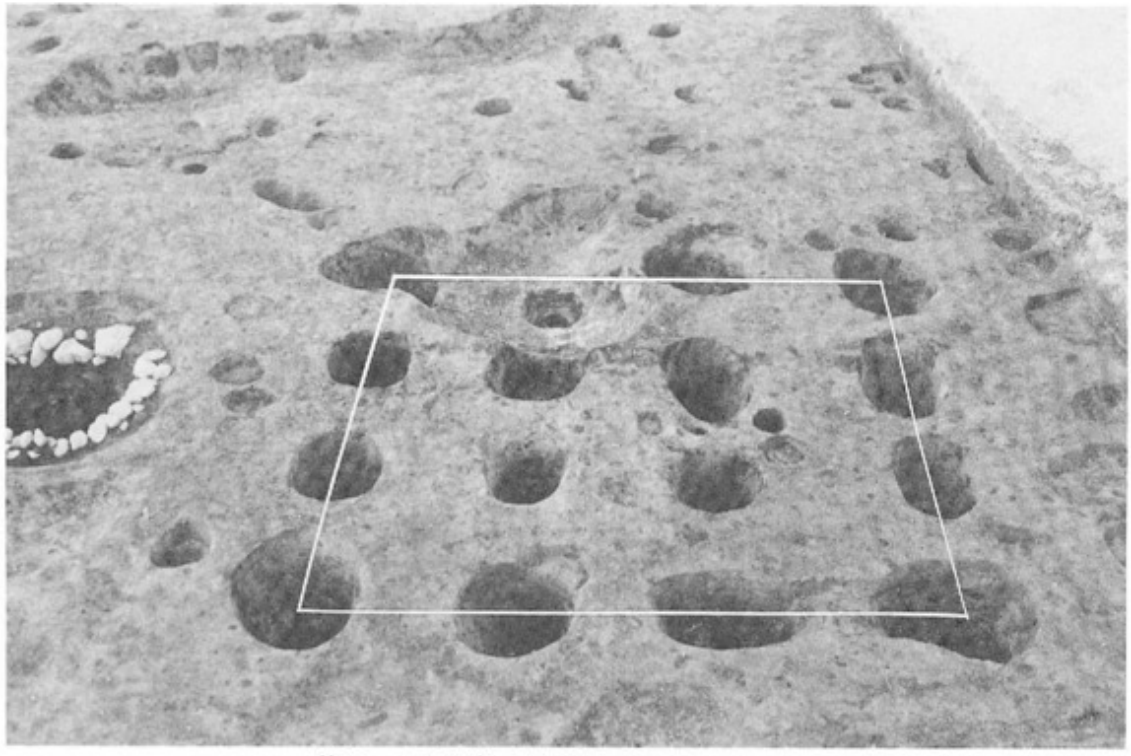
第76－11次調査　南調査区（北から）



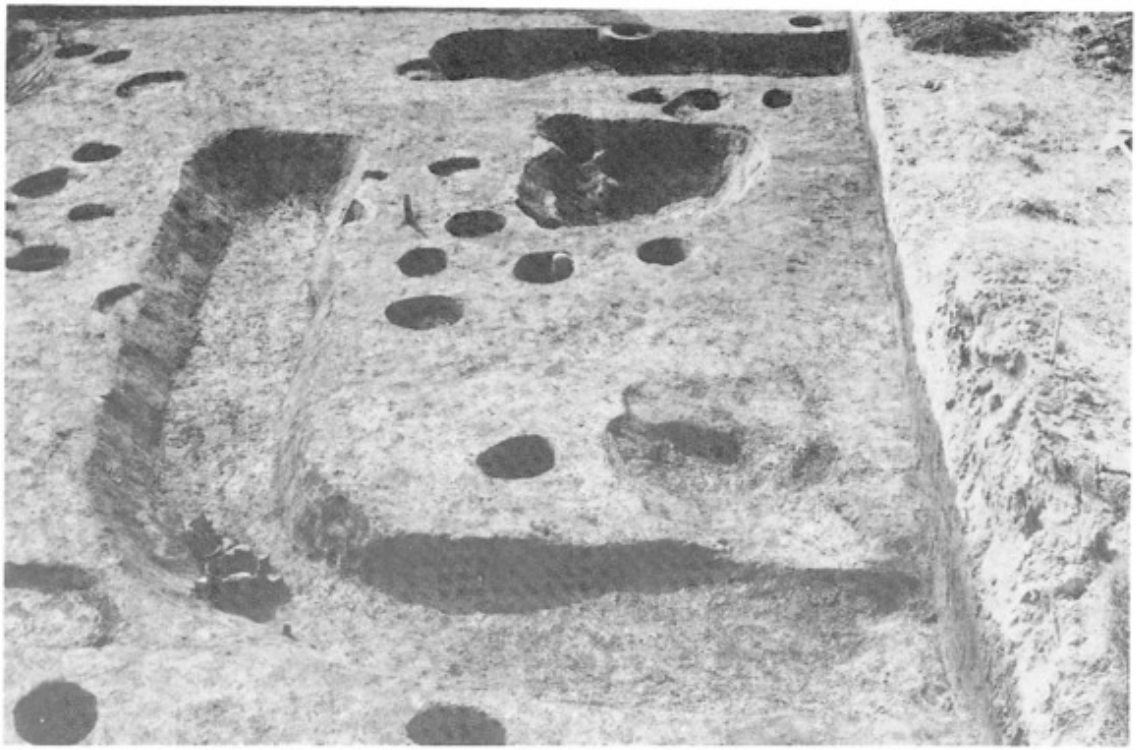
第76－11次調査　南調査区（北から）



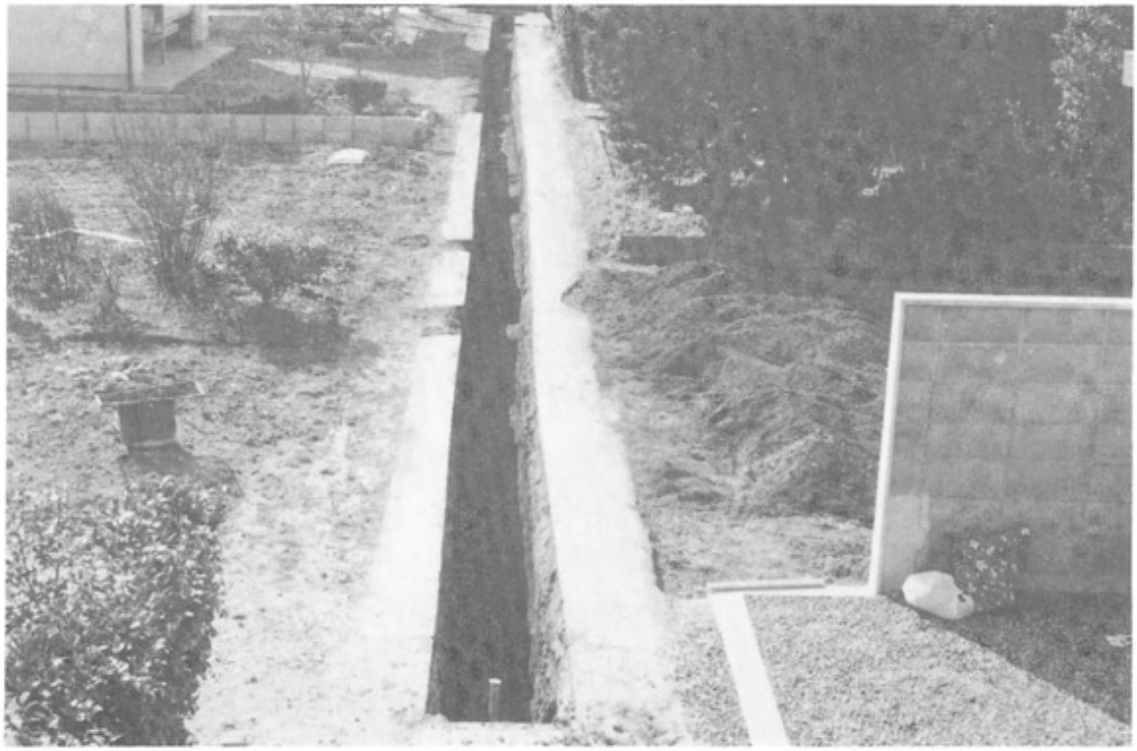
第76－11次調査　北調査区（西から）



第76－11次調査　北調査区ＳＢ5530（東から）

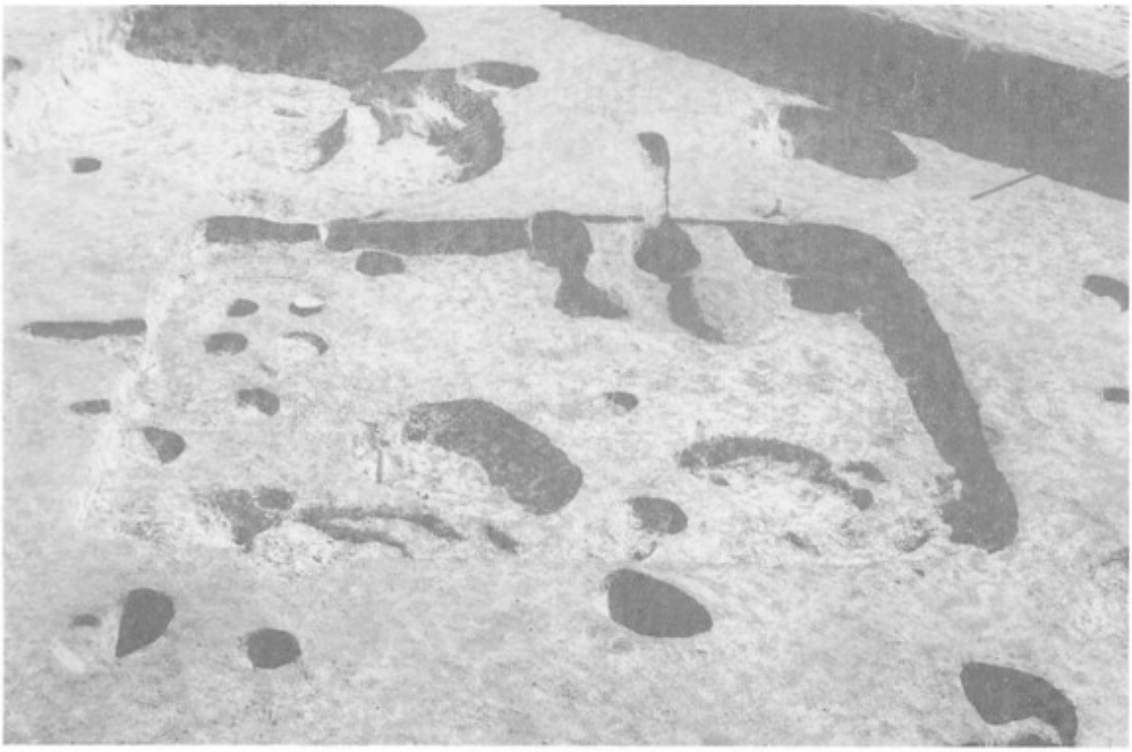


第76－11次調査　北調査区ＳＸ5525（北から）

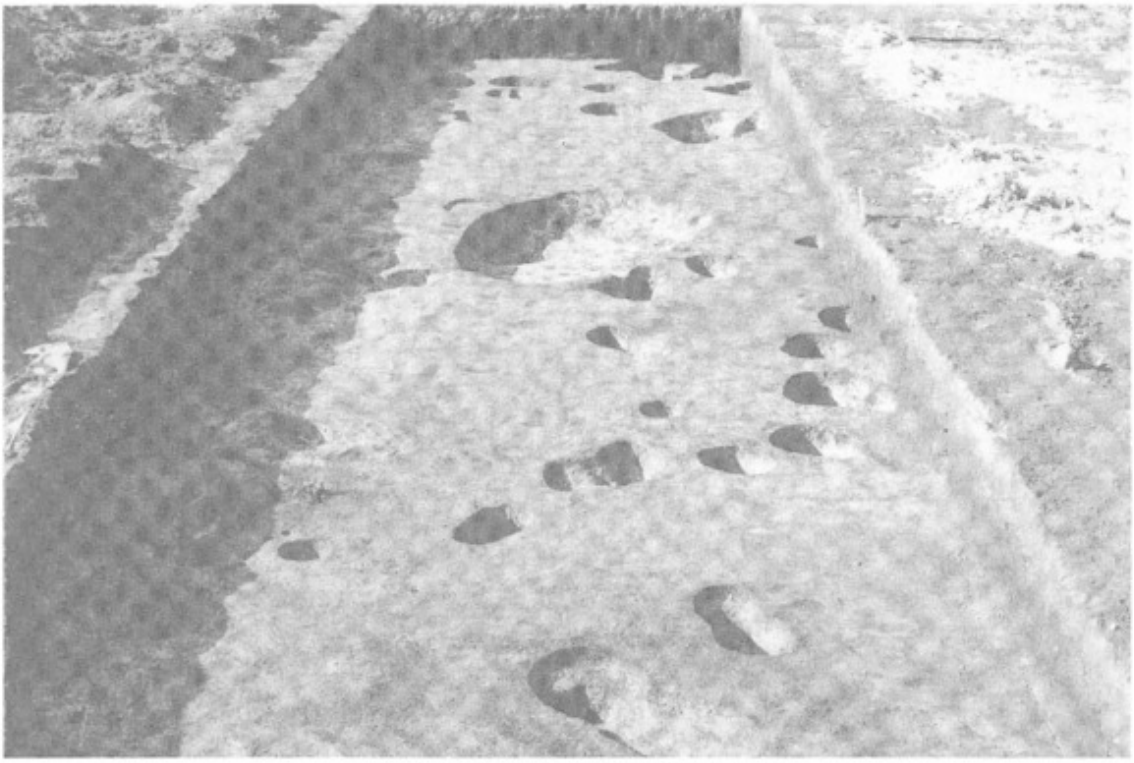


第76－12次調査（東から）

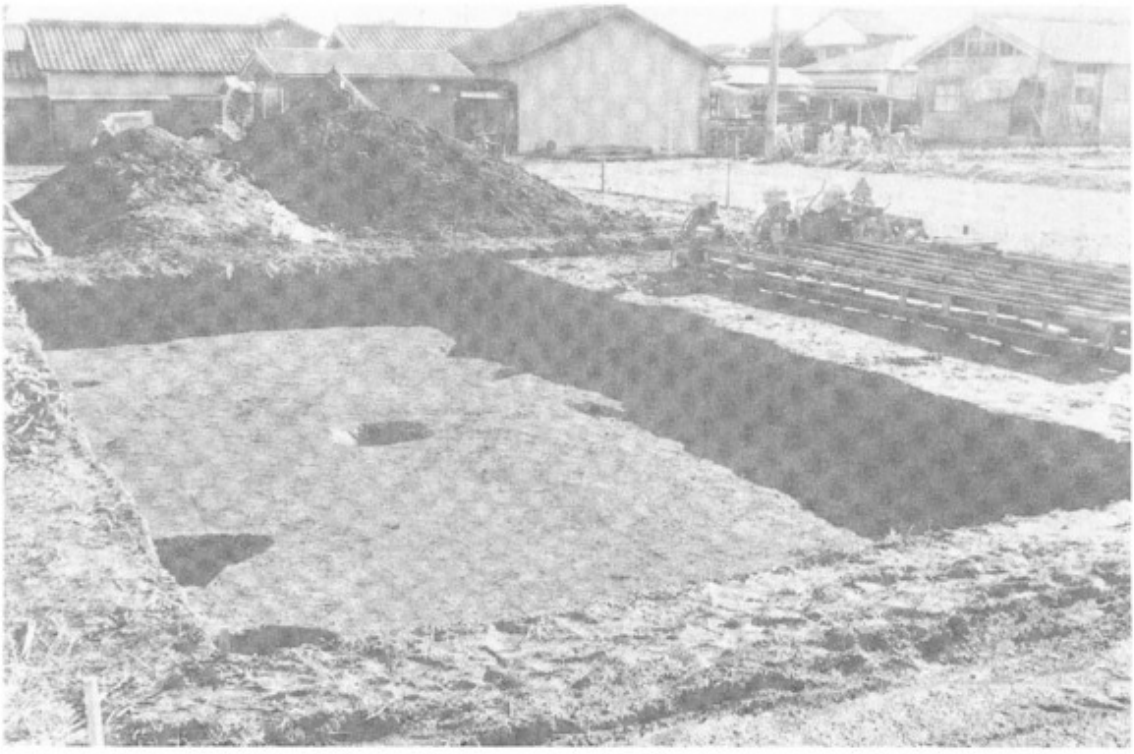
第76－13次調査　南調査区（西から）



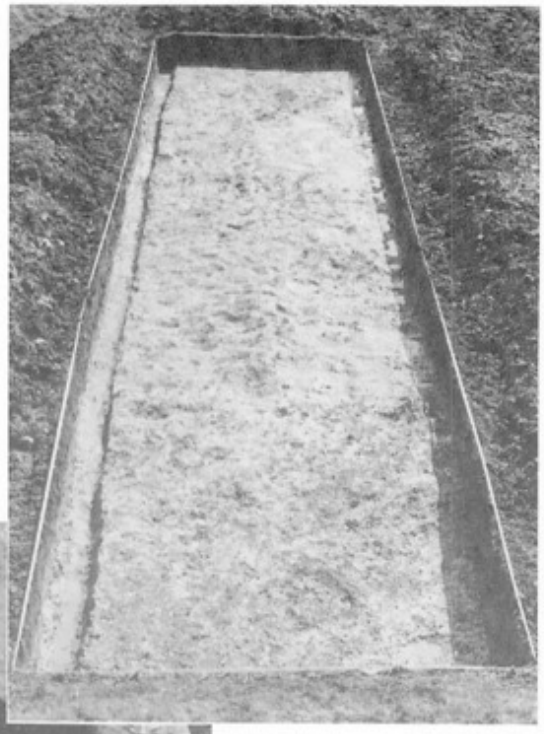
第76－13次調査　南調査区ＳＢ5573（北西から）



第76－13次調査　北調査区（東から）

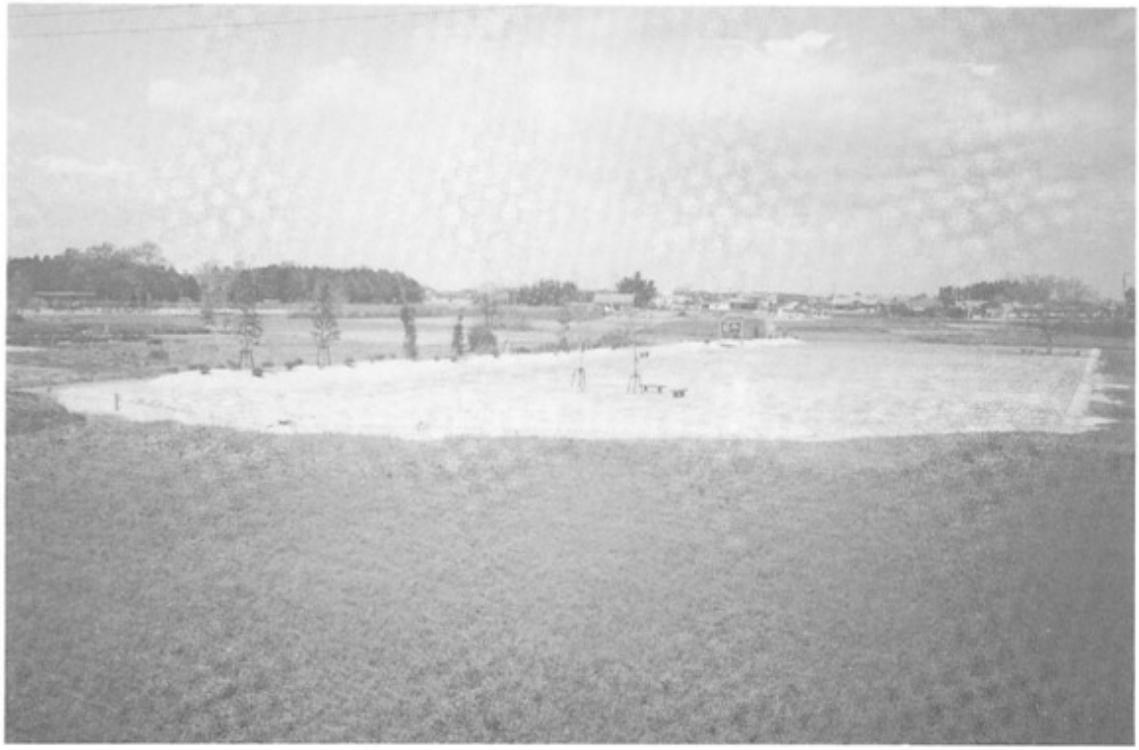


第76－14次調査（西から）



第76－16次調査（北から）

第76－17次調査（西から）



全　景（南から）

三重県斎宮跡調査事務所年報1988

史跡 斎宮跡

——発掘調査概報——

平成元年3月31日

編集発行　三重県斎宮跡調査事務所

印　　刷　光出版印刷株式会社